

木古内町

建川2・新道4遺跡

—津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(4)—

昭和59～61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



土 偶

新道4遺跡C地区出土

口絵 ii



盆状漆器出土状況

新道 4 遺跡C 地区出土



新道 4 遺跡C 地区出土

口絵 iv



調査状況

新道4遺跡C地区

口絵 v



1

1 : 足形付土版

2~4 : 石 刀

2 b-線 刻 画 ?

3 b-棟 の 彫 刻



2



2 b

足形付土版・石刀



3



3 b



4

新道 4 遺跡C地区出土



木製品



新道4遺跡C地区出土

例 言

1. 本書は、日本鉄道建設公団が行う、津軽海峡線(北海道方)建設工事に伴い、(財)北海道埋蔵文化財センターが、昭和 59 年度から 61 年度に亘り実施した発掘調査の内、木古内町建川 2 遺跡と同新道 4 遺跡の一部(A、B、C、F、H地区)に関する報告書である。
2. 調査は昭和 59 年度には調査第二班、昭和 60・61 年度には調査第四班が担当した。
3. 本書の作成にあたっては、主に、土器を大沼忠春、石器等を千葉英一、新道 4 遺跡 C 地区の資料を熊谷仁志、新道 4 遺跡 A・B 地区の資料を立川トマス、自然環境並びに土壤資料を花岡正光、建川 2 遺跡、新道 4 遺跡 F・H 地区の資料を葛西智義がそれぞれ分担して整理し、執筆した。
4. 焼失住居の構造に関して、奈良国立文化財研究所宮本長二郎氏に原稿を依頼した。
5. 花粉分析は北海道開拓記念館山田悟郎氏に依頼した。
6. 放射性炭素による年代測定は京都産業大学山田治氏に依頼した。
7. 動物遺存体の鑑定は早稲田大学金子浩昌氏に依頼した。
8. 出土種子の鑑定は北海道開拓記念館矢野牧夫氏に依頼した。
9. 出土木片の樹種鑑定は北海道開拓記念館三野紀雄氏に依頼した。
10. 出土資料は一括して木古内町教育委員会に保管する。
11. 調査にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所及び北海道教育委員会の指導をいただいた。また、次の機関、人々の協力を賜った。

木古内町教育委員会、木古内町、北海道開拓記念館野村崇、平川善祥、小林幸雄、市立函館博物館千代肇、長谷部一弘、函館市教育委員会田原良信、松前町教育委員会久保泰、上ノ国町教育委員会松崎水穂、七飯町教育委員会石本省三、南茅部町教育委員会小笠原忠久、八雲町教育委員会三浦孝一、柴田信一、知内町教育委員会高橋豊彦、森町教育委員会藤田登、乙部町教育委員会森宏樹、蛭子千代志、札幌市教育委員会加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、帯広市百年記念館佐藤訓敏、標茶町教育委員会豊原熙司、羅臼町教育委員会涌坂周一、標津町教育委員会梶田光明、青森県教育委員会福田友之、青森県埋蔵文化財センター天間勝也、市川金丸、三浦圭介、三宅徹也、成田滋彦、坂本洋一、工藤大、山岸英夫、弘前市教育委員会今井二三夫、八戸市教育委員会工藤竹久、藤田亮一、八戸市立博物館高島芳広、岩手県立博物館熊谷常正、岩手県埋蔵文化財センター工藤利率、大迫町教育委員会中村良幸、滝沢村教育委員会桐生正一、鹿角市教育委員会秋本信夫、福島県文化センター本間宏、弘前大学村越潔、国学院大学小林達雄、宮城学院大学工藤雅樹、北海道大学横山英介、ギャラリー・W・クラウフォード、札幌医科大学大島直行(順不同、敬称略)

目 次

口絵 i 土偶

ii 盆状漆器出土状況(上), 土偶(下)

iii 土製品・石製品

iv 調査状況

v 足形付土版・石刀

vi 木製品

例 言

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	2
4 遺跡の地形環境	2
5 地 層	6
6 発掘区の設定	7
7 昭和 61 年度の調査の概要	7
II 遺構・遺物の分類	9
1 遺 構	9
2 土 器	9
3 石器・石製品	11
4 土 製 品	12
5 そ の 他	12
III 建川 2 遺跡の調査	13
1 遺跡の概要	13
2 遺 構	16
3 包含層出土の遺物	21
4 ま と め	32
IV 新道 4 遺跡 昭和 61 年度 A 地区の調査	45
1 遺跡の概要	45
2 遺 構	45

3	包含層出土の遺物	53
4	ま と め	57
V	新道4遺跡 F地区の調査	65
1	遺跡の概要	65
2	遺 構	67
3	包含層出土の遺物	80
4	ま と め	99
VI	新道4遺跡 H地区の調査	117
1	遺跡の概要	117
2	遺 構	118
3	包含層出土の遺物	122
4	ま と め	144
VII	新道4遺跡 昭和60年度B地区の調査	159
1	遺跡の概要	159
2	遺 構	159
3	ま と め	244
VIII	新道4遺跡 C地区の調査	263
1	遺跡の概要	263
2	沢部分の土層断面と土層の形成について	266
3	遺 構	266
4	遺 物	323
5	新道4遺跡C地区1・2号住居の復原	463
6	新道4遺跡周辺の古植生と堅果について	465
7	ま と め	475
IX	完新世の火山灰について	605
1	試料の処理	605
2	各火山灰の特徴	605
3	火山灰の年代と対比	607
4	ま と め	607

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名 津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査

委託者 日本鉄道建設公団札幌支社

受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査年度・遺跡名・所在地・面積

年 度	遺 跡 名	所 在 地	面 積
昭和59年度	建川1遺跡	上磯町木古内町字建川38-27番地	277 m ²
	新道4遺跡	〃 〃 字建川39-4番地ほか	5,532 m ²
昭和60年度	建川2遺跡	〃 〃 字建川39-6番地	153 m ²
	新道4遺跡	〃 〃 字新道113-240番地ほか	4,034 m ²
昭和61年度	建川2遺跡	〃 〃 字建川39-9番地	1,474 m ²
	新道4遺跡	〃 〃 字建川39-7番地ほか	5,467 m ²

発掘期間 昭和59年 6月8日～昭和59年10月31日

昭和60年 5月7日～昭和60年10月31日

昭和61年 5月7日～昭和61年10月31日

2. 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

(昭和59年度) 理 事 長	中村龍一	(昭和60	理 事 長	植村 敏
専務理事	山本慎一	・61年度)	専務理事	山本慎一
常務理事	藤本英夫		常務理事	藤本英夫
業務部長	横田直成		業務部長	間宮道男
調査部長	竹田輝雄		調査部長	中村福彦
(発掘担当者) 調査第二班長	畑 宏明		調査第四班長	大沼忠春
文化財保護主事	千葉英一		文化財保護主事	千葉英一
〃	長沼 孝		〃	遠藤香澄
〃	熊谷仁志		〃	熊谷仁志
〃	立川トマス		〃	立川トマス
嘱託調査員	花岡正光		嘱託調査員	花岡正光
〃	葛西智義		〃	葛西智義

3. 調査の経緯

青函トンネルに続く北海道側の鉄道建設工事が、日本鉄道建設公団の手で進められてきた。津軽海峡線(北海道方)建設工事である。この工事の計画に伴い、埋蔵文化財包蔵地の分布調査が、北海道教育委員会によって行われた。昭和57年4月には湯の里第1トンネルから木古内駅間の分布調査が開始され、それに続いて、昭和58年10月には木古内町側に所在する埋蔵文化財包蔵地の範囲確認調査が行われた。この結果、建川1遺跡、建川2遺跡、新道4遺跡が、鉄道本線工事区域並びに町道付替などの関連工事区域に及ぶことが明らかとなったため、これらについて事前の発掘調査が実施される運びとなった。

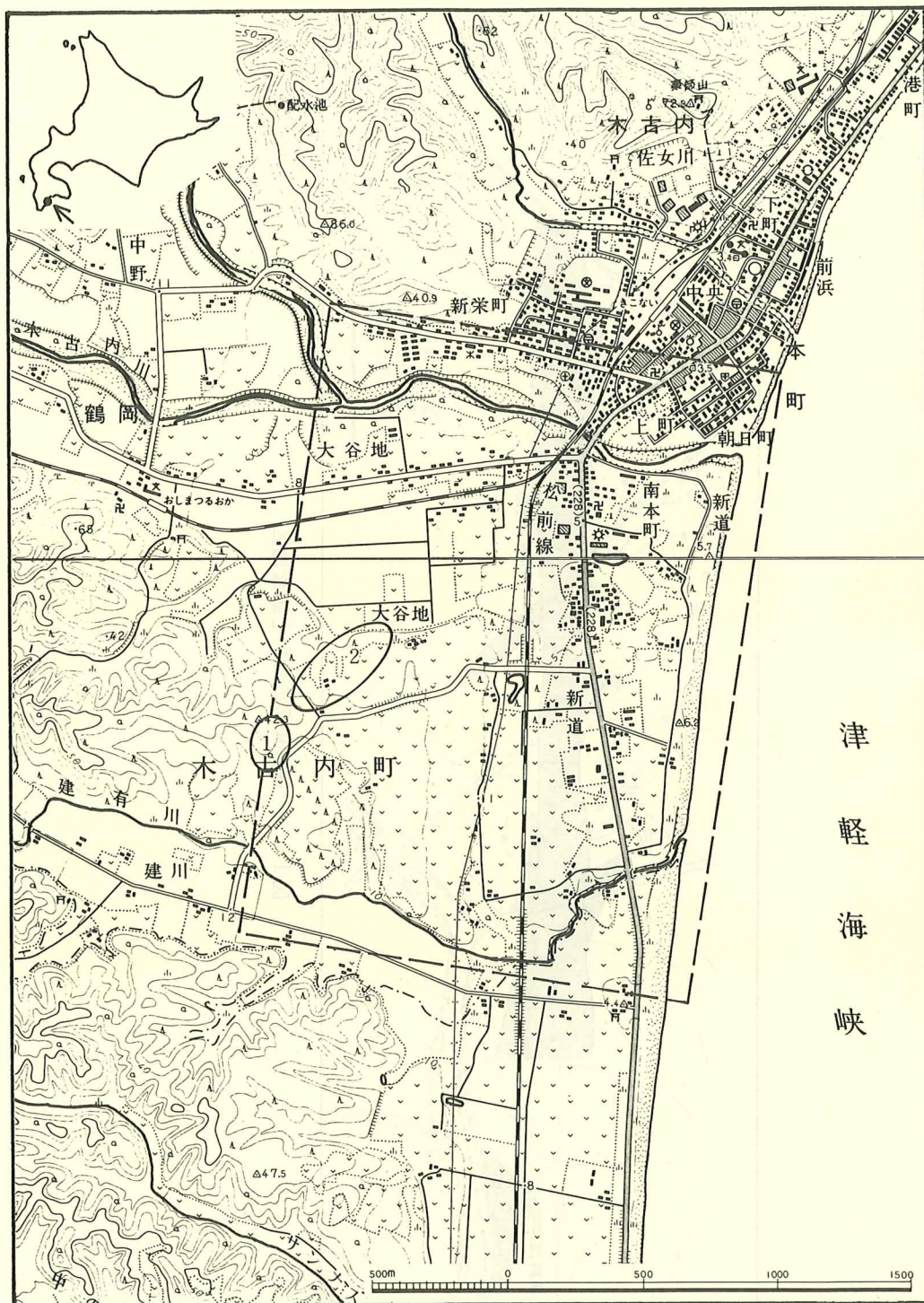
津軽海峡線(北海道方)建設工事に伴う発掘調査は昭和58年度から開始され、工事の進行に合わせて、知内町側から進められた。木古内町側の調査は昭和59年度に始まり、用地内の住宅の移転時期や、工事の進行に合わせて、まず、昭和59年度には、建川1遺跡と新道4遺跡の一部、A・B・C地区の調査を行った。昭和60年度には建川2遺跡の小範囲と、新道4遺跡のA地区・B地区・C地区の続きと、D地区の小範囲並びにE地区の調査を行った。昭和61年度には、建川2遺跡の続きと、新道4遺跡のA地区・D地区の続きの部分と新たに名づけたF・G・H地区の調査を行い、現地での作業を終了した。

本書では、建川2遺跡と、新道4遺跡のA地区の続き、B地区の続き、C地区、F地区、H地区の調査結果を報告する。(大沼忠春)

4. 遺跡の地形環境

遺跡周辺では、海岸から内陸へ向って、標高5m以下の沖積低地、数段の海成・河成段丘、標高100~150mの定高性のある丘陵性山地が発達している。以下、主に段丘について触れる。

遺跡は、標高約40mの段丘面(以下、第1段丘)、標高約20mの段丘面(以下、第2段丘)、及びこれらの間の緩斜面上に立地している。図I-3に遺跡附近の地形分類図を示す。段丘を上位の面から下位の面へ五段に区分した。第1段丘は標高約40m、開析が進んで平坦面の保存は悪く、定高性のある丘陵となっている。A地区トンネル工事部分の地質断面では、段丘構成物は主にチャートから成る分級の良い細礫大の円礫で、ラミナが発達しているのが観察され、海成段丘と考えられる。降下火山灰起源の黄褐色の「ローム」(層厚約500cm。以下、「ローム」とのみ記す)に覆われる。第2段丘は標高20m前後、木古内周辺で最も発達の良い地形面である。山口(1978)の ct_1 面、宮内・八木(1984)の M_1 面に相当する。段丘面上には波状の微起伏があり、特に南北に走る小丘状の高まりは、活断層(活断層研究会、1980。宮内・八木、1984)の現われであろう。段丘構成物の主体はチャートを主とする分級の良い細礫大の円礫で、海成と考えられる。この堆積物は、段丘の南・北端の地域では灰色の硬質頁岩の円礫層と指交している。灰色の硬質頁岩は、現河床堆積物中に一般に認められるもので、第2段丘は一部河成段丘に漸移しているものと考えられる。本段丘は「ローム」(層厚約200cm)に覆われる。遺物や遺



図I-1 遺跡の位置 (1:建川2遺跡 2:新道4遺跡)

この図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「木古内」「渡島知内」を利用したものである

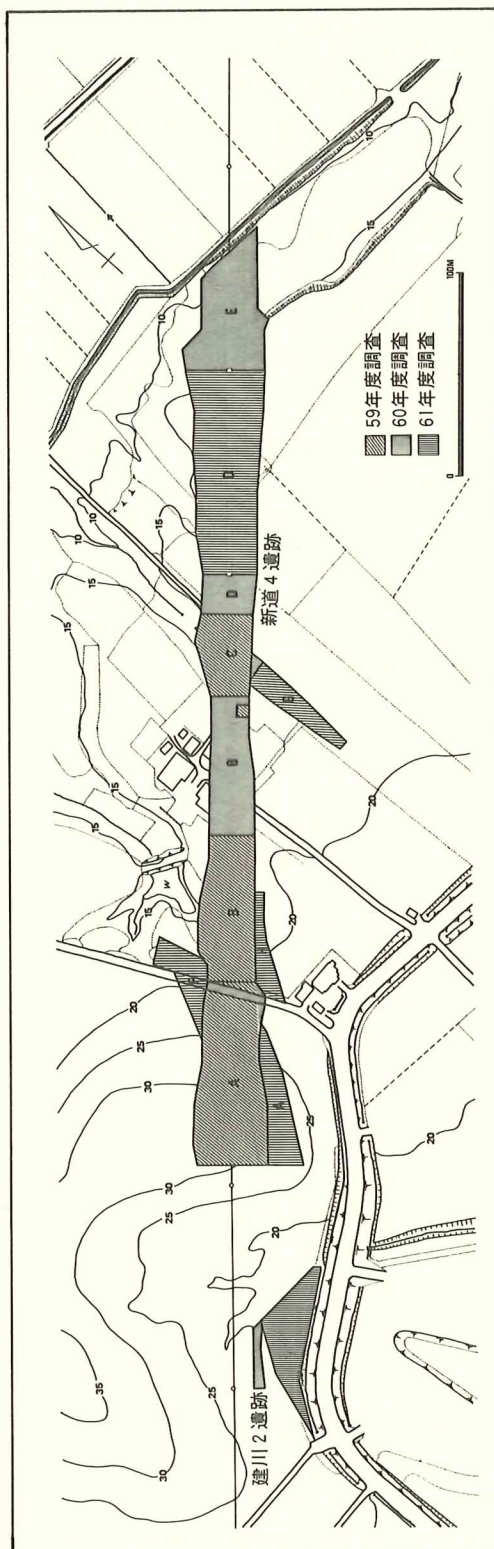


図 I - 2 遺跡周辺の地形と調査地区

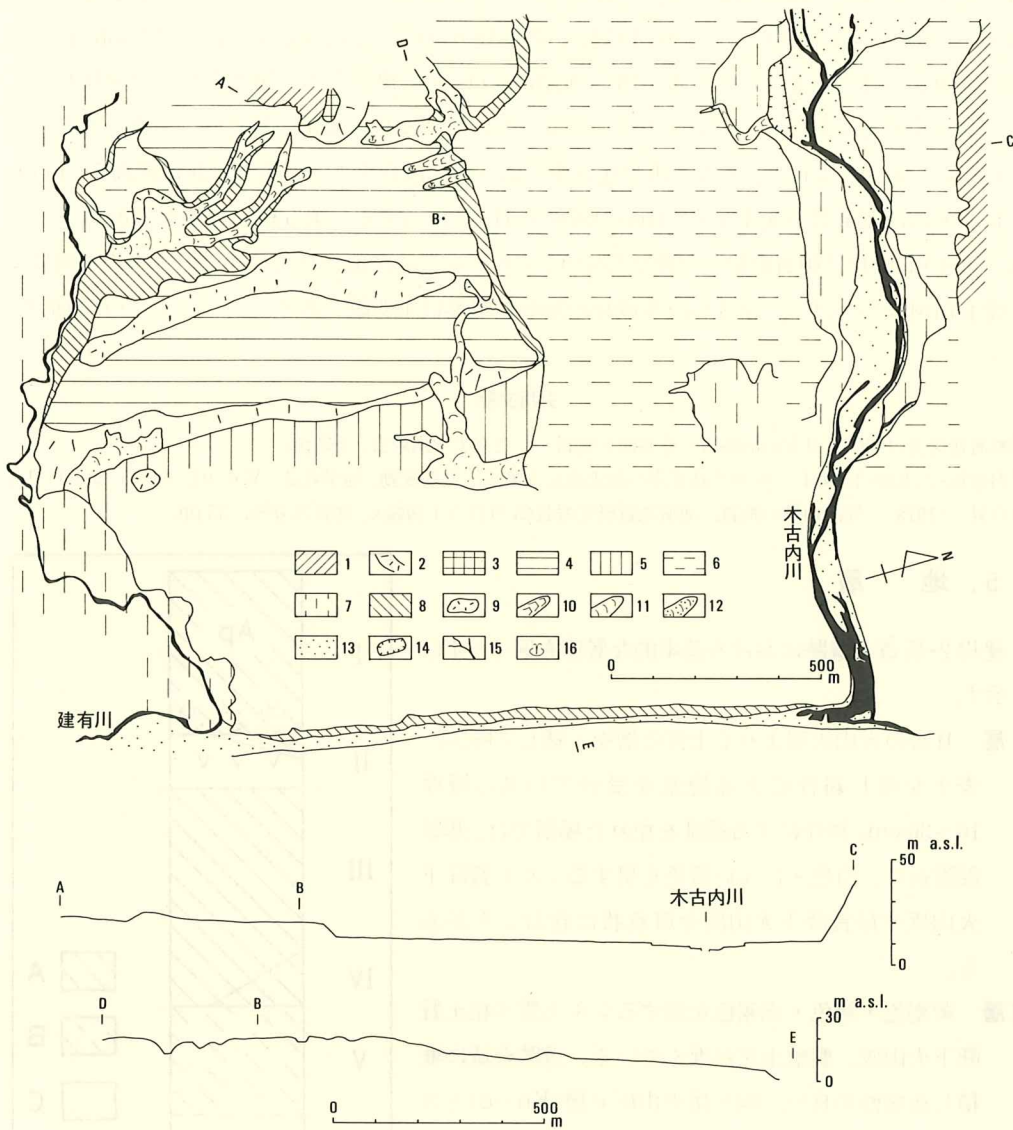


図 I - 3 遺跡附近の地形分類図

(発掘範囲はほぼ A から B に至る地域。本図は図 I - 1 の破線で囲まれた範囲を示す)

- 凡例 1: 山地急斜面 2: 緩斜面 3: 第1段丘 4: 第2段丘 5: 第3段丘
 6: 第4段丘 7: 第5段丘 8: 急崖(段丘崖等) 9: 小丘状の高まり
 10: 横断形が $\sqcap$ の谷 11: 横断形が $\cup$ の谷 12: 谷底平野
 13: 冲積低地 14: 凹地 15: 河道 16: 湧水

I 調査の概要

構の分布の主体は本段丘面上である。段丘面は、横断形が $\sim$ や $\sqcap$ の小谷で切られ、谷壁からは湧水がある。谷底は湿地である。第3段丘は標高10 m以下で、海岸沿いの沖積低地面に漸移あるいは面下に没するようにみえる。山口(1978)の ct_2 面に相当する。第2段丘とは漸移している。本段丘面上にも「ローム」をのせているので、第2段丘と本来一続きの面であったのかもしれない。第4・5段丘は、木古内川や建有川に沿う河成段丘である。第4段丘は標高5~10 m、段丘面上には泥炭層が発達する。山口(1978)の rt_5 に相当する。第5段丘は標高5 m以下である。第4・5段丘は硬質頁岩の円礫から成り、「ローム」には覆われていない。木古内川河口から建有川河口へかけて、第3・4・5段丘の地形の境界は不明瞭である。(花岡正光)

引用文献

活断層研究会(1980):日本の活断層—分布図と資料—, 東京大学出版会, 363 pp.

宮内崇裕・八木浩司(1984):松前半島東岸の海成段丘と第四紀地殻変動. 地学雑誌, Vol. 93, No. 5, pp. 1-16.

山口昇一(1978):知内地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 55 pp.

5. 地 層

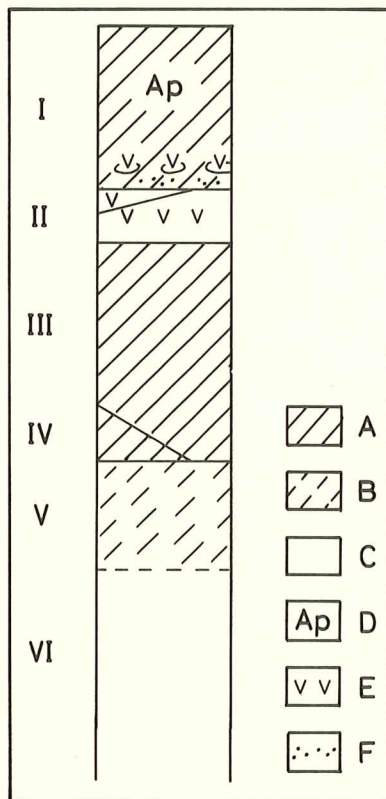
建川2・新道4遺跡における基本的な層序を図I-4に示す。

I層 II層の火山灰層よりも上位の層を一括して呼ぶ。

表土を成し耕作による攪乱を受けている。層厚10~30 cm。耕作による攪乱を免れた場所では、基底部附近に、白色・にぶい橙色を呈するシルト質降下火山灰や砂質降下火山灰を斑点状に含むことがある。

II層 黄褐色・褐色・赤褐色を呈するシルト質~粘土質降下火山灰。腐植土化が進んでいる。遺跡全域に堆積し連続性が良い。駒ヶ岳火山灰e層(Ko-e)とされていた(北海道開拓記念館、1976等)が、場所によっては二層に細分される。層厚5~10 cm。建川2遺跡では沢部を埋積し、泥炭層の無機質分を構成する。

III層 上部は黒色~黒褐色のシルト質腐植土。下部は黒褐色~暗褐色の粘土質腐植土で、VI層の黄褐色ロームの粒(砂~細礫大)を含む。本遺跡における遺物包含層の主体を成し、縄文時代前期~同晩期の遺物が出土する。層厚20~40 cm。



図I-4 基本層序模式図

凡例 A: 黒色~暗褐色腐植土
B: 褐色~濁黄褐色腐植土(「漸移層」)
C: 黄褐色粘土(「ローム」)
D: 耕作土
E: シルト質降下火山灰
F: 砂質降下火山灰

IV層 黒色粘土質腐植土。段丘面を刻む小谷の谷頭附近で認められることがある。縄文時代前期の遺物が出土する。層厚 10~15 cm、局所的に 50 cm に達する。建川 2 遺跡では確認されていない。

V層 褐色~濁黄褐色粘土質腐植土。いわゆる漸移層で、縄文時代前期の遺物が出土する地点もある。建川 2 遺跡では遺物は出土していない。層厚 10~20 cm。

VI層 黄褐色粘土。更新世の火山灰起源のいわゆる「ローム」。上記の遺物包含層の地山を成す。昭和 61 年度 D 地区では、本層上部から旧石器時代の遺物が出土した。層厚約 200 cm。

VI層の下位は、第 2 段丘を構成する礫層である。I 層と II 層の完新世の降下火山灰については、第 IX 章に詳しく述べる。旧石器時代の遺物包含層であるローム層の詳細は次年度に報告する。

(花岡正光)

引用・参考文献

北海道開拓記念館(1976): 札幌—北海道上磯郡木古内町における縄文時代晩期土墳墓の調査一。北海道博物館協会, 85 pp.

北海道火山灰命名委員会(1982): 北海道の火山灰, 23 pp.

6. 発掘区の設定

建川 2 遺跡と新道 4 遺跡は立地を異にするので、発掘区の設定はそれぞれに行ったが、いずれも、鉄道予定路線のセンターラインを基準にしている。建川 2 遺跡ではセンターラインを A ライン、新道 4 遺跡では M ラインとし、木古内駅側へ向って建川 2 遺跡は右側へ 4 m を B ラインとし、新道 4 遺跡では左側 4 m を L ライン、右側 4 m を N ラインとして順次 4 m ごとのラインを設定した。次にそれらのラインに直交するラインを 4 m ごとに設定した。このラインは、建川 2 遺跡についてはセンターライン上 12 k 300 m を 0、新道 4 遺跡では 12 k 600 m を 0 とし、それぞれ木古内駅側へ向って 1、2、3 と数字で示した。このようにして区画された 4 m 四方の区画については、周囲の 4 点のうち最も順位の若い記号をそのまま区画の記号としている。例えば M-2、M-3、N-2、N-3 の 4 点で囲まれた区域は "M-2" 区となる。

(立川トマス)

7. 昭和 61 年度の調査の概要

(1) 建川 2 遺跡

昭和 60 年度に調査した鉄道本線部分の東南側で、町道付替工事に関わる部分を調査した。この遺跡は建有川左岸の小沢に沿う遺跡であるが、調査地区はその沢頭付近にあたる。比較的小規模な遺物のまとまりが認められ、縄文時代後期前葉のものが主体をなす。遺物は縄文時代早期から晩期の土器、石器など、自然礫を含めて約 4,000 点が出土している。遺構として、人為的なものか疑いは残るがピット(1)と小ピット(18)が調査されている。なお、調査区の北西部では西から東へ流れる幅 4~5 m の沢が確認され、その泥炭層からは多数の自然木が発見されて

I 調査の概要

いる。

(2) 新道 4 遺跡

木古内川右岸の段丘の縁辺に位置し、縄文時代早期から晩期の遺物や遺構が発掘されていたが、今年度の調査で、旧石器時代の遺物も出土することが知られた。知内町側から A、F、H、G、D の 5 地区について調査を実施している。

A 地区

今年度の調査区は、昭和 59 年度に実施した鉄道本線部分の東南に隣接したところで、町道付替工事部分にあたる。発見された遺構はフラスコ状ピット(3)とピット(3)で、前者はいずれも深さが 1.5 から 2 m もある大型のもので、このうち墳底中央部に円形の小ピットを有するものが 2 例ある。フラスコ状ピットの配列は、59 年度の調査例に続く状態で、丘陵の上部をとりまくように発見されている。遺物は縄文時代前期から晩期の土器、石器など、自然礫を含めて約 800 点出土している。

F 地区

昭和 59、60 年度に実施した鉄道本線部分の A、B 両地区の北西側に隣接するところで、町道付替工事部分である。丘陵斜面から段丘平坦部にかかる位置にあり、遺構として、住居跡(2)、ピット(8)、焼土(2)が調査されている。旧町道の下から発見された縄文時代中期末葉の住居跡は、床面に多量の炭化材があり、焼失したものとみなされる。遺物は縄文時代早期から晩期の土器石器など、自然礫を含め約 5,400 点が出土している。

H 地区

昭和 59 年度に実施した鉄道本線部分の B 地区の東南側に隣接し、工事用道路建設地区である。先の B 地区の沢につながる斜面から段丘平坦部にかかる位置にあり、ピット(1)と小ピット(81)、焼土(10)の遺構が調査されている。遺物には、縄文時代早期から後期の土器、石器に加えて、旧石器時代の石刃が 1 点認められた。自然礫を含めて約 12,500 点出土している。斜面にかけて、二次堆積土が認められ、背後の段丘平坦面には遺構の存在が予測される。

G 地区

昭和 59 年度に実施した C 地区の東南に隣接し、アンダーパス工事にかかる部分で、標高 17~18 m の段丘平坦面に位置する。遺物は縄文時代早期から晩期にわたって、石刀、土・石製品を含めて、土器、石器等約 167,000 点出土した。自然遺物にはシカなどの獣骨、サメの歯、チョウザメのウロコ、サケ、ウグイなどの魚骨、炭化種子が出土している。遺構は縄文時代中期、後期の竪穴住居跡(9)、フラスコ状ピットを含むピット(46)、縄文時代晩期の埋設土器(3)、柱穴様の小ピット(40)、焼土(19)が発見されている。また、昭和 60 年度に調査した B 地区の盛土の続きが調査区南西部で発見された。

D 地区

昭和 60 年度に調査した D 地区に続く鉄道本線工事区の部分、100 m の区間である。東側と西側に沢が入り込んでいて、この沢を取りまく段丘平坦面に遺構が認められた。住居跡(5)、フラ

スコ状ピットを含むピット(64)、焼土(9)で、とりわけDH-13・14の住居跡は長径が8~9mの比較的大型のものである。遺物は縄文時代早期から晩期までの土器、石器など約46,000点におよび、旧石器時代のもの約24,000点、計約70,000点が出土している。

旧石器時代の遺物の集中的に出土する地区は、L-86・87グリッドを中心とするものと、N・O-82グリッドを中心とするものとの2箇所が発見されているが、後者は、その大部分がDH-13の縄文時代の住居跡によって壊されている。(大沼忠春)

II 遺構・遺物の分類

1. 遺 構

掲載した遺構には、住居跡、ピット、フラスコ状ピット、Tピット、小ピット、焼土という名称を与えている。これらの区分はおおむね以下の通りである。

住居跡：人がその内で生活しうる広さを持つ規模の堅穴で、人が生活を営んだ痕跡を見出せるものを指す。堅穴内部には、炉があり、周囲に柱穴が配置されているものが一般的である。

ピット：住居以外の堅穴で、人がその内部で生活を営んだ痕跡を持たないものを指す。墓やそれに類似するものは、これに入る。また、形態の特殊なフラスコ状ピット、Tピットは別記するものとする。小形のものを小ピットと称する。

フラスコ状ピット：ピットの内に入るものであるが、平面形では、壙口が壙底より小さく、形態的には袋状をなし、断面形では台形状のものを指す。

Tピット：ピットの内に入るものであるが、平面形が楕円形（小判形を含む）ないし長円形のもので一般におとし穴といわれているものを指す。

焼土：住居跡内床面で確認されたもの以外で、多くは焚き火跡などの地床炉がこれに入る。

これらの構造の記述にさいしては、記号によって表示している。住居跡：H、ピット、フラスコ状ピット：P、Tピット：TP、小ピット：SP、焼土：F、なお、住居跡に伴わないとみなされる石囲炉をFSとする。さらに、これに各調査区の頭文字A、B、C、F、Hを付している。例えばA地区で確認された1号ピットはAP-1となる。また、本書中の遺構図、分布図等はすべて北を上側にしているが、Mラインに直交する数字を付したラインに対して、N-39°Eが磁北となる。遺構の規模は確認面における「壙口の長径×短径／壙底の長径×短径／深さ」を単位mで示した。(立川トマス)

2. 土 器

本書で報告する資料には、縄文時代早期から晩期までのものがある。便宜的にI群を早期、II群を前期、III群を中期、IV群を後期、V群を晩期相当のものにあて、それぞれに、二、三の

II 遺構・遺物の分類

類別を設けて記載する。

I 群土器に属するものには、前半期の貝殻文土器と後半期の縄文の施された土器とがあり、前者をA類、後者をB類とする。

I 群A類土器は、松前町白坂各地点の遺跡の調査⁽¹⁾などから、尖底を主とするものと、平底を主とするものの二者に区分されそうである。F地区から出土した資料は尖底をなすものかと思われる。

I 群B類土器は、東釧路II・III式、コッタロ式、中茶路式、東釧路IV式に相当するものが、道南地方に認められる⁽²⁾が、C地区出土のものは東釧路IV式に相当するものとみなされる。

II群土器は、前半期の縄文の施された尖底土器の主体となるグループと、円筒土器下層式に相当する後半の時期のものにと大きく2分される。前者をA類、後者をB類とする。

II群A類土器には、桔梗野式、石川野式、春日町式、大津2・3群土器が知られている。C地区から本類土器が少量出土しているが、これは大津3群に相当するものかとみなされる。

II群B類土器には、円筒土器下層各式に相当するものが道南地方には認められる。本書で報告する資料には、c式相当のものと、b式に相当するかとみられるものが少量あり、d式に相当するものが多数存在する。c式およびそれ以前のものをB₁類、d式相当のものをB₂類として区分する。従来下層b式に相当するとみなされていたサイベ沢I式の類は、c式に相当し⁽³⁾、c式の内でもむしろ新しい段階と考えられるに至っている。II群B₁類にはサイベ沢I式が多い。

III群土器には円筒上層a、b式、サイベ沢VII式、見晴町式、あるいは森越式に相当する前半期、榎林式の後半のもの、大安在B式、ノダップII式、煉瓦台式に相当する後半期のものがある。前者をA類、後者をB類とし、特に、後者については、各調査区の資料に特色が認められることから、榎林式に相当するものをB₁類、大安在B式からノダップII式に相当するものをB₂類、煉瓦台式に相当するものをB₃類として区分する。これらに伴うとみなされる大木系土器群もこれに含めることとする。

IV群土器には天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当する前葉の土器群、ウサクマイc式、手稲式、鯢淵式に相当する中葉のもの、堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当する後葉のものの3者がある。本書では、前葉のものをA類、中葉のものをB類、後葉のものをC類として区分する。さらにA類については資料が多く、天祐寺式、涌元式に相当するものをA₁類、トリサキ式、大津式、白坂3式の類をA₂類として細分する。なおC地区出土のC類には、突瘤文が顕著には認められず、堂林式とするよりも、十腰内V式とするのが妥当かと思われるものがあり、今後、検討を要することとなろう。

V群土器には、大洞各式に相当するものが道南地方に認められる。本書ではB、B-C式頃に相当するものをA類、C₁、C₂式に相当するものをB類、A、A'式頃に相当するものをC類として区分する。C地区からB、C類の資料が多く出土している。

以上の大まかな区分によって示すこととするけれども、各地区の出土状態によっては、さら

に細部の検討が行われている。

図示にあたっては、実測図は1:4、拓本は1:3を原則としているが、変則的なものもありそれぞれにスケールを付けている。なお、C地区の土器の記載にあたっては復元実測土器の番号を円で囲っている。

(大沼忠春)

註

- (1) 久保泰ほか(1983)『白坂』松前町教育委員会
- (2) 東釧路II式相当のものとして西桔梗式をあてることができる。青森地方の早稲田4類に相当するものとみなされる。東釧路III式、コッタロ式は、早稲田V類に相当するようである。早稲田5類の後、東釧路IV式の特に新しい段階のものが青森地方に進出している。
岡島格(1974)「土器に関する2・3の問題点」『西桔梗』pp. 339~341
久保泰(1984)「土器」『松前町郷土資料館調査報告』1. pp 44~48
- (3) 大沼忠春(1986)「道南の縄文前期土器群の編年について(II)」『北海道考古学』22
北海道埋蔵文化財センター(1986)「木古内町建川1・新道4遺跡」『北海道埋蔵文化財センター調査報告書』33

3. 石器・石製品

石器は器種別の大分類にとどめ、一器種における記号による細分はおこなっていない。今年度報告分について、剥片石器には石鏃、ドリル、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付ナイフ、スクレイパー類、楔形石器、三脚石器、トランシェ様石器、異形石器などがあり、礫石器には石斧、礫器、たたき石、すり石、くぼみ石、石鋸、石錘、砥石、石皿、台石、石冠、石刀などがある。このほかに石核(コア)、剥片・石屑(フレイク・チップ)、擦切り痕ある礫、自然礫などがある。表のUフレイクはutilized flake、Rフレイクはretouched flakeのことであり、礫△としたものは、礫石器の破損品・碎片の可能性のあるもの、原石・荒割礫(頁岩・めのう・チャート・緑色泥岩など剥片石器や石斧などの石材として用いられるもの)、軽石および明瞭な使用痕は認められないが有意と考えられるものなどである。

石製品には玉類、垂・装飾品などがある。

なお、表における石材の略号は次のとおりである。

Aga.	(Agate)	めのう	And.	(Andesite)	安山岩
Che.	(Chert)	チャート	Dac.	(Dacite)	デイサイト
Dio.	(Diorite)	閃緑岩	Gn.	(Gneiss)	片麻岩
G.P.	(Granite Porphyry)	花崗斑岩	Gr.	(Granite)	花崗岩
Gr. Mud.	(Green Mudstone)	緑色泥岩	Jad.	(Jade)	ひすい
Mud.	(Mudstone)	泥岩	Ob.	(Obsidian)	黒曜石
Per.	(Peridotite)	橄欖岩	Pum.	(Pumice)	軽石
Q. P.	(Quartz Porphyry)	石英斑岩	Qua.	(Quartzite)	珪岩
Qz.	(Quartz)	石英	Rhy.	(Rhyolite)	流紋岩
Sa.	(Sandstone)	砂岩	Scha.	(Schalstein)	輝緑凝灰岩

II 遺構・遺物の分類

Schi.	(Schist)	片岩	Sh.	(Shale)	頁岩
Sl.	(Slate)	粘板岩	Tal.	(Talc)	滑石
Tu.	(Tuff)	凝灰岩	Tu. Sa.	(Tuffaceous Sandstone)	凝灰質砂岩

4. 土製品

土製品には、土偶、足形付土版、土器片を利用した有孔・無孔の円盤、玉、耳飾、鐸形土製品などがある。

5. その他

上記の他に、木製品、炭化材、漆器、アスファルト塊、動物および植物の遺存体が出土している。
(千葉英一)

Ⅲ 建川 2 遺跡の調査

1. 遺跡の概要

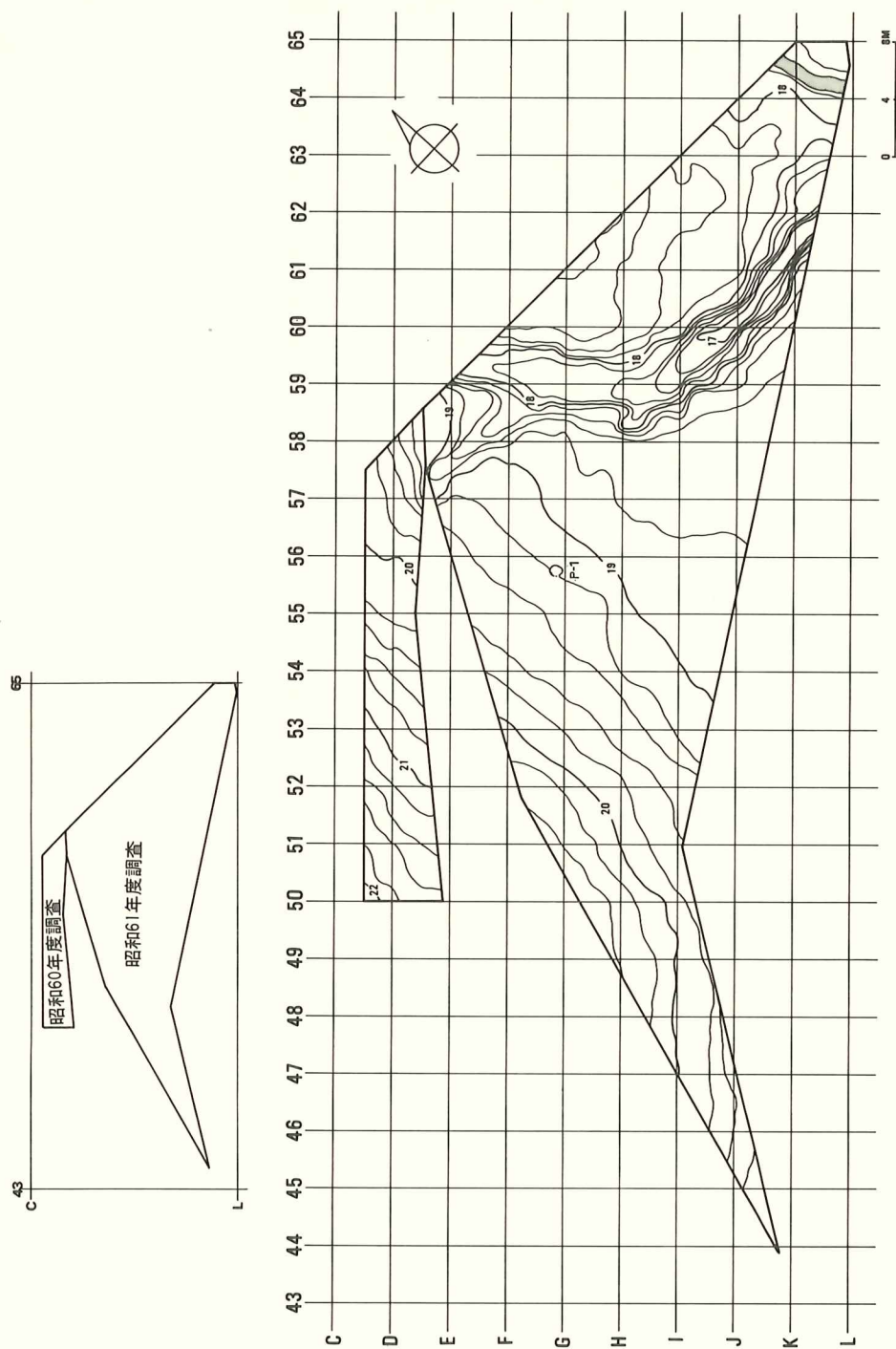
建川 2 遺跡はなだらかに傾斜する標高 20 m 前後の海岸段丘面に立地している。調査地区は新道から建川に通ずる道路の山寄りの所で、北側と東側は標高 42.3 m の三角点のある丘陵地になっている。東側の丘陵地には昭和 59 年度に調査された、新道 4 遺跡 A 地区(立川他 1986)がある。遺跡内には、北側丘陵地の中腹に始まる 2 本の小沢があり、南側にのびている。

地表は一面、杉の植林地であった。層序は層位図に示されるようにⅡ層の火山灰がほぼ全域に残っていた。その下はⅢ層・Ⅴ層・Ⅵ層の安定した堆積を示しており、抜根による攪乱以外の大きな削平や耕作を受けてはいないと思われた。基本層序は新道 4 遺跡と同様であるが、いくぶん違いのみられるところもある。新道 4 では、細かなローム粒のはいるⅢ層が広く認められたが、本遺跡のⅢ層にはローム粒は認められなかった。これは遺構の多少と関連するものと思われる。また、沢部分に堆積していたⅡ層に相当する層は、植物質を多く含む泥炭層の状態であった。色調ではⅡ'aとした灰褐色のものとⅡ'bとした青灰色のものとに分けられたが、分析結果では両者とも平坦面のⅡ層に対比された。層位図にある 1~3 までの層は自然営力による土壌攪乱、4~6 までの層は沢のへり部分に見出され、崩落や亀裂部への汚れの浸透・流水による脱色作用等を受けた土層と考えられる。

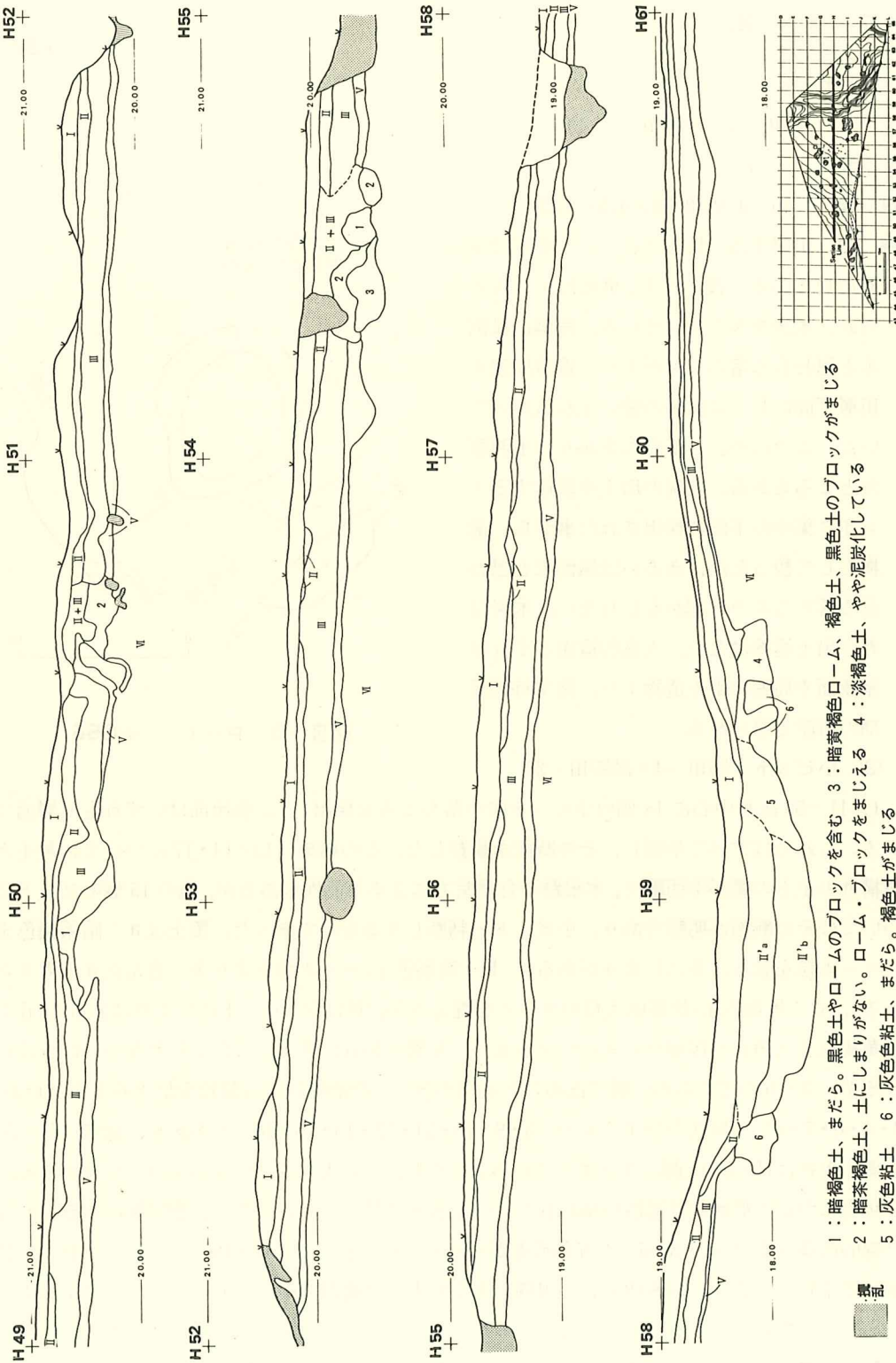
調査は C~D-50~58 区にかかる 153 m² の範囲を昭和 60 年度に、D~K-44~64 区にかかる 1,474 m² の範囲を 61 年度に行った。その結果、遺構ではピット(1)と小ピット(18)が検出され、遺物では土器片や石器・石片類、あわせて約 4,000 点が出土した。遺構、遺物ともに発掘区のはぼ中央部分(F~I-55~57)に集中している。ピット・小ピットの時期はともに縄文時代後期前葉の所産と思われる。得られた土器片(992 点)の大半も後期前葉のⅣ群 A₂ 類であり、他には前期後葉(Ⅱ群 B 類)・中期前葉(Ⅲ群 A 類)・晩期(Ⅴ群 C 類)のものが少数出土した。石器は石鏃・スクレイパー・すり石等出土したが、半数は U・フレイク、R・フレイクとされる不定形の石器である。また、F-55 区では同一母岩を粗割したと思われる頁岩剥片の集中が認められた。

この他、沢部分のⅡ層には多くの木が腐らずに残っていたが、明瞭に加工痕の認められる例はなく、出土状況からは流木に類するものと判断された。それらを取り除いた沢底は、青灰色を呈する緻密な粘土で、その上面に土器片やフレイクの出土するところもあった(図版Ⅲ-3-2)。このことから沢と遺跡・遺物の係りが推測されたが、沢底の遺物が沢べりの崩落によって平坦面部分から落ちた可能性もあり、これらの遺物が人的な活動の結果を示すものではないと思われる。

III 建川 2 遺跡の調査



図Ⅲ—1 遺跡の地形と調査範囲



図III-2 遺跡の土層

2. 遺 構

+F56

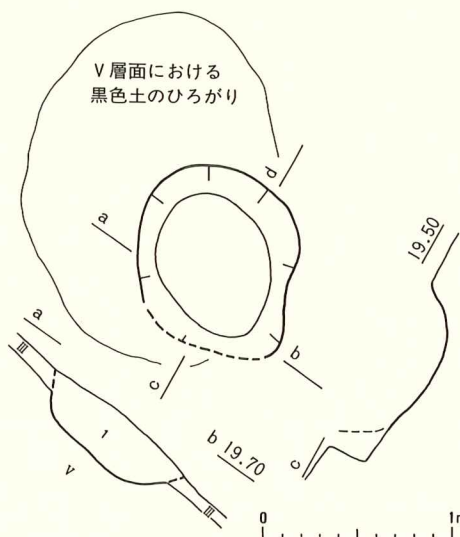
(1) ピ ッ ト

P-1 (図III-3・図版III-5-1)

位 置 F-55

規 模 1.06×0.89/0.78×0.57/0.29

特 徴 III層下面で検出された。平面形は不整形円形である。覆土は1：黒褐色土で占められ、木炭を多く含んでいる。南側に風倒木と思われる落ちこみがあり、遺構周辺もIII層下面にしては黒味の強い土が広がっていた。このため、一部立ちあがりの不明瞭なところもある。木炭の出土や後述するフレイク集中の下位に検出された事から、遺構として扱ったが、あるいは風倒木と思われる落ちこみの一部かもしれない。木炭以外の出土遺物はない。人為的遺構とすれば確認面や周囲の出土遺物より、縄文時代後期の所産と思われる。



図III-3 P-1 +G56

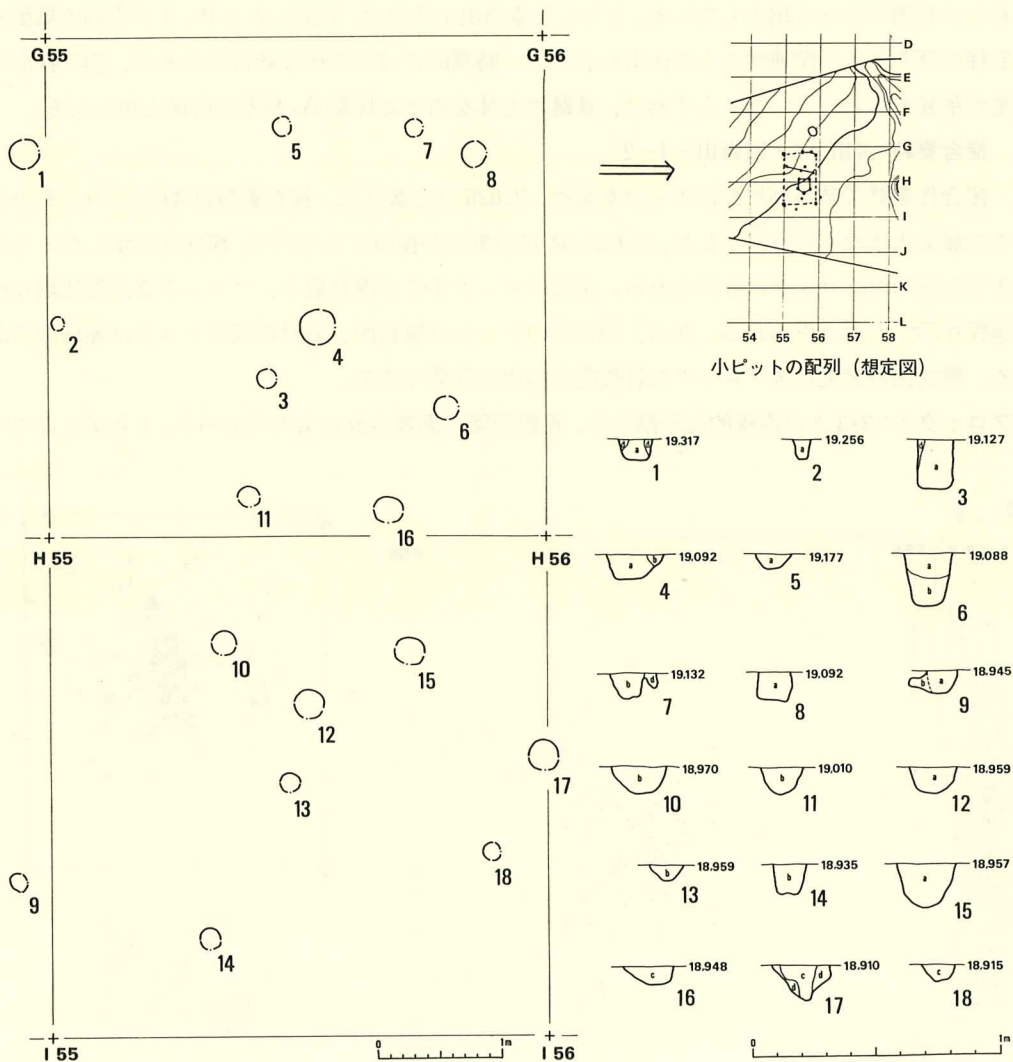
(2) 小ピット (図III-4・図版III-2)

G・H-55区を中心に18個の小ピット様の落ちこみを検出した。検出面はいずれもV層面である。これらはすべて半割し、その断面を観察した。この結果、13・14・17については覆土と遺構外の土との境が不明瞭で、木根跡や自然営力による可能性もあるが、他の15個のピットについてはその断面が明瞭であり、小ピットと判断しうるものであった。覆土はa：暗茶褐色土(ローム粒を含み、土にしまりがある)、b：暗褐色土(ローム粒をより多く含んだaと考えられる)、c：黒褐色土(比較的大粒のロームを混えるが、量は少ない。土にしまりはある)、d：暗黄褐色土(汚れたIV層ロームといえる土で、V層と同様に考えうるかもしれない)に分けられるが、a・bのどちらか一層で占められる例が多い。断面形状では筒状を呈するもの(1・2・3・4・6・7・8)と碗状を呈するもの(5・9・10・11・12・15・16・18)とがあり、前者はG-55区側、後者はH-55区側にまとまっている。ただし、その大きさはいくぶんばらつきがある。

現場において形状に共通性の窺われたものを仮りに結んでみたところ、想定図にあるような直線的に並ぶもの(2・3・6)と五角形を形づくるもの(10・12・15・16)とが認められた。15個に限定してみると、1・8・9・18を四隅とする長方形の範囲の中に、先のおさまるようである。遺物を出土する小ピットはなかった。小ピット群と沢とのあいだには、縄文時代後期前葉の土器を出土する面が認められ、小ピット群の西側では遺物が激減する。後期以外の土器

はまとまった出土状況を示さない事や、I～III層上面で確認されるような、より後の時期の掘りこみもなかった事から、この小ピット群は縄文時代後期前葉の所産と考えられる。

なお、G・H-55区以外においても、小ピット様のおちこみ（図版2-5）はいくつか見られた。それらを半割したところ、覆土では小ピット群と類似するものが見出されたが、いずれもIV層ロームとの境が不明瞭であった。また、明らかに木根跡と判断されるものを除いて、1グリットから3個以上検出された例はなかった。この事からもG・H-55区に集中する小ピットにはまとまりが窺われ、作業用の小屋や棚等の何らかの人為的構築物があったように思われる。



図Ⅲ-4 小ピット群

(3) 石材集中 (図 III-5・図版 III-4)

出土状況 F-55 区では 2,333 点に及ぶ剥片類が出土している。左下図は F~G-55 セクションに遺物を投影したものである。層の傾斜を考慮して、層位図を 10 cm 下げてあるが、現場で確認した出土状況との大きな違いは現われていない。剥片は III 層上面、あるいは II 層にかかって出土しはじめ、III 層下位にまで認められた。レベル幅は約 20 cm である。層位図では V 層の位置にもみられるが、これは遺物周囲の III 層がくぼんだ状態であり、投影すると V 層に位置してしまうためである。下図中央は確認面での剥片出土位置、下図右は最下面での出土状況である。後者のいくつかのものは、層位図では白マルで落している。上面の遺物は比較的小さな剥片であるが、最下面では残核様の剥片やたたき石の破片 (下図右) も認められた。剥片類はその大半が同一母岩より剥離されたものであるが、20 cm のレベル幅をもち、本来は遺物の認められない II 層中からも出土している。こうした遺物出土状況は、下位にある P-1 や南側の風倒木痕様の落ちこみと関連するものかもしれない。時期的には不明確な状況であるが、剥片採取作業が単独で行われていないとすれば、遺跡の主体を占める IV 群 A₂ 類期の所産と思われる。

接合資料 (図 III-6・図版 III-4-2)

接合作業終了時の剥片類はチップを含め、2,026 点を数えた。接合資料は 44 点あり、そのうちの最も大きなものを図示した。これは 54 点の剥片が接合したもので、模式図に示したような大きな三つのブロックに分けられる。主にブロック 1・2 が礫皮取り、ブロック 3 が剥片取りの過程を示すものと思われる。なお、図上部のドットは原石面、石材内部のドットは節理面である。模式図の黒丸は各ブロックに特徴的な打点の位置である。

ブロック 1:2・3 とは直線的に分割され、粗割段階で剥離されたものであろう。1 b がとびでて

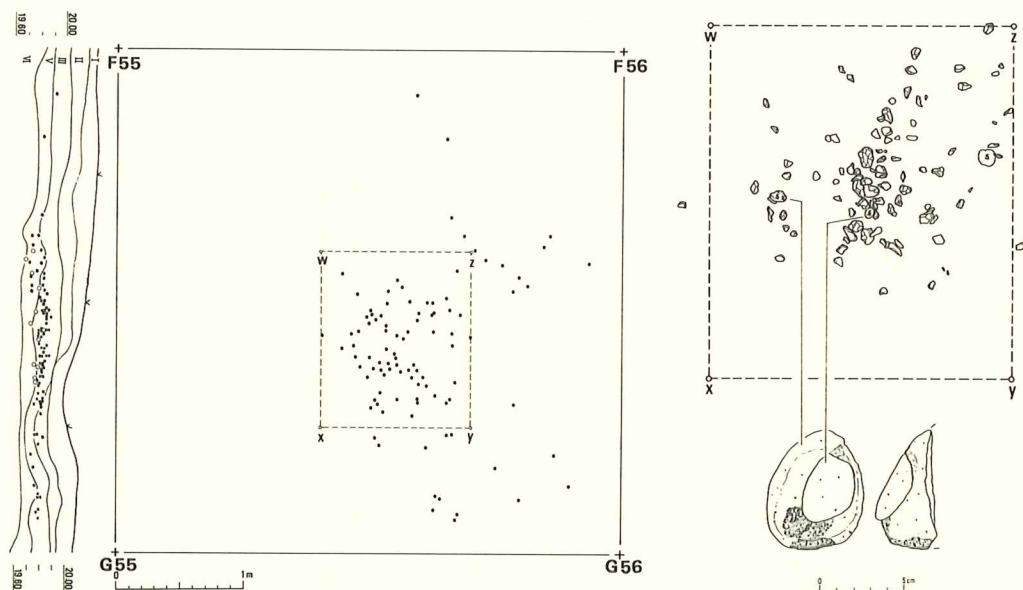
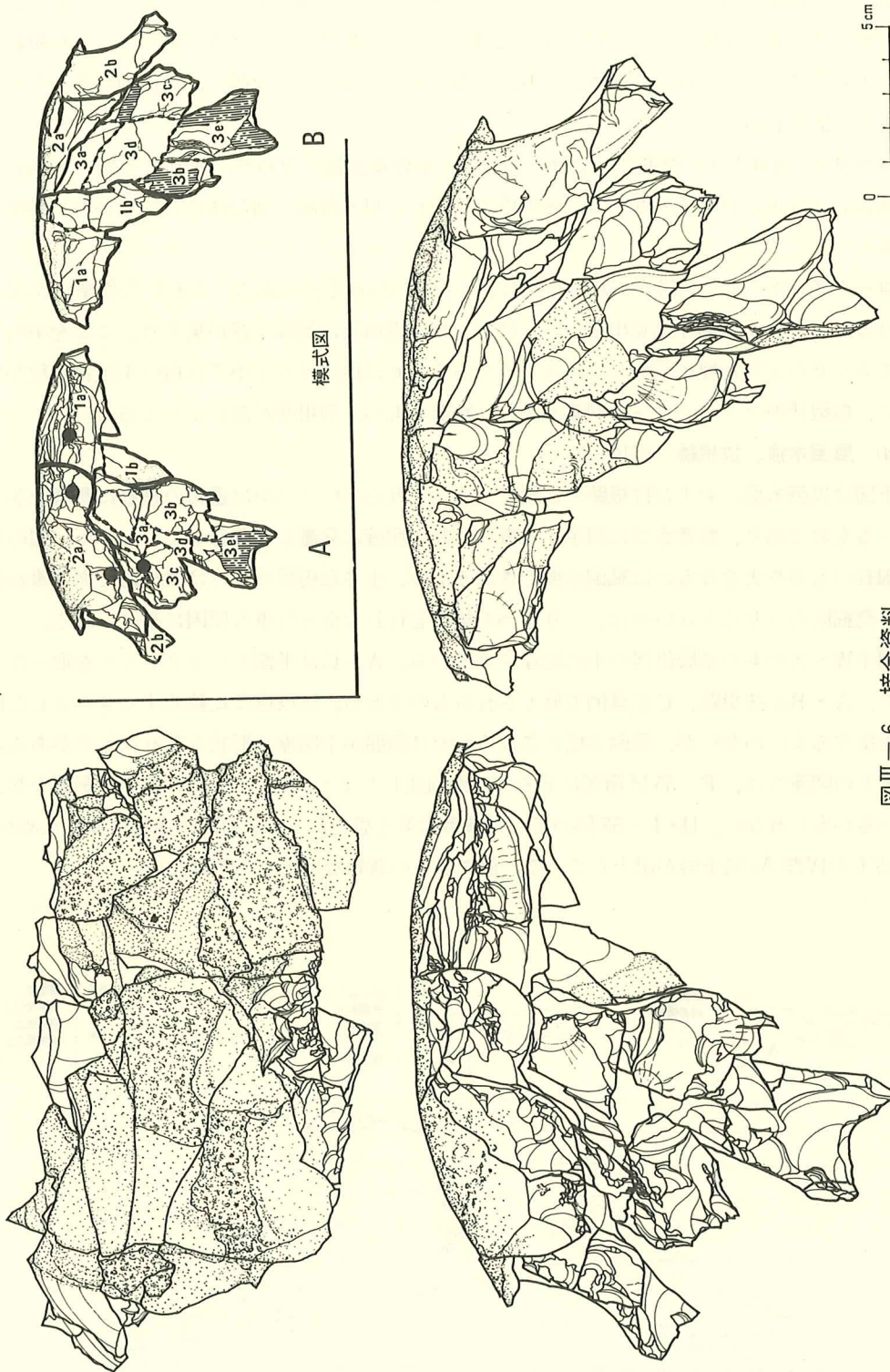


図 III-5 剥片の出土状況



図III—6 接合資料

III 建川2遺跡の調査

いるが、比較的均等な厚さをもっている。その塊からさらに礫皮を取り除こうとした打撃痕があるが、半分程しか届いていない。A面右側のほうの礫皮は、下からの加撃によって小塊状に取り去られている。同種の作業中に1bは下方にある節理で力が分散し、不規則な形状を呈したものである。

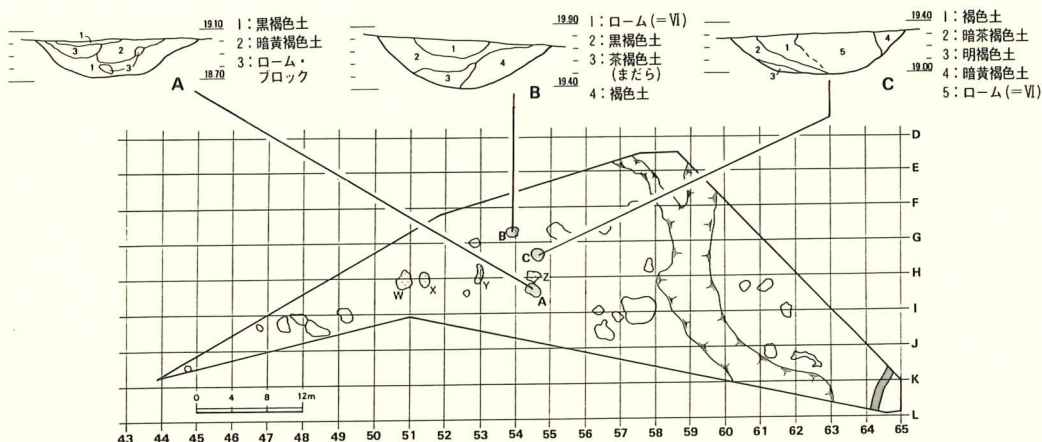
ブロック2：A面左下の加撃ではほぼ2全面にわたる礫皮が剥ぎ取られ、残りを右側の加撃点から除去しようとしている。aとbは節理面で接合し、粗割段階で別な塊になっていた可能性がある。

ブロック3：スクリーン部分が剥片を採取したと思われる部分である。きれいな剝離痕が認められるが、接合する剥片は見出せない。図示した打点周辺に剝離の線が集まり、ここを中心としてa～eのような塊に分割しているようである。eは他に比べて小さな白い不純物の粒が少なく、亀裂状のフィッシャーや剝離も少ない特徴をもち、利用度が高いようである。

(4) 風倒木痕、抜根跡 (図III-7)

下図は風倒木痕、および抜根跡の位置である。これらのいくつかは遺物の移動に影響を与えているものであり、参考までに図示する事にした。明確に分離して記録していないが、図の中で細長いものや大きなものは風倒木痕とされるもの、小さな円形のもののは抜根跡である事が多い。発掘区のへりに少ないのは、へりぎわの抜根を行わなかった事も原因に挙げられる。

図中W～Zのものは層位図の中に記録されている。A～Cは半割してセクションを取ったもので、A・Bが抜根跡、Cが風倒木痕とされるものである。抜根痕は比較的すっきりとした円形を呈するものが多いが、風倒木痕とされるものは範囲が不明瞭で形状も乱れたものがある。遺物との関連では、F-55区南側にあるものが前述したようにP-1や石材集中に影響を与えているかもしれない。H・I-57区のもののは風倒木痕と思われるが、周囲に遺物の多いためか、17点ものIV群A₂類土器が出土している。他に多くの遺物を出土した例はない。



図III-7 風倒木抜根跡

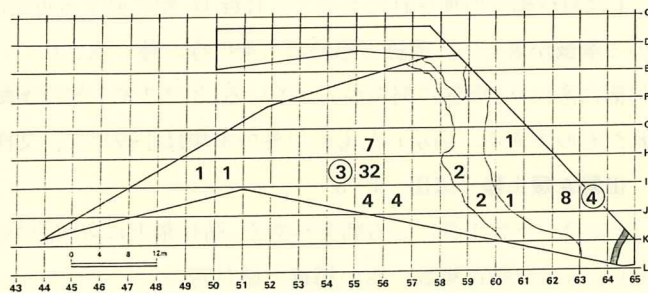
3. 包含層出土の遺物

(1) 土 器

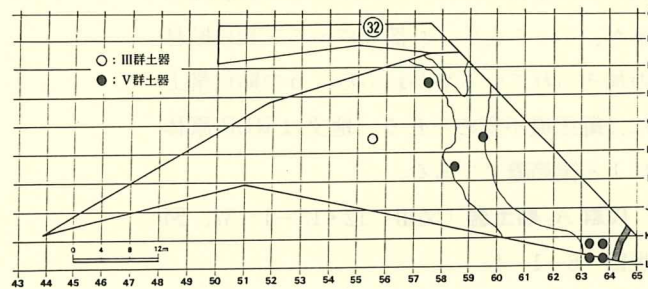
今回得られた土器は992点である。そのうちの9割近くが縄文時代後期前葉のIV群A₂類である。他には縄文時代前期、中期、晩期のものが得られている。下図は群ごとの分布図である。

II群土器はIV群A₂類につぐ点数が得られているが、同一個体のものが小破片化したと思われるものが少なくない。多くとも10種類程度のように、沢の東側に2~3種、沢の中に1~2種、沢の西側に3~5種の破片が見出される。マルで囲んだ数字はI層出土のもの、マルのない数字はIII層出土のものである。H-55区のIII層においてまとまった数の出土が認められているが、まとめて述べるようにIV群A₂類と混在して出土している状態である。特に面的な広がりとはとらえられない。

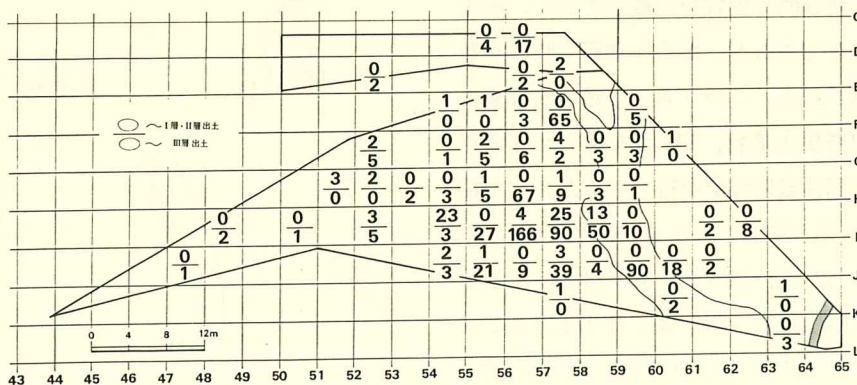
III群とV群は出土数が少なく、それぞれ白丸と黒丸を1点として表した。C-55区で32点のIII群土器が得られているが、同一個体に属するものである。V群土器は、K-63区出土のものが沢べりから、他区のもののは沢の中から出土している。出土層はIII・V群土器とも、すべてIII層である。少数の出土であり、V群が他群に比べると沢や沢東側に位置する事以外、これといった傾向は指摘出来ない。



図Ⅲ-8 II群土器の分布



図Ⅲ-9 III・V群土器の分布



図Ⅲ-10 IV群土器の分布

い。

IV群土器は中央部のH-56・57区からの出土が多く、そこから離れるにしたがい出土数は少なくなっている。E-57区の65点は同一個体のものである。H-56・57区でも同一個体のものが多いが、ここでは最低でも15種類の破片が認められた。沢の西側出土の土器が沢底出土のものや沢の東側から出土したものと接合する事があり、分布において沢が絶対的な障害となっていない。III層出土のものは、II層下5~7cmを中心とする面的な出土状況を示すものが多かった。II層の残存状態から考えて、I層出土のものはその大半が重機による抜根作業時にまきあげられたものと思われ、III層に含まれていた位置から数グリットをはさむような大きな移動は少ないと判断される。

II群B類土器 (図III-1~3)

1は斜行縄文の施されたもので、II群B₁類に属する可能性がある。2は沢底から得られたもので摩滅が著しい。縄線と思われる条痕様の跡が残されている。大きな波状を呈する口縁の突起部にあたり、頂部に刻みが入っている。3は2本1巻の多軸絡条体による平織状撚糸文の施されたものである。図示したもの以外の本類は小破片で、文様の不明瞭なものが多い。

III群A類土器 (図III-4・5)

4にはヘラ状工具による刺突がある。貼付帯上にも凹凸が認められるが、施文具の判定はつかない。5は口縁に複数一組の縄線と貼付帯の施された土器である。aは摩耗した破片であるが、ドットをうった部分にボタン状の貼付の加えられている事がわかる。bの貼付帯上には縄圧痕が認められる。地文はRLR原体による複節縄文である。

IV群A₂類土器 (図III-12・13-1~37、図版III-6-1~4)

本遺跡の主体をなす土器である事から、始めにその数量的な内容を記載しておく。出土数は833点であるが、接合作業終了時の点数は566点である。このうち、小破片や摩滅の著しい沢底出土遺物、233点を除いた333点について個体識別作業を行ってみた。その結果、明確に他と識別されるものは28種認められた。1~22・24・28・29・31・33・37に図示したものがそれで、破片数では272点がこれらに属する。残りの61点の破片は、23~27・30・31・34~36に示したように、先のものと



図III-11 包含層出土の土器 (1) II・III群

同一個体である可能性を残す資料である。総点数の少ない事もあり、本類土器の内容はほぼ抽出し得たと思っている。以下、個別に説明を加えていく。

1~4・33は復原実測されたものである。これらの土器の破片のちらばりは“まとめ”で触れている。1は口縁部に紐状の貼付があり、器体をめぐる貼付の上下は沈線によって縁どられている。胴部には無文地に細い沈線で渦巻状のモチーフが描かれている。沈線のめくれをそのまま残すところとナデによってめくれがつぶされ、文様を埋めてしまっているところとがある。頸部のくびれから2~3cm下ったところは、炭化物の付着により環状に黒ずんでいる。内面は胴の最もふくらむあたりより下が黒く汚れている。2は小型の土器である。頸部と底部に沈線がめぐっているが、前者はごく浅いものである。完形に近い状態で出土したため、周囲を精査したが、遺構らしきものは検出されなかった(図版III-5-2)。図示した面の反対側は指でおさえたのか、胴部のふくらみがなく、水平になっている。色調は、図示された側が赤褐色で、反対側は焼成時の酸化が不充分であったためか褐色を呈している。炭化物の付着は認められない。3・4はともに底部を欠く土器で、無文地に沈線で文様が描かれている。3は5突起、4は4突起をもつと思われる。3のドットをかけた部分はF-59・H-58区の沢底から出土している。33は沢べりからまとまって得られた。摩耗が激しく、無節と思われる縄文がかすかに認められるのみである。

5~20は口縁部破片である。5~16が無文地に沈線文の描かれるもので、9は沈線施文後に部分的に縄文を施している。17は無文のもの、18~20は縄文の認められるものである。平縁のものと突起をもつものがあり、後者には貼付の加えられるものが多い。8は突起上部を欠いているが、基部をとりまく貼付剝落痕が残っている。11にも剝落痕がみられる。18の8の字貼付のある破片はI-59区の沢底で得られ、縄文は摩滅している。21~32は胴部破片である。21~27は無文地に沈線文の描かれるもの、28~32は縄文の認められるものである。21には断面三角形の貼付がある。27は三角形を呈する右辺の割れ口にそって沈線が認められる。28は縄文地に沈線文を施している。29~31は縄文のみが認められる。29はほぼ全面に施文されているが、30・31は横方向に連続して施文された縄文が認められ、上下は無文になっている。32は沈線が太く、丹念な磨消縄文の施された土器である。大津式に相当する土器でI層出土である。他のIV群A₂類土器よりは新しい段階のものと考えられる。

34~36は底部破片である。34の底面には浅い条痕様の掻き跡が認められる。36は接地面側と内面側の2層に分かれていて、境の面は赤変している。37は、細かな縄文がほぼ全面に施された土器である。I-55区から出土しており、出土状況から本類土器との差は認められないが、胎土や縄文からはIII群土器の可能性もある。

V群C類(図III-38・39)

38はG-59・H-58区の沢底から出土した土器であるが、同様に沢底から出土したII群・IV群土器ほどの摩滅は認められない。bではLR原体による縄文も明瞭に確認される。39は縦走する縄文の土器である。

III 建川 2 遺跡の調査



図Ⅲ-12 包含層出土の土器(2) IV群



図III-13 包含層出土の土器(3) IV・V群

III 建川2遺跡の調査

(2) 石 器 (図III-16~18)

52点の石器が得られている。それらの分布状況とフレイクのグリッド別出土数が下図である。フレイクは前述したF-55区での出土数がぬきんでいる他は、おおむねIV群A₂類土器の分布と重なるようである。石器では、土器、フレイクに比べると沢部分から出土したものが目立つ。特に、スクレイパー・すり石の多くは沢部分でみつっている。沢底から出土した石器は図の2・6・11・22・23・26・30、沢べりから出土したと思われるものは4・5・7・20・25・27・29である。なお、分布図で()をつけているものはI層出土のものである。

石 鏃 (1)

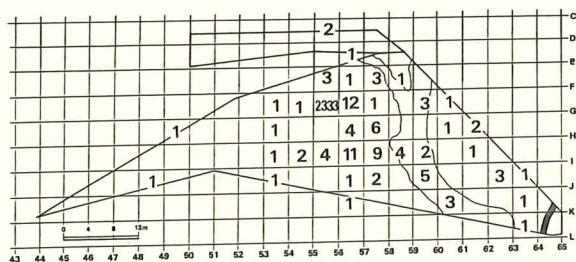
1点のみ出土している。木葉形を呈する石鏃で幅狭の凹基部が作りだされている。

つまみ付ナイフ (2)

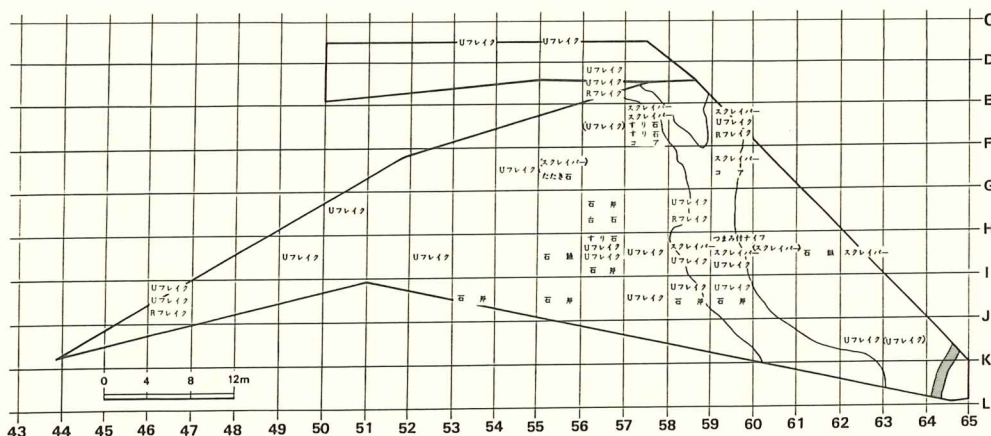
1点のみ出土している。横長剥片を素材とし、バルブ部とは別なところにつまみ部を作出している。

スクレイパー類 (3~25)

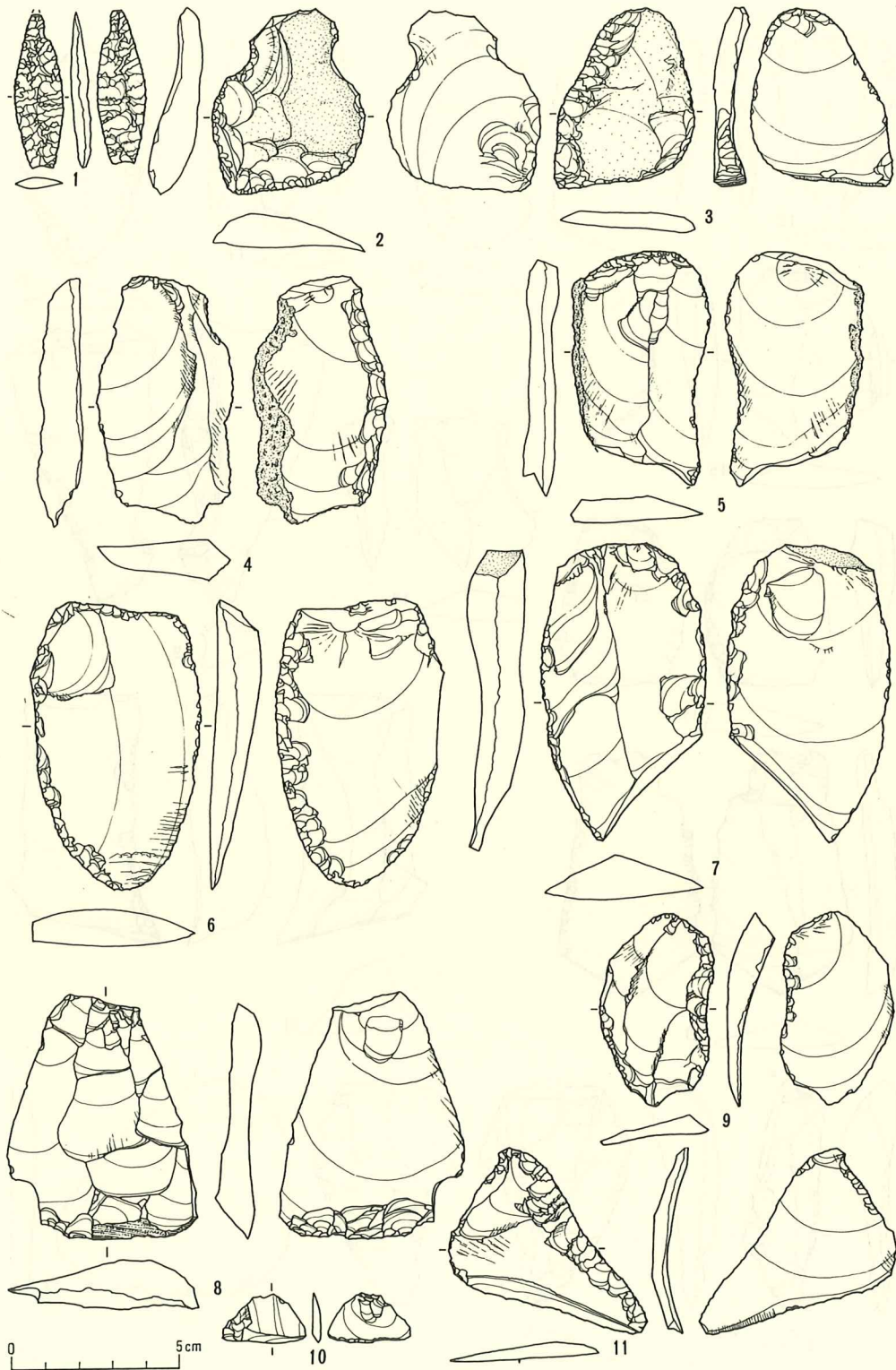
36点得られている。ここにはU・フレイク、R・フレイクと呼ばれる不定形の石器を含めている。3・4・6~9は縦長剥片を素材としたスクレイパー、5・12~22は同じ縦長剥片の一部に微細な剝離、もしくは使用痕の認められるものである。10・11は横長剥片を素材としたものである。大部分のものが素材の形状を残している。3は下辺に主剝離面とほぼ垂直な風化面を残しているが、右側縁にかけて急角度の刃部が形成されている。4・5は、礫面の角度や幅にやや安定性を欠くが、新道4遺跡F地区にみられた礫皮面をもつスクレイパーと同種のものであろう。6には背腹両面に刃部



図III-14 フレイク出土数

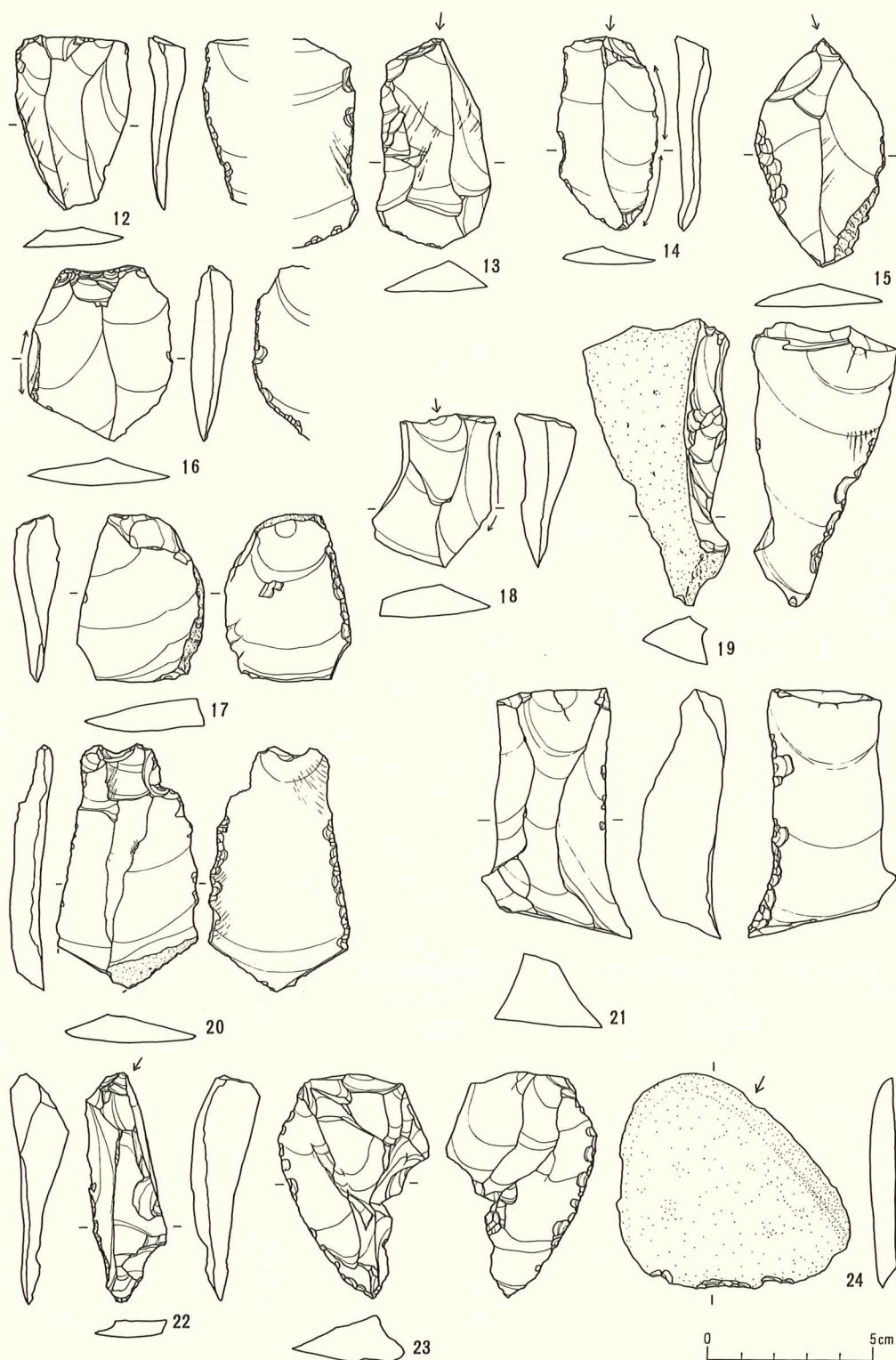


図III-15 石器の分布

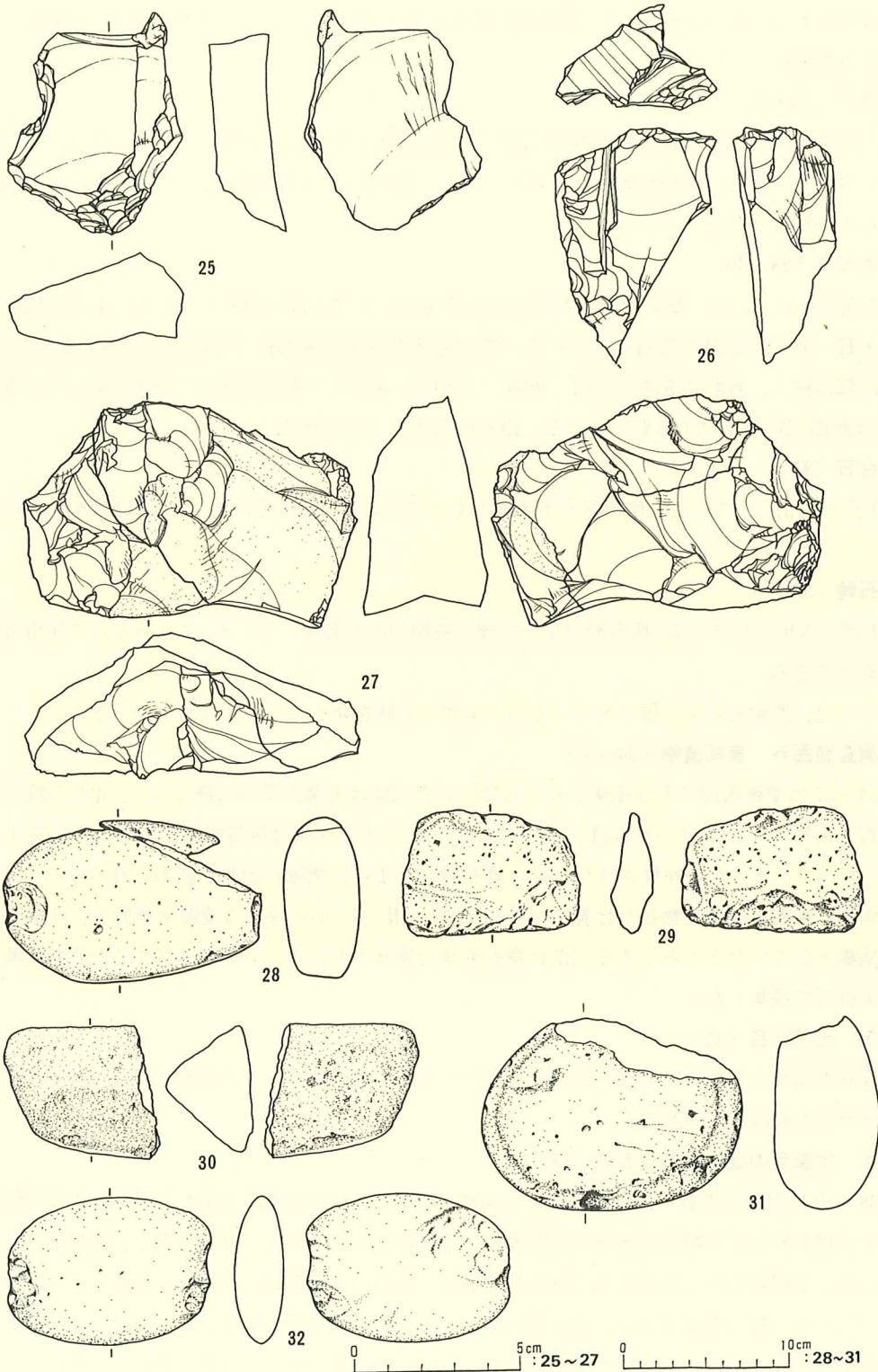


図Ⅲ-16 包含層出土の石器(1)

III 建川 2 遺跡の調査



図Ⅲ-17 包含層出土の石器(2)



図Ⅲ-18 包含層出土 石器(3)

III 建川 2 遺跡の調査

が認められる。8 では下辺に荒い剝離痕がある。24・25 にはバルブが認められない。前者は礫皮部分を使用している。

コア (26・27)

2 点得られている。26 は風化面を打面として縦長剥片を 1 枚、採取している。27 は、同一区から得られた 2 つの資料が接合したものである。定められた打面をもたないが、主に右図右側からの剥片取りを行っている。

すり石 (28～30)

3 点得られている。28 は両端に打欠きのあるもので、すり面が傾斜している。上部の破片は G・H-58 区の沢底から得られている。29 は半円状扁平打製石器と呼ばれているものである。擦面部は狭く、寿都 3 遺跡 (内山 1980) で a 類とされた "刃部に近い" 形状を呈している。30 は断面三角形を呈するものである。29・30 は沢べりから出土している。

台石 (31)

1 点のみ出土している。使用痕の不明瞭なものであるが、周辺部に 2～3 のくぼみが認められる。

石錘 (32)

1 点のみ出土している。楕円形を呈する礫の長軸両端を打欠いている。すり石として使用可能のものである。

この他、磨製石斧片が得られているが、全体の形状を窺えない小片ばかりである。

調査範囲外 表採遺物 (34～37)

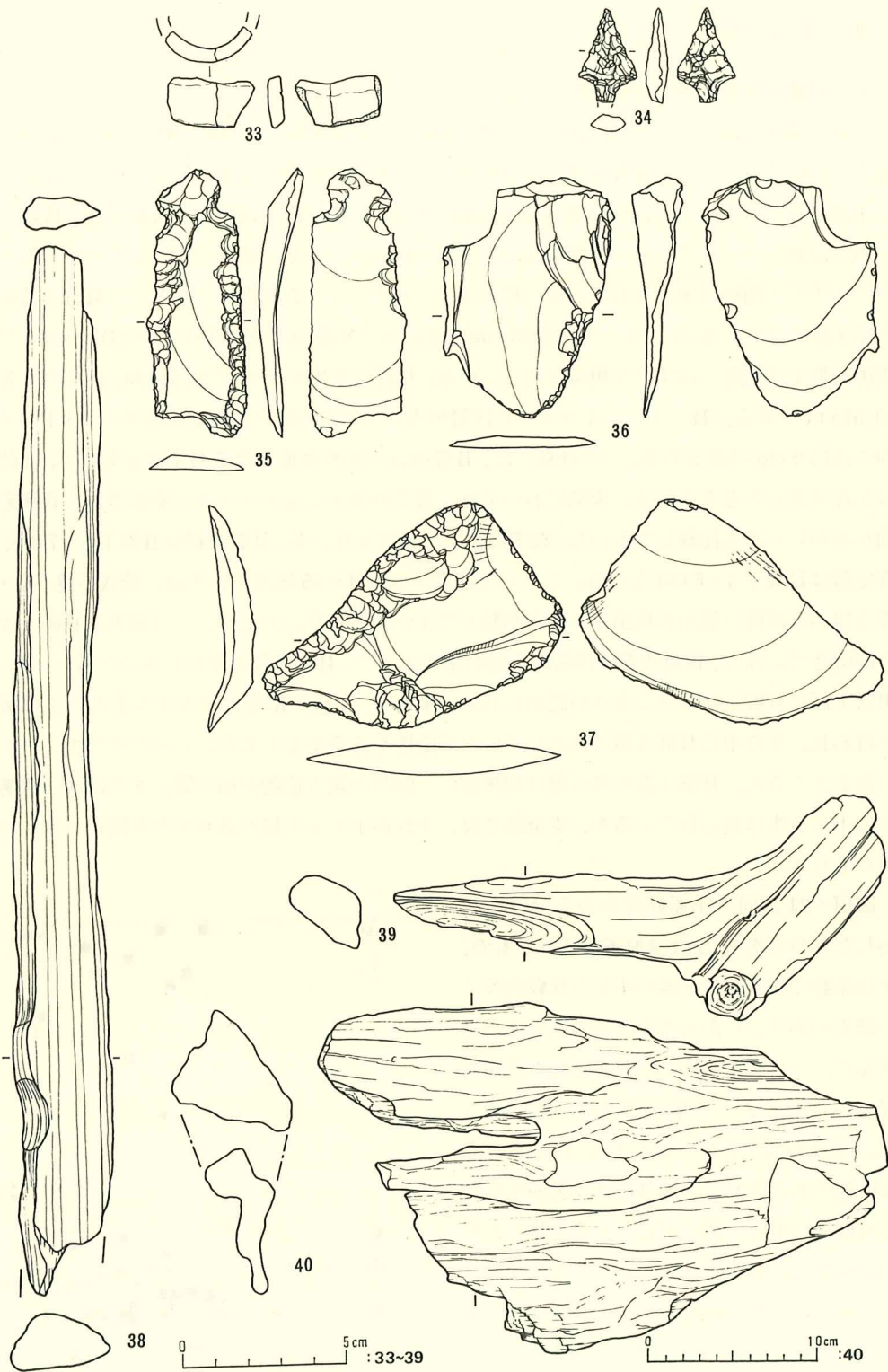
34～37 は遺跡周辺で表面採集された石器である。34 は有茎凸基の石鏃である。北側丘陵地の中腹で採集した。35 はつまみ付ナイフである。50 ライン西側は線路敷設工事の排土が盛土となっており、そこから採集された。36 は縦長剥片の 1 辺に微細な剝離の認められるもので、背腹両面に茶褐色の炭化物状の付着物がある (図版-III-6-5)。採集は遺跡北東側で、抜根や土の捨て場としていたところである。37 は横長剥片を素材としたスクレイパーである。北側丘陵の頂上付近で採集した。

(3) 土製品 (33)

環状を呈する土製品の一部と思われるものである。砂粒のほとんど認められない胎土で、カサカサした肌ざわりである。

(4) 木製品の疑いのあるもの (38～40)

38～40 は沢部分の II' b 層から出土したものである。これらの他にも流木と思われる木や葉、ブナと思われる種子類が沢部分の泥炭層から得られている。38 はへら状を呈し、図左下のところに浅い半円状のへこみがある。39 は枝の部分であるが、鋭角的に削り落とされたような面をもっている。40 は板状を呈し、図左側に切れこみのような部分がある。これらは土・石器との伴出関係はなく、明らかな加工痕をもつ訳でもないが、参考までに図示したものである。



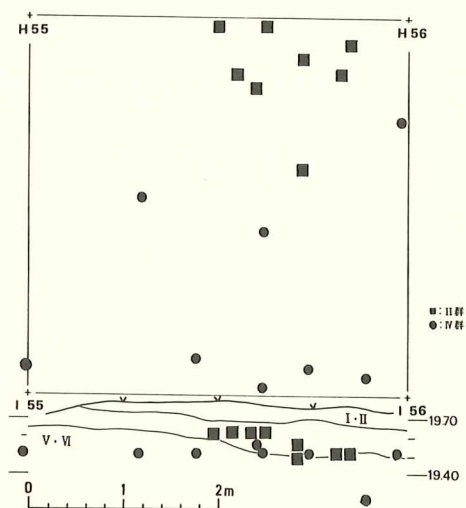
図Ⅲ-19 土製品・表採石器・木製品(?)

4. ま と め

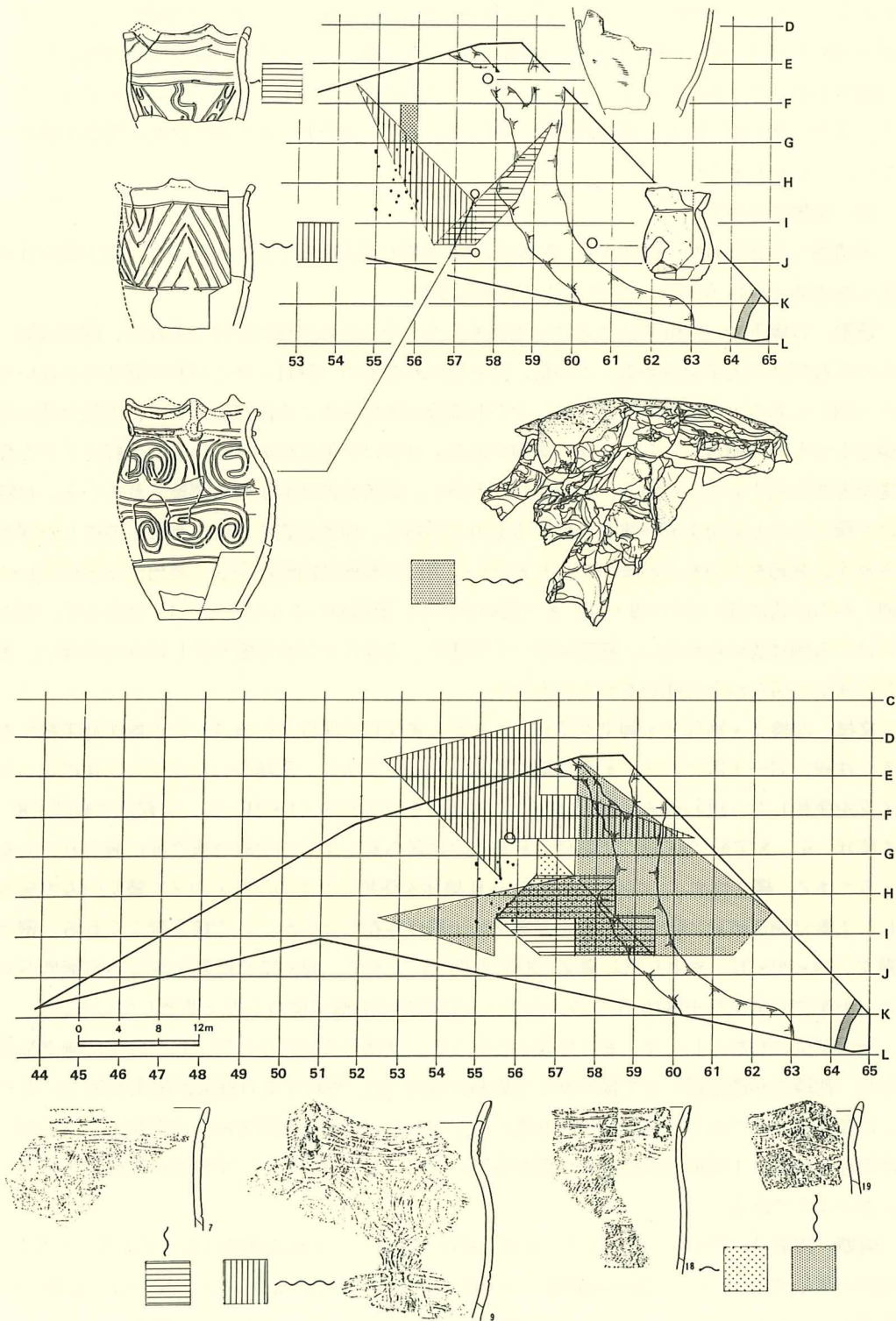
(1) 遺物の分布状況 (図III-20・21)

今回の調査では、ピット(1)、小ピット(18)が検出され、遺物では土器(992)、石器(54)などが得られている。ここでは調査を通して得られた、それらの分布に関する知見を述べてみたい。まずはひとつのグリット内での事例を示す事にする。下図はH-55区でのII群土器とIV群土器の出土位置である。すべての遺物を図示した訳ではないが、同一個体の細片化しているものも多く、大きな傾向は表現されている。Hラインのセクションに投影してみると、II群土器のほうが上位にきている。ただし、層の傾斜の問題があり、V層中に点の落ちているIV群土器でも、現場の取上げ記録ではすべてIII層になっている。II群の平均レベルは19.562 m、IV群のそれは19.515 mである。HラインとIラインのIV層単点レベルから層の傾斜を求めるとH・Iライン間では約9 cmの差がある。この計算では、II群のほうがやや低くなる可能性をもつが、面的にはかなり近いと考えられる。現場においては、近くのセクション・ベルトを参考に、II層最下面からのレベルも記録しておいた。厳密な数字とは言えないが、II群土器はII層下5~7 cm、IV群土器はII層下4~6 cmとある。こうした結果から、H-55区においては、時代の違うII・IV群土器がほぼ同一層から検出されたと判断してよいであろう。ただし、この原因はII群・IV群の同時性ではなく、IV群土器使用時の土地利用によって、II群土器が浮いたものと考えられる。III層下面にII群土器のまとまりの認められないことから、1枚のIII層にはみえるものの土の搬入が行われ、その中にII群土器の混入していた可能性もあるかもしれない。その点で小ピット群のあるところに、II群土器の多い事は興味深い。時代の違う遺物が同一層、または同一遺構より出土する事は知られているが、本遺跡では、それが小ピット群のありかたと関連づけられるのかもしれない。

図III-21は同一土器破片のちらばりを表わしたものである。上は復原実測されたもの、下は拓影で報告した土器の中から比較的多くの破片があり、しかもその分布の広いものを選んだ。この図や今までにみた遺物の分布状況からは次のような事が言えるかもしれない。1:土器のちらばりはあるものの、ほぼ発掘区内におさまり、区域外にまで範囲を広げる可能性は少ない。2:沢にかかる遺物のありかたからは、特に水に流されたような状態はみられない。3:石器のうち、スクレイパー・すり石は沢部分から出土する例が多く、水辺に関わりをもつ作業に使用されていたのかも



図III-20 H-55区における土器の分布



図Ⅲ-21 遺物のちらばり

III 建川2遺跡の調査

しれない。さらに、土器に比べると剝片石器の分布が広く、後者が前者より可動的なものであったと判断される。4：土器はH・I-56・57区に密度が濃く、このあたりに主な使用場、あるいは捨場があったと思われる。5：小ピット群のところは遺物の分布が空白に近い状態になっている。また、F・G-56も同様の状態で、通り道、あるいはそれぞれの場を区切る空間が存在していたのかもしれない。

(2) 土器について

本遺跡ではII群B類、III群A類、IV群A₂類、V群C類が出土したが、ここでは出土数の9割近くを占めるIV群A₂類についてまとめる事にする。

器形 口縁下1~2cmのところにくびれをもち、そこから口縁にかけて外反し、胴部は軽くふくらむ深鉢が大半を占める。この他、鉢と思われるもの(5・11)やくびれの認められないもの(13)もある。文様との関連では、くびれ部分に器体をめぐる沈線が施され、渦巻き状の文様をもつものは胴のふくらみの強い傾向がある。口唇は平坦に形成されたものと軽くナデた程度で丸味を残すものがあり、後者のほうが多い。前者は内面も丁寧に調整されている。口縁は平縁のものと突起をもち波状を呈するものがある。前者は破片で得られたものにしか認められず、突起をもつものが多いかもしれない。突起の形態は山形に小さく突出するもの(1・3他)から波状に近いもの(9・11)まで認められる。頂部のへこんだもの(4)はあるが、刻みのはいる例は認められない。底部はすべて平底で、大きくくびれや張りだしはみられない。また、底面に明らかな文様をもつものもない。

文様 沈線文・貼付文・縄文が認められるが、無文地に沈線文の施された土器が過半数である。沈線は同一土器であっても施文幅の不均一なものが多く、先端のいくぶんへら状になった工具を使用したと思われる。貼付は紐状に器体をめぐるもの(1・21)か、突起部に紐状(8)や棒状(6)、8字形(9・19)に貼付されるものに限られ、すべて沈線の施文前に施されているようである。縄文はすべて左傾する条で、LR原体を使用したものと思われる。縄文のみの施された土器は胴部破片に限られ、全面が縄文の土器は存在しないか、ごく稀と考えられる。密な縄文(19・29・37)やすり消し縄文(32)も少ないようで、32・37は時期の異なる可能性がある。上半部が無文の土器は17にみられ、これは器形の特徴が他のものと共通している。

施文部位に判然としたまとまりは読みとれない。文様が2段になる例(1)、頸部に無文帯をもち、沈線文が底部近くまで描かれると思われる例(3)、外反する口縁部が無文の例(3)とそこに数本の沈線のめぐる例(6・9・10他)などがある。文様の転開方向では突起下位、あるいは突起中間部に1単位の文様をもつ例が多く、突起のないものでは、文様の単位自体が判然としないようである。

時期 IV群A₂類の中では、トリサキ式(森田 1981)とされる段階のものである。ただし、遺物の集中する55ラインより西側出土の土器(17・24・25・27・32)には、32のように新しい段階のものがあるかもしれない。それ以外のものは、分布や出土状況から比較的まとまりのある資料と思われる。トリサキ式の特徴は先の森田知忠氏によって述べられているが、その中で

“飾られた土器の多くは無文地”という特徴をみてみたい。今回の資料も、その多くは器面全体が無文地と思われるものである。類例は現在のところ、知内町湯の里1(峰山他 1975)や木古内町新道4(B・C地区)、登別市川上B-C地区(鬼柳他 1986)などの遺跡で比較的多くの遺物が得られている。これらの遺跡の資料をみると、同じ無文地上に描かれる沈線のモチーフにも違いが認められる。本遺跡9・10のような渦巻を描くものと湯の里1に多くみられる渦巻がまきぎらずにJ字状を呈すもの、川上Bのように弧線を連ねたような文様のものなどである。さらに、近い時期の資料から沈線の描かれる文様帯の下地が無文地となる例を捜せば、乙部町栄浜(峰山他 1977)、同元和12・15(大沼他 1976・森 1980)、上の国町四十九里沢A(其田他 1974)、松前町大津(斉藤他 1974)、同原口(西連寺 1976)、同鬼沢B(久保 1978)、同白坂第9地点(久保他 1983)、知内町涌元(千代 1972・高橋 1974)、同湯の里3・5(畑他 1985・千葉他 1986)、函館市上湯川(田原他 1982)、七飯町聖山(芹沢他 1979・吉崎他 1979)、森町鳥崎川(開拓調念館 1980)、伊達市入江貝塚(名取他 1958)などの遺跡にみられる。これらの遺跡を見ると、描かれる文様のうち、渦巻やそれが曲線的に連結されているものが太平洋側の遺跡で多く、日本海側では渦巻がまきぎらず、J字状を呈するものやそれを直線的な斜線で連結していくものが多いように思われる。本遺跡の資料の中にも9・11のような前者のタイプと1・3のような後者のタイプとがある。こうした違いは時間差を示す可能性もあるが、IV群A₁類段階と思われる森町鳥崎遺跡(佐藤 1975)や原口・湯の里3遺跡などから出土した遺物にもこの傾向が窺われ、今後、この段階の資料の地域差も考慮する必要があるだろう。

(3) 石器について

52点の石器が得られ、器種では石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパー、U・Rフレイク、コア、石斧、たたき石、すり石、台石、石錘がある。スクレイパーには、刃部が全縁にわたるものや両面加工のものはない。U・フレイクも一辺に微細剝離の認められるものが多く、両者とも主剝離面に刃部ないしは微細剝離のあるものが目立つ。出土した石器の約7割の石器はこの種のスクレイパーと不定形石器とで占められている。出土状況からはIV群A₂類に伴うものが多いと思われるが、個々の石器をみると当該期にはみられないと思われるものもある。細長い柳葉形を呈し、基部にえぐりをもつ石鏃(1)や断面が三角形を呈するすり石(30)は縄文時代早期に、半円状扁平打製石器(29)は縄文時代前～中期(羽賀 1983)に認められるとされる石器である。これらは沢部分や沢西側の出土であり、明らかにIV群A₂類土器に伴う確証はなく、再利用されたものでなければ、従来通りの時期に伴うものであろう。これらを除いたスクレイパーや不定形石器、打欠きのある擦石・石錘はほぼIV群A₂類に伴うものと考えられ、不定形石器の多さがより際立ってくる。なお、一辺に礫皮面を残し、対になる一辺に刃部をもつ石器(4・5)は、新道4-F地区で多く出土している。

この他、F-55区からは石材を粗割したと思われる接合資料が得られている。類例が栄浜遺跡(峰山・内田他 1977)にみられ、詳細な分析が試みられている。荒割→表皮や節理の除去

III 建川2遺跡の調査

→均質な原石内部から加撃点を移動しての剥片採取→多くの不定形剥片から製品化できるものを選ぶ、といった過程は本遺跡の資料にも窺われ、時期的にも近いようである。共通した技法によるものと考えてよいだろう。柴浜ではこの技法を、小型で企画性の低い剥片から製品化される石器類（石鏃・不定形剥片石器）の多い事と関連づけている。今回の資料でも大きな剥片は採取されていないようである。また、礫皮面除去に際して、ブロック1とした塊が剥離された段階で礫皮は除去されているにもかかわらず、さらに薄く礫皮面を剥離しようとしている。大形の剥片採取を目的としていれば、行われない作業であろう。まるで、割るだけ割って使えそうなところを調べているような感じを受ける。それでも石の質は問題になると思われ、質の良い部分からの採取跡が目立つ。前述の調べるような作業とは矛盾する面もあり、あるいは加撃の意味や剥片取りの箇所を誤認しているかもしれない。今後とも検討を続けたい課題である。

なお、本遺跡出土の石器の中に接合資料と同一母岩と判断されるものはなかった。

註 1の石鏃は新道4-B地区（59年度）や白坂第2・3地点（久保他 1983）に類例がみられ、II群B₂類に伴う可能性もある。

(4) 沢について

遺跡では、中央部東よりのところに小沢がはいっていた。沢底からは土器片や石器類、沢を埋めるII'層からは多量の流木の類が出土した。こうした遺物や堆積物によって推測される沢の変遷は、遺跡のあり方とも関連することであり、簡単に触れることにする。

沢底から出土した土器は167点でII群B類、IV群A₂類、V群C類がある。このうち前二者は文様が確認出来ない位に摩滅している例が多く、水に洗われたと思われる。これに対し、V群土器には著しい摩滅は認められず、かわりに黄褐色の鉄分と思われる付着物がある。こうした遺物の特徴から、IV群A₂類の遺物が落ちてからしばらくは水の流れる川の状態、V群C類期以降は水のよどんだ湿地の状態であったと推測される。また、遺物の動きでは下流にあたる南側で遺物の認められない事、平坦部にある土器の分布とは大きな差を示さない事から、川の状態とはいっても遺物を調査範囲外にまで押し流す程の強い流れではなかったと思われる。ただし後述するように、遺物が沢底に落ちた原因として考えられる沢べりの崩落に際しては、一時的に強い水流があったのかもしれない。

流木の類はII'層中から沢底まで出土しているが、沢底のものは、土器や石器よりはやや浮いた状態であった。遺物の認められないII'層に含まれる木については図取や記録が不十分で、これといった傾向は指摘できない。これらの樹種同定を開拓記念館・三野紀雄氏に依頼中であり、正確なところは後の報告になるが、ミズナラ・コシアブラ・ブナ等が認められるとのことである。木製品?の38はブナ、40はコシアブラとされ、39は乾燥しきってしまい同定できない状態であった。これらの木々は適度にしめり気のある沢ぞいに認められるものらしい。調査中に北側斜面を歩いてみたところ、丘陵部の高い部分は伐採が進んでいるが、残っている木々にはコナラ・ミズナラが目立った。下にさがって沢が埋まったようなところには、より多くの種類の木々がみられた。わかったところでは、ハンノキ、ハリエンジュがある。これだけの材料か

らあまり確かな事は言えないが、沢の中から出土した木々は背後の斜面や沢周辺に生育していたものであり、それらが強風による枝折れや流水による沢べりの崩落などによって沢の中に堆積したものと思われる。へりの崩落については沢ぎわの層序図と遺物の出土状況からも考える事である。なお、図版III-3-3のように沢底の青灰色粘土に深くもぐった状態で出土した木（ミズナラ）もある。特に加工痕は認められず、掘りこみも認められない。遺物やII'層との関係は不明だが、 ^{14}C 年代測定を依頼したところ、 $1200 \pm 35 \text{ y. B. P.}$ の値が得られている。また、II'層は鉱物組成から平坦部のII層に対比され、その結果はIX章で花岡がまとめている。

（葛西智義）

引用・参考文献

- 大沼 忠春・立川 トマス他：『北埋調報 33 建川1・新道4遺跡』 北海道埋蔵文化財センター （1986）
 大沼 忠春・佐藤 隆広他：『元和』 乙部町教育委員会 （1976）
 鬼柳 彰・西田 茂他：『北埋調報 27 川上B遺跡・C地区』 北海道埋蔵文化財センター （1986）
 開拓記念館 『熊野喜蔵氏資料目録』II 北海道開拓記念館 （1974）
 久保 泰他：『鬼沢B遺跡・棚石遺跡調査報告』 松前町教育委員会 （1978）
 久保 泰他：『白坂』 松前町教育委員会 （1983）
 斉藤 傑・氏江 敏文：『松前町大津遺跡発掘報告』 松前町教育委員会 （1974）
 西連寺 健：『松前町原口遺跡発掘調査報告書』 松前町教育委員会 （1976）
 佐藤 忠雄：『鳥崎遺跡』 森町教育委員会 （1975）
 芹沢 長介編：『峠下聖山遺跡』 七飯町教育委員会 （1971）
 其田 良雄他：『上ノ国町四十九里沢A遺跡』 上ノ国町教育委員会 （1974）
 高橋 正勝：『知内町涌元遺跡出土の土器と北海道西南部の縄文時代後期前半について』『北海道の文化』29 北海道文化財保護協会 （1974）
 田原 良信・野辺地 初雄他：『上湯川町遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会 （1982）
 千葉 英一他：『北埋調報 32 湯の里3遺跡』 北海道埋蔵文化財センター （1986）
 千代 肇：『涌元遺跡』 知内町教育委員会 （1972）
 名取 武光・峰山 巖：『入江貝塚』『北方文化研究報告』13 北海道大学 （1958）
 羽賀 憲二：『北海道式石冠』『縄文文化の研究』7 雄山閣 （1983）
 畑 宏明・田口 尚他：『湯の里5遺跡』『北埋調報 18 湯の里遺跡群』 北海道埋蔵文化財センター （1985）
 峰山 巖・大島 直行：『知内川中流域の縄文時代遺跡』 知内町教育委員会 （1979）
 峰山 巖・内田 祐治他：『栄浜遺跡』 乙部町教育委員会 （1977）
 森田 知忠：『北海道』『縄文土器大成』3 講談社 （1981）
 吉崎 昌一・直井 孝一他：『聖山』 北海道大学教養部人類学研究室 （1979）

遺物一覧表

1. 出土遺物一覧表

表III-1

名 称	数 量	名 称	数 量	名 称	数 量
II 群 B 類	70	スクレイパー	9	R フ レ イ ク	4
III 群 A 類	33	石 斧	6	コ ア	2
IV 群 A ₂ 類	865	た た き 石	1	礫 △	199
V 群	7	す り 石	3	礫	194
不 明・小破片	17	台 石	1	石 器 計	2,879
土 器 計	992	石 錘	1		
石 鏃	1	フレイクチップ	2,434		
つまみ付ナイフ	1	U フ レ イ ク	23	総 計	3,871

Ⅲ 建川 2 遺跡の調査

2. 出土掲載土器一覧表

表Ⅲ-2

図番号	分類	発掘区	層	図番号	分類	発掘区	層	図番号	分類	発掘区	層
Ⅲ-11-1	ⅡB	H-58	Ⅲ	Ⅲ-12-9	ⅣA	C・F-56、G-55	I・Ⅲ	Ⅲ-13-25	ⅣA	H-52、I-54	I・Ⅲ
" 2	"	I-62	"	" 10	"	H-55・56	Ⅲ	" 26	"	G-56、H-55・59	Ⅲ
" 3	"	I-56	"	" 11	"	G-56	Ⅲ・Ⅴ	" 27	"	I-47	"
" 4	ⅢA	G-55	"	Ⅲ-13-12a	"	H-55	Ⅲ	" 28	"	G-57	"
" 5a	"	C-55	"	" b	"	H-57	I	" 29	"	表 採	"
" b	"	"	"	" 13	"	G-56	Ⅲ	" 30	"	D-57	I
" c	"	"	I	" 14	"	H・I-55	I・Ⅲ	" 31	"	I-57	"
Ⅲ-12-1	ⅣA	H・I-57	Ⅲ	" 15	"	H-54	I	" 32	"	G-51	Ⅲ
" 2	"	I-60	"	" 16	"	J-57	"	" 33a	"	E-57	"
" 3	"	E-59、H-57・58 I-56・57	"	" 17	"	I-58	Ⅲ	" b	"	"	"
				" 18	"	H-48	"	" 34	"	I-55	"
" 4	"	E-54、H-57 I-56・57	"	19a	"	G-56、H-55・57 I-59	"	" 35	"	I-56	"
								" 36	"	H-55・56	"
" 5	"	H-55、I-59	"	" b	"	H-61・62	"	" 37	" ?	I-55	"
" 6	"	H-55	"	" 20	"	I-55	"	" 38a	V	H-58	"
" 7a	"	H-55、I-59	"	" 21	"	H-55	"	" b	"	G-59	"
" b	"	H-55、I-57	"	" 22	"	G-56、H-55	"	" 39	"	K-63	"
" 8a	"	H-57・58、G-53・54	I・Ⅲ	" 23	"	I-57	"				
" b	"	H-58	I	" 24	"	H-48	"				

3. 出土掲載石器一覧表

表Ⅲ-3

番号	名称	出土区	層	重量	石材	番号	名称	出土区	層	重量	石材
1	石 鏃	H-61	Ⅲ	2.3	S h	20	U フ レ イ ク	D-56	Ⅲ	25.4	S h
2	スクレイパー	H-59	"	24.2	"	21	"	I-46	"	60.0	"
3	"	F-55	"	17.1	"	22	"	E-59	"	16.9	"
4	"	E-57	"	41.8	"	23	"	H-59	"	36.5	"
5	U フ レ イ ク	D-56	"	28.8	"	24	"	J-62	"	39.8	"
6	スクレイパー	H-58	"	56.3	"	25	R フ レ イ ク	D-56	"	69.7	"
7	"	F-59	"	60.3	"	26	コ ア	E-57	"	66.3	"
8	"	E-57	I	42.5	"	27	"	F-59	"	241.0	"
9	"	H-62	Ⅲ	9.5	"	28	す り 石	H-55	"	978.0	And.
10	U フ レ イ ク	I-58	"	1.1	"	29	"	E-57	"	246.1	"
11	スクレイパー	E-59	"	11.1	"	30	"	E-57	"	439.2	Rhy.
12	U フ レ イ ク	H-56	"	15.8	"	31	台 石	G-56	"	1,400	And.
13	"	I-57	"	22.8	"	32	石 錘	H-55	I・Ⅲ	452.2	S a
14	"	I-46	"	12.2	"	33	土 製 品	I-57	Ⅲ	—	—
15	R フ レ イ ク	G-58	"	20.3	"	34	石 鏃 表 採	—	—	1.4	S h
16	U フ レ イ ク	F-54	"	21.2	"	35	つまみ付ナイフ	"	—	16.1	"
17	"	C-55	"	22.5	"	36	スクレイパー	"	—	26.8	"
18	"	H-57	"	21.5	"	37	"	"	—	42.1	"
19	"	H-49	ベルト	44.8	"						

図版 I



1. 調査風景



2. 全完掘風景

図版 4

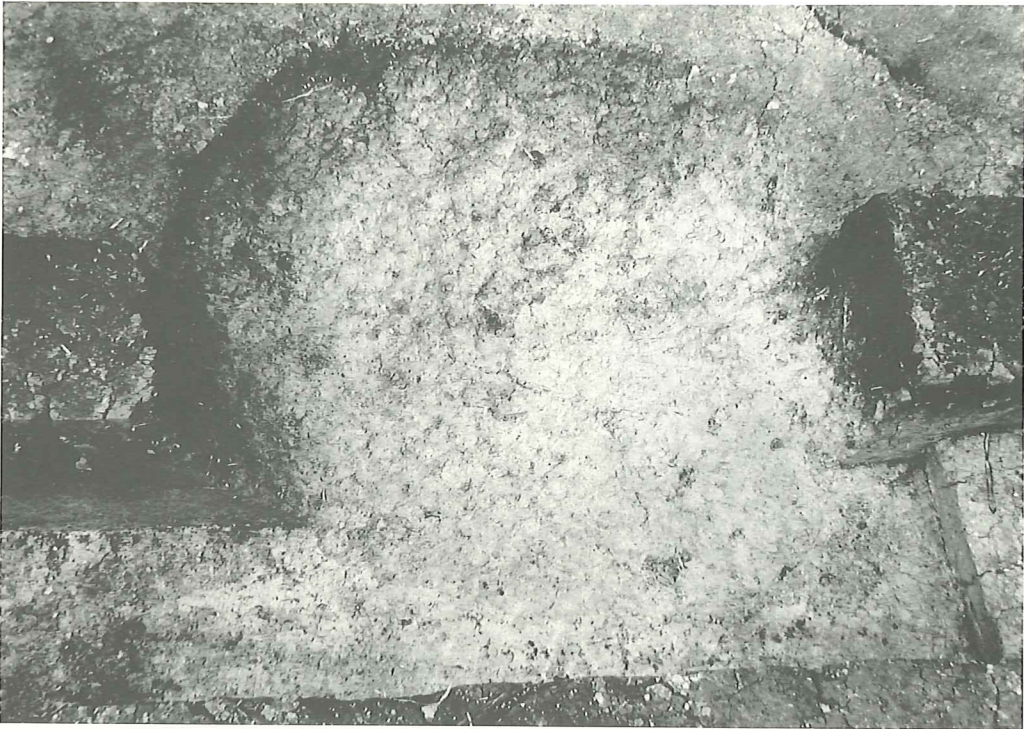


1. 石材集中出土状況



2. 接合資料

図版 5



1. P-1 完掘



2. 土器出土状況

図版 6



遺物 1～4：包含層出土のⅣ群土器 5：付着物のある石器

Ⅳ 新道 4 遺跡 昭和61年度 A 地区の調査

1. 遺跡の概要

本調査区は、町道建川線西側の丘陵の東斜面で、昭和 59 年度に調査を行った A 地区の東側にあたる。標高は 22～29 m である。遺構は、フラスコ状ピットと、ピットが発見された。フラスコ状ピットは丘陵の標高 26～29 m の範囲に分布し、昭和 59 年度 A 地区で確認されたフラスコ状ピットの分布に続くものと思われる。これらはいずれも大型で、深さは 1.5～2.0 m である。また、底面の中央部に円形の柱穴状のピットを有するものがある。ピット出土の遺物は、AP-25 の覆土中からくぼみ石 1 点が出土している。この他には、少量の炭化物が出土しているだけである。包含層出土の遺物は、縄文時代前期～晩期の土器・石器などと自然礫を含め約 832 点が出土している。土器は、縄文時代前期の円筒下層式、同後期の大湯、余市式、同晩期に相当する土器が多出している。石器は、石鏃・つまみ付ナイフ・R フレイク・U フレイクの出土数が多い。この他に、鐸型土製品の出土もみられる。

2. 遺 構

本地区では、フラスコ状ピット(4)、ピット(3)が確認された。遺構の時期は、確定するには至らなかったが、昭和 59 年度 A 地区の調査結果や出土遺物からみて、縄文時代前期から後期頃のものである。

(1) フラスコ状ピット

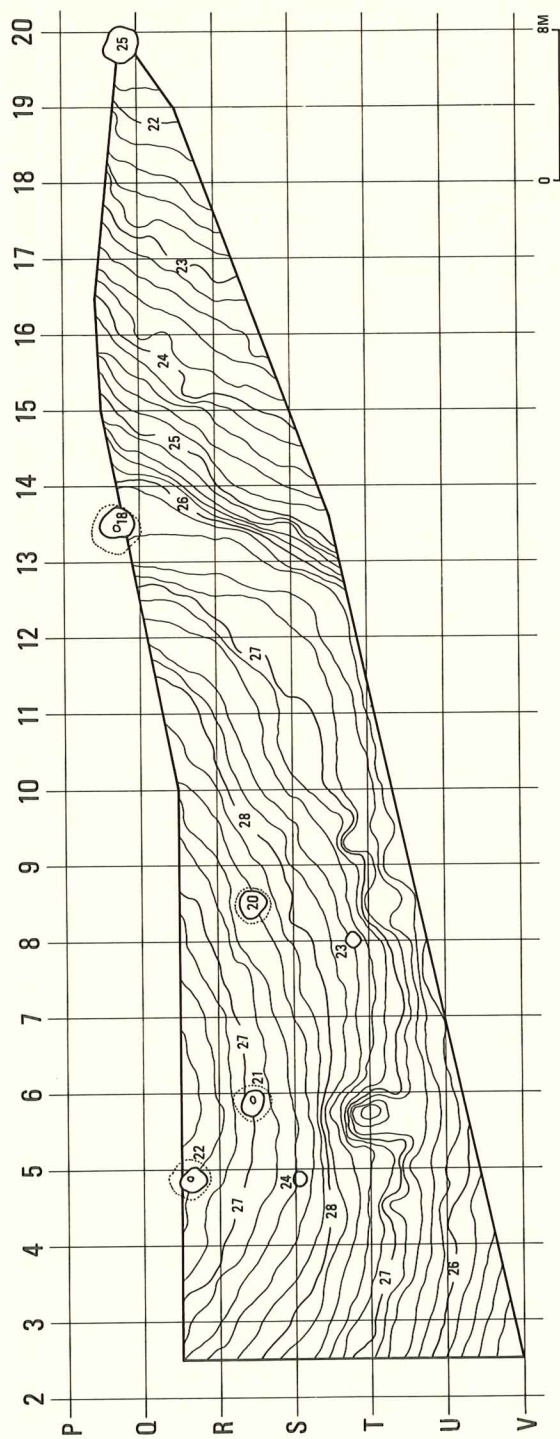
AP-18 (図Ⅳ-2)

位 置 P・Q-13

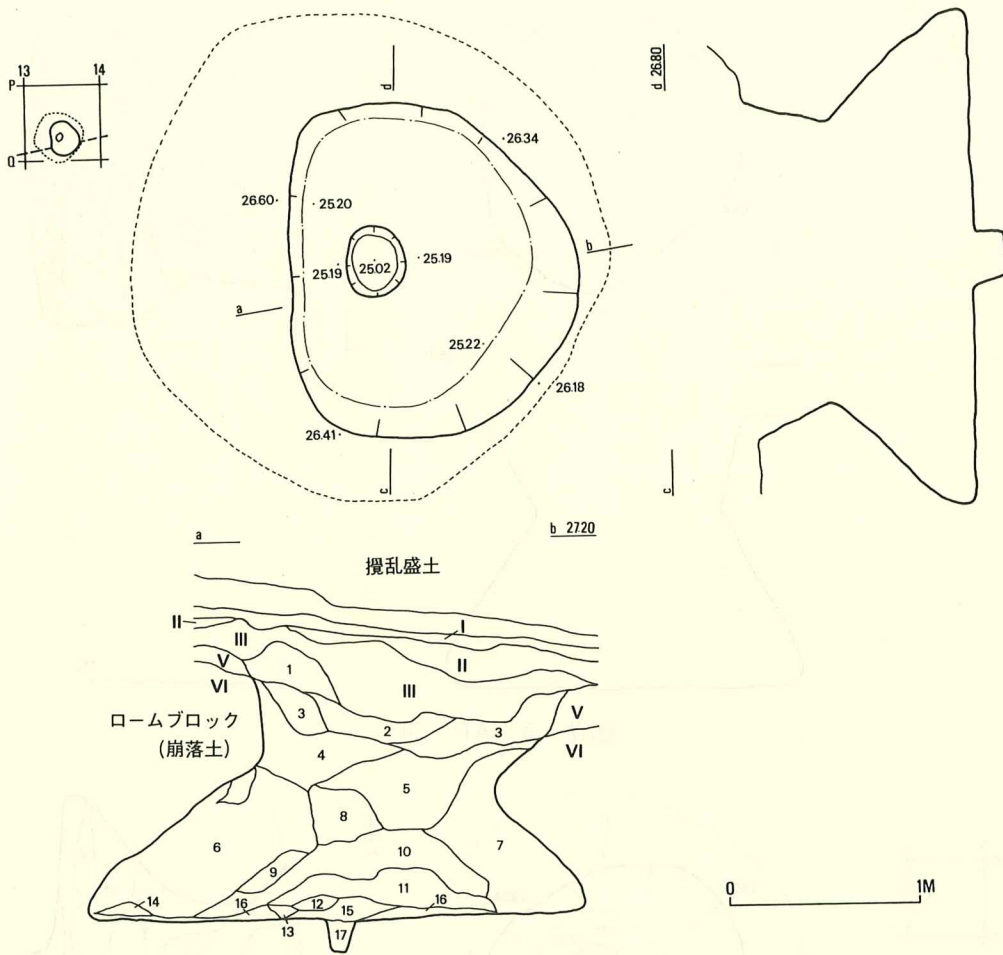
規 模 1.74×1.50/2.57×2.49/1.19

土 層 1：暗褐色土(Ⅲ層に類似するがローム粒が混じる) 2：黒色土(ローム粒が混じる)
3：暗褐色土(多量のローム粒が混じる。炭化物が混入) 4：暗褐色土(ロームブロックが混じる) 5：暗褐色土(炭化物粒が混じる) 6：暗黄褐色土(7層に類似しているが7層の方が若干黒色土の含有量が多い) 7：暗黄褐色土(6層に類似しているが7層の方が若干黒色土の含有量が多い) 8：暗黄褐色土 9：黄褐色土(Ⅵ層壁崩落土) 10：暗褐色土(若干の炭化物粒が混じる) 11：黄褐色ローム(Ⅵ層壁崩落土) 12：暗褐色土(ロームブロック+褐色土) 13：黄褐色ローム(Ⅵ層壁崩落土) 14：黄褐色ローム(Ⅵ層壁崩落土) 15：暗褐色土(ロームブロック+褐色土) 16：黒褐色土(強粘性) 17：暗褐色土(ロームブロックが混じる)

特 徴 Ⅵ層上面で確認された。昭和 59 年度に調査した AP-18 と同一ピットで、当時発掘区外に存在していた末調査部分を今年度調査した。平面形は、墳口・墳底とも東西方向に長い楕円形である。墳底のほぼ中央部から、柱穴状の小ピットが確認された。この小ピットの規模は、0.37×0.33×0.18 m である。平面形は、楕円形である。



図Ⅳ—Ⅰ A地区遺構分布図



図IV-2 AP-18

遺物 出土していない。

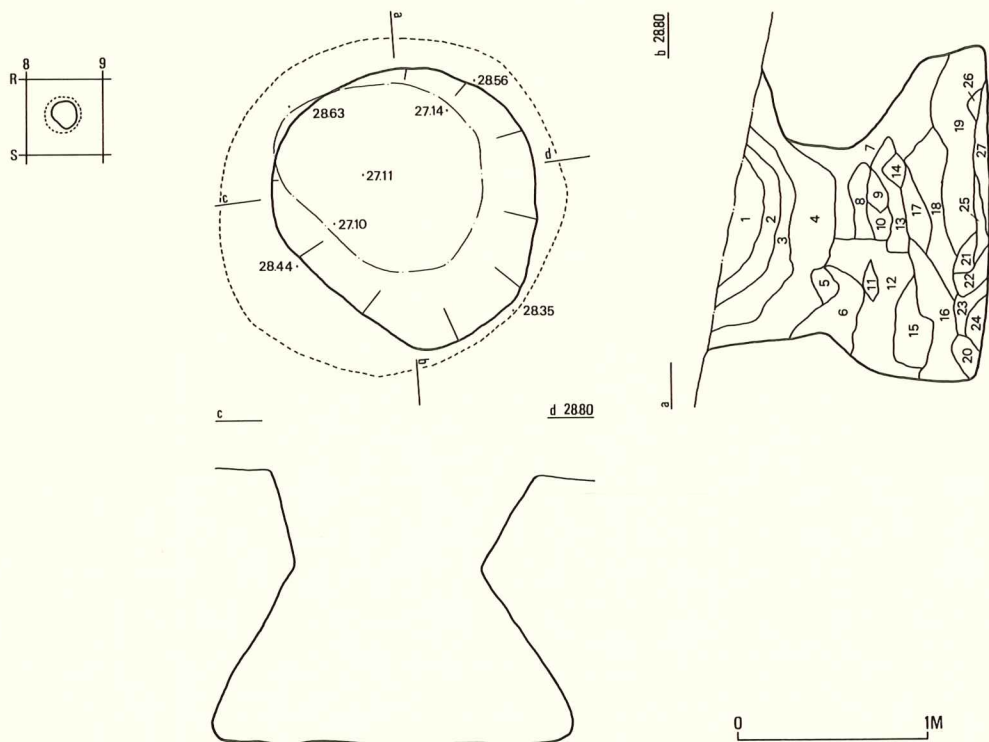
時期 遺物の出土はなかったが、発掘区境界のセクションから、III層下位ないしV層上位からの掘り込みと思われる。このことから、縄文時代前期と考えられる。

AP-20 (図IV-3)

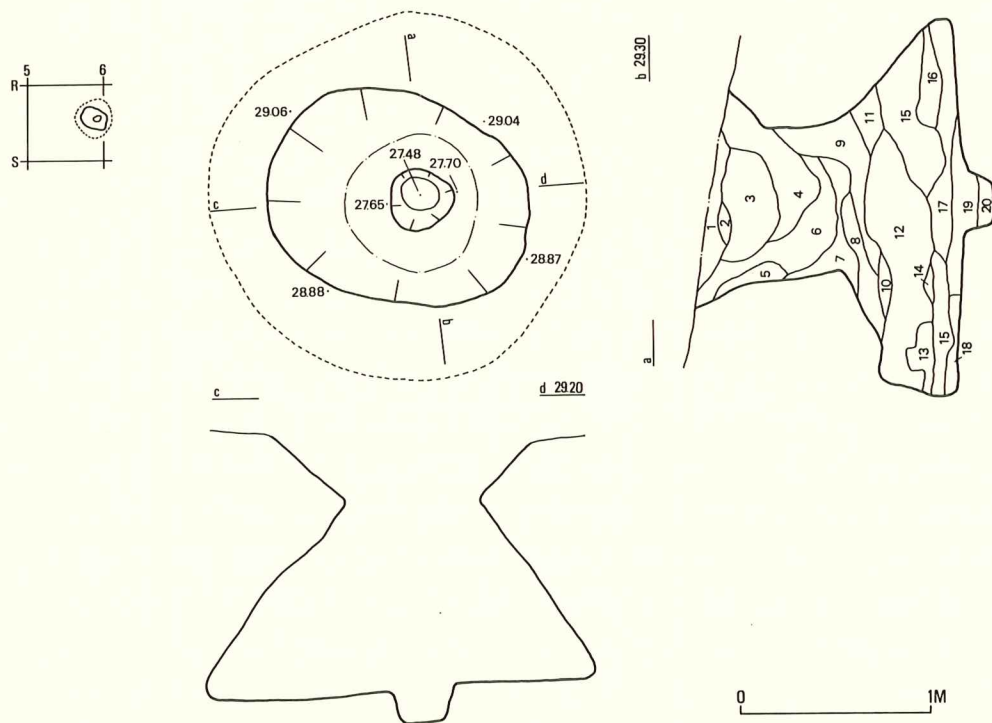
位置 R-8 規模 $1.47 \times 1.31 / 1.90 \times 1.74 / 1.55$

土層 1: 暗褐色土(III層が流れ込んだものと思われる。ローム粒は混じらない) 2: 黒色土(III層が流れ込んだものと思われる。ローム粒は混じらない) 3: 黒褐色土(III層が流れ込んだものと思われる。ローム粒は混じらない) 4: 暗褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 5: 黒褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 6: 褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 7: 暗褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 8: 暗黄褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている)

IV 新道4遺跡 昭和61年度 A地区の調査



図Ⅳ-3 AP-20



図Ⅳ-4 AP-21

りがなく粘性もないためサラサラしている) 9: 黒褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 10: 褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 11: 黒色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 12: 褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 13: 黄褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 14: 褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 15: 黄褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 16: 褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 17: 黒色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 18: 暗褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 19: 黒褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 20: 黄褐色ローム塊(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 21: 黒色土(多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 22: 黄褐色土(ローム塊と多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 23: 黒褐色土(多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 24: 黄褐色土(ローム塊と多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 25: 暗黄褐色土(多量のローム粒が混じる。地はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 26: 黄褐色土(ローム塊と多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 27: 暗褐色土(多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている)

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、塙口が東西方向に長い楕円形、塙底が南北方向に長い楕円形である。

遺 物 出土していない。

AP-21 (図IV-4)

位 置 R-5・6 **規 模** 1.39×1.11/1.92×1.68/1.40

土 層 1: 暗褐色土 2: 暗黄褐色土 3: 黒色土(III層の上部と同質) 4: 褐色土 5: 暗黄褐色土(V層の萌落土。III層の流れ込んだものごとく微粒のロームが混じる) 6: 褐色土(III層の流れ込んだものごとく微粒のロームが混じる) 7: 褐色土(III層の流れ込んだものごとく微粒のロームが混じる) 8: 暗黄褐色土(III層の流れ込んだものごとく微粒のロームが混じる) 9: 黒褐色土(III層の流れ込んだものごとく微粒のロームが混じる) 10: 黄褐色土(V層と同質。多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 11: 暗黄褐色土(ブロック状のロームが混じる。多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 12: 暗褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 13: 黄褐色土(ローム塊。VI層と同質。多量のロームが混じる。

IV 新道4遺跡 昭和61年度 A地区の調査

土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 14:暗黄褐色(多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 15:暗褐色土(多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 16:暗黄褐色(11層と同じ。多量のローム粒が混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 17:褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 18:黄褐色土(V層と同質。多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 19:褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている) 20:黒褐色土(多量のロームが混じる。土はしまりがなく粘性もないためサラサラしている)

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに東西方向に長い楕円形である。墳底面の中央部から、柱穴状の小ピットが確認された。この小ピットの規模は、 $0.32 \times 0.29 \times 0.22$ mである。平面形は三角形に近い。

遺 物 出土していない。

AP-22 (図IV-5)

位 置 Q-4・5 規 模 $1.48 \times 1.21 / 2.18 \times 2.05 / 1.53$

土 層 1:黒色土 2:褐色土(固くしまっている) 3:黄褐色土 4:褐色土 5:褐色土(ローム塊が多量に混じる) 6:褐色土 7:黄褐色土(VI層と同質) 8:暗褐色土 9:黄褐色土(VI層と同質) 10:暗褐色土 11:黒褐色土 12:暗黄褐色土 13:暗褐色土(径2.0 cm程のローム粒が多量に混じる。VI層壁の崩落土) 14:黄褐色土(VI層壁の崩落土) 15:黄褐色土(VI層より色調がやや黒っぽい) 16:暗褐色土(12層と同じ。VI層壁の崩落土) 17:黄褐色土(VI層より色調がやや赤っぽい) 18:暗褐色土(12、15層と同じ) ※5、6、8、10、11は、ほとんど同質のもの、色調とロームの混入量によりやや差がある。

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに北西-南東方向に長い楕円形を呈する。墳底面の中央部から、柱穴状の小ピットが確認された。この小ピットの規模は、 $0.31 \times 0.22 \times 0.27$ mである。平面形は、楕円形である。

遺 物 出土していない。

(2) ピット

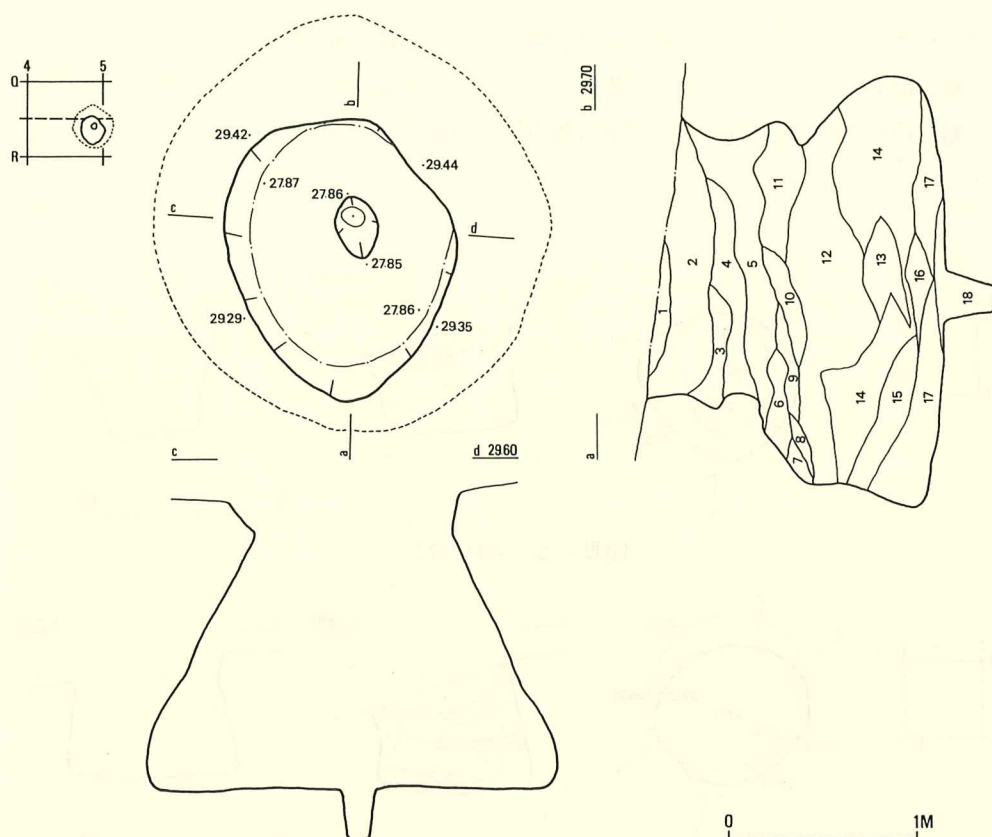
AP-23 (図IV-6)

位 置 S-7・8 規 模 $0.84 \times 0.78 / 0.61 \times 0.44 / 0.56$

土 層 1:黒色土 2:暗黄褐色土 3:暗褐色土(多量のローム粒が混じる) 4:黒褐色土(多量のローム粒が混じる) 5:褐色土(多量のローム粒が混じる。粘性強)

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、南北方向に長い楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺 物 出土していない。



図IV-5 AP-22

AP-24 (図IV-7)

位置 R・S-4 規模 $0.81 \times 0.62 / 0.90 \times 0.84 / 0.68$

土層 1: 黒褐色土(ローム微粒が混じる) 2: 暗黄褐色土 3: 暗褐色土 4: 暗黄褐色土
5: 黒色土 6: 黄褐色土(VI層と同質) 7: 褐色土 8: 黒色土 9: 暗黄褐色土

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、東西方向に長い楕円形である。断面は、フラスコ状を呈する。

遺物 出土していない。

AP-25 (図IV-8)

位置 P・Q-19・20 規模 $1.92 \times 1.60 / 1.76 \times 1.45 / 0.63$

土層 1: 暗褐色土 2: 暗黄褐色土 3: 暗褐色土(1層と類似) 4: 黄褐色土(固くしまっている) 5: 褐色土 6: 褐色土(径1.0 cm程のローム粒が混じる) 7: 黄褐色土(固くしまっている) 8: 黄褐色土(固くしまっている) 9: 褐色土(径1.0 cm程のローム粒が混じる) 10: 黒褐色土(黒色土と黄褐色ロームがまだらに混じる) 11: 黒褐色土 12: 暗褐色土

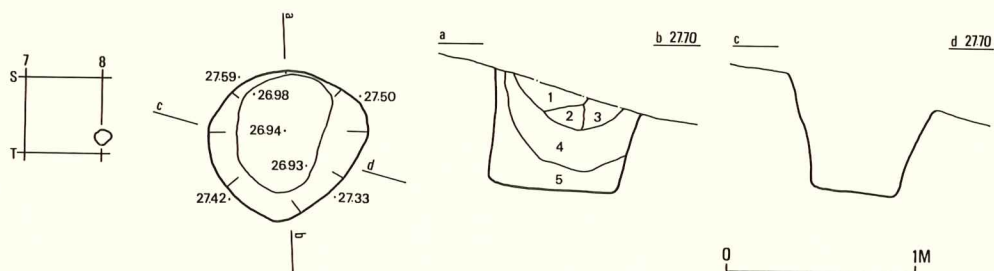
特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底とも東西に長い楕円形である。壁は、

IV 新道4遺跡 昭和61年度 A地区の調査

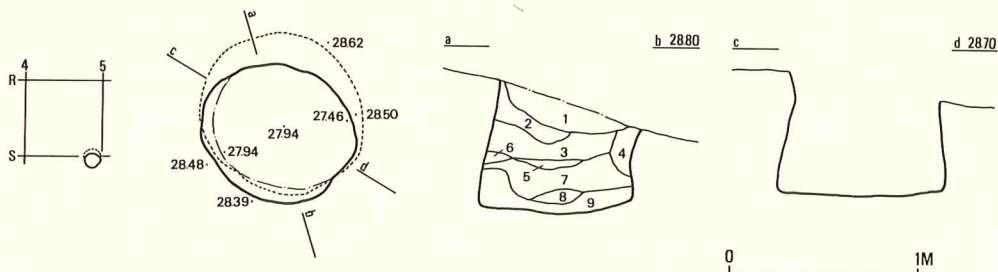
ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み面は、III層ないしV層上面と推定される。

遺物 覆土中からくぼみ石1点が出土している。材質は、泥岩である。

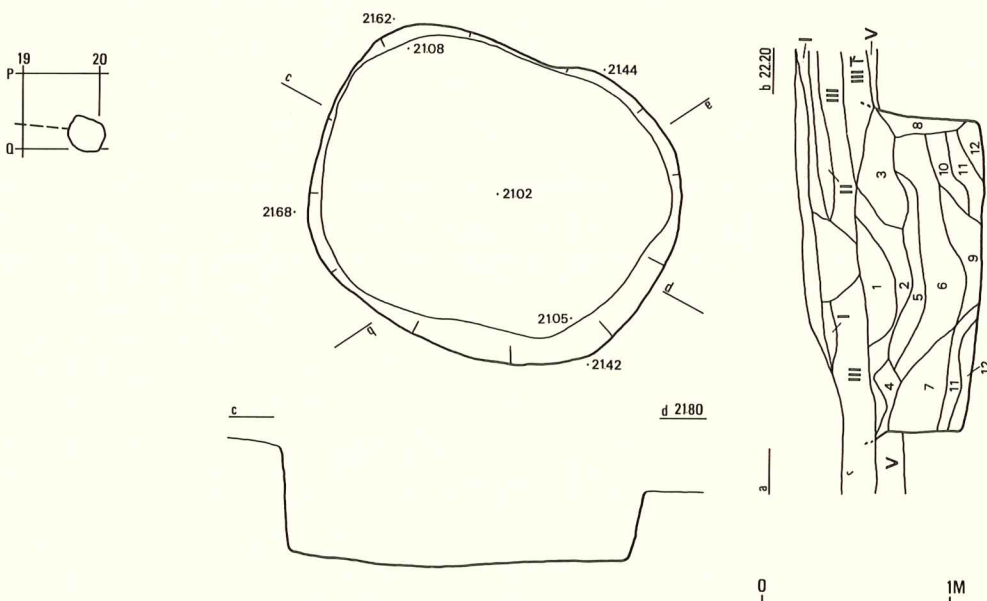
時期 遺構の掘り込み面から、縄文時代中期から後期のものと思われるが、特定には至らなかった。



図IV-6 AP-23



図IV-7 AP-24



図IV-8 AP-25

3. 包含層出土の遺物

本調査区から出土した遺物には、土器、石器、土製品がある。

(1) 土 器

土器には、II群に属するものからV群に属するものまでである。層位的には、III層上位からV群土器、III層中位からIV群・III群土器、III層下位～V層上位からII群土器が出土している。

II群B₂類土器 (図IV-9:1~4)

口縁部に縄線文が施されている。体部には、各種の撚糸文がつけられている。

IV群A₁類土器 (図IV-9:5~8)

5は羽状縄文、6は斜行縄文が施されている。6は、口唇直下に縄線文がみられる。7・8はいわゆる余市式に属するものである。7は胴部に、8は口唇にそって貼付帯がある。体部、貼付帯上ともに斜位の縄文が施されている。

IV群A₂類土器 (図IV-9:9~11)

9・10は、頸部がくびれる深鉢形土器の破片で、いずれも無文である。9の口唇直下に横位、体部に斜位、10の体部には斜位の器面調整痕がみられる。11は体部に横位の縄文がつけられ、その上から沈線文が施されている。大津式に相当するものである。

IV群C類土器 (図IV-9:12~14)

12~14は、堂林式に相当するものである。12は、口径31.5cm、推定器高25.0cmの浅鉢形土器である。口唇部に6箇所の突起部をもち、突起上には刻目がつけられている。体部は斜位の縄文である。13は口縁部破片で、羽状縄文である。14は底部破片で、底面中央部がくぼむ。

V群土器 (図IV-9:15~17)

15は無文、16は口縁部破片で斜位の縄文が施されている。17は、壺形土器の口縁部破片で、無文である。15~17は、大洞式に相当するものである。

(立川トマス)

(2) 石器 (図IV-10・11)

石鏃 (1~6)

1は有茎凹基、2~5は木葉状もしくは卵型を呈する尖基および円基のものである。6は木葉状で平基のものである。2~5は、II群B類~IV群A組土器に伴うものである。材質は、5が黒曜石、1~4・6が頁岩である。

ポイントもしくは、両面加工のナイフ (7)

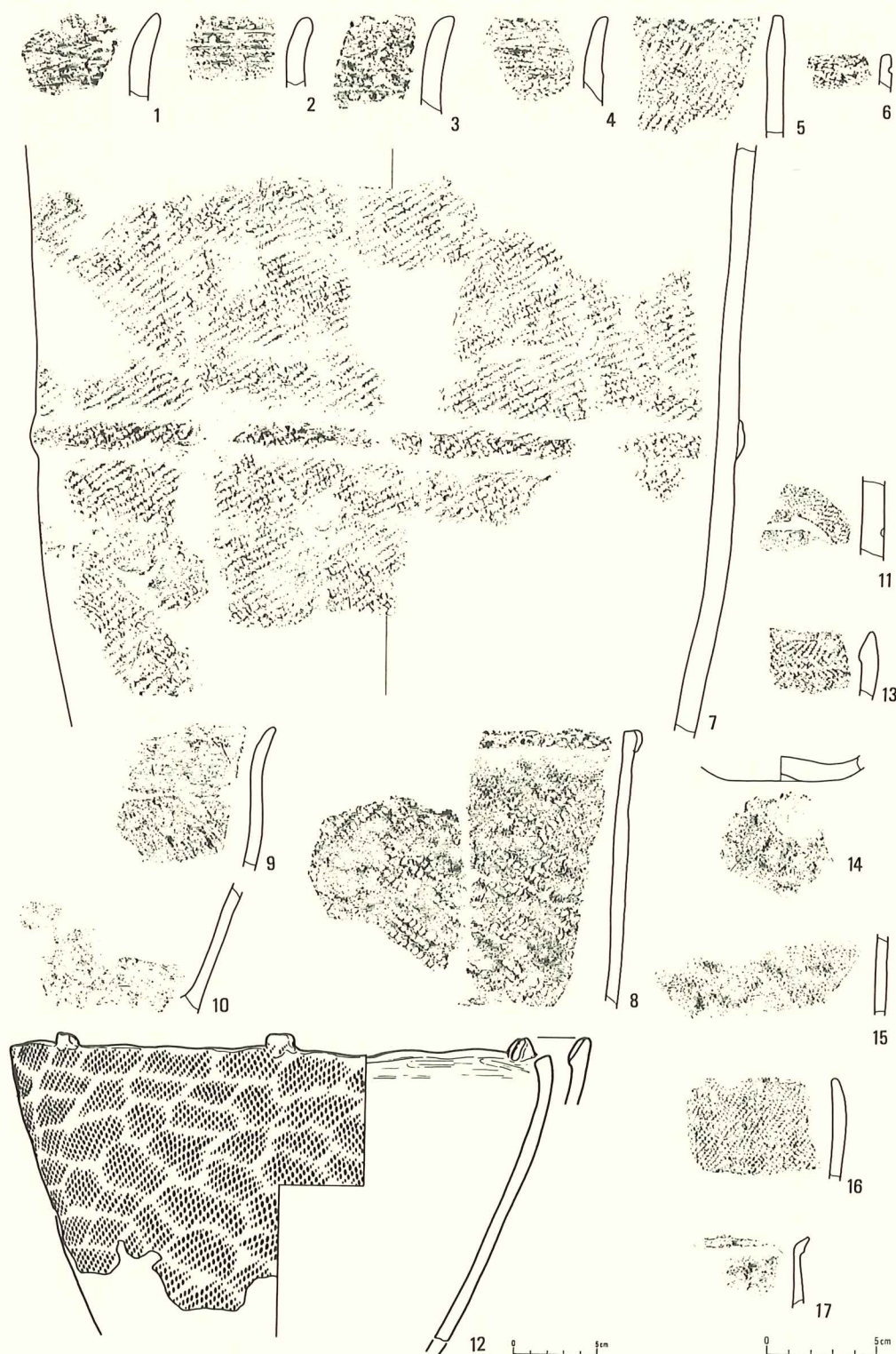
有茎のもので、黒曜石製である。

つまみ付ナイフ (8~12)

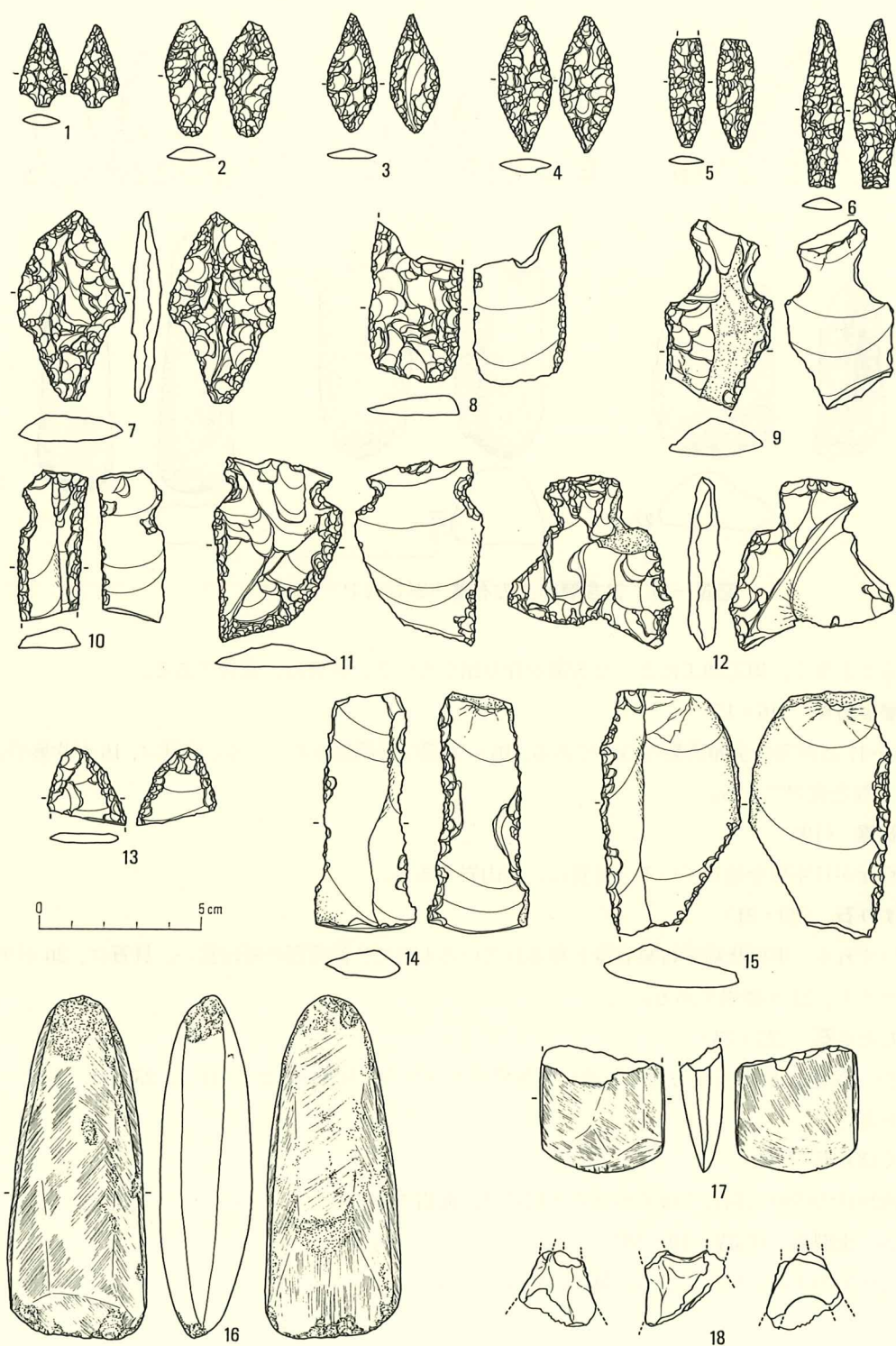
8~11は縦形で、周辺加工により刃部を作り出したものである。12は横形で、両面加工によるものである。材質は、頁岩である。

スクレイパー類 (13~15)

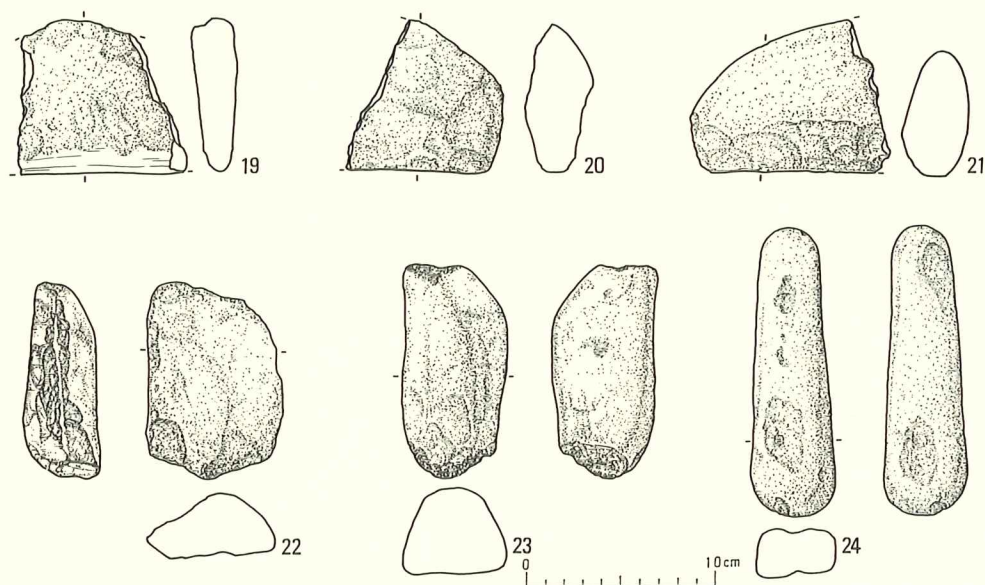
13は、卵形を呈する小型のものと思われる。14、15は、素材である剝片の形状をほとんど変



図Ⅳ－9 包含層出土の土器



図Ⅳ-10 包含層出土の石器・土製品



図IV-11 包含層出土の石器 (24はA P-25出土)

えることなく、周辺加工によって刃部を作り出している。材質は、頁岩である。

磨製石斧 (16・17)

16・17 は両刃の全面磨製の石斧である。16 の刃部は再調整されている。材質は、16 が片麻岩、17 が緑色泥岩である。

石鋸 (19)

断面がU字形を呈している。材質は、安山岩である。

すり石 (20・21)

いずれも、半円状扁平打製石器と称されているもので、使用面の幅は狭い。材質は、20 がデイスait、21 が砂岩である。

たたき石 (22・23)

22 は側縁、23 は長軸方向の一端に使用痕がみられる。材質は、22 が頁岩、23 がデイスaitである。

くぼみ石 (24)

角柱状の礫の二面にくぼみがある。材質は、泥岩である。

(3) 土製品 (図IV-10-18)

釣鐘型の上部の破片である。焼成は良好である。

4. ま と め

新道4遺跡の昭和61年度A地区発見の遺構と遺物については、すでに記載したとおりである。ここでは、昭和59、61年度の調査結果をふまえて、遺跡について考えられるいくつかの可能性について述べ、まとめにかきたい。

(1) A地区の時代性について

昭和59年度の調査結果から、A地区を先史時代の人々が活動の場としていたのは、縄文時代早期～後期の時代にわたり、中でも縄文時代の前期と後期に多く利用されたものと考えられた。これについては、包含層からの時期別の土器出土点数を目安としたもので、その数はI群2点、II群470点、III群96点、IV群452点である。今年度の調査では、縄文時代前期から晩期の時期にわたる土器が出土し、時期別の土器出土点数は、II群50点、III群25点、IV群359点、V群101点である。昭和59年度の土器出土数と同様に、IV群の土器片の出土が多かった。これら昭和59、61年の時期別の土器片出土数からみて、縄文時代早期には痕跡的にしか利用されていないものが、前期と後期に活発な利用があったものと考えられる。また、昭和59年度調査結果で、晩期には利用されなかったと考えられていたが、今年度101点の土器片の出土がみられ、前期、後期ほどの活発さはないものの、生活の場としての利用があったことが確認された。石器についても、縄文時代前期～後期にかけて多出すると考えられている石鏃、つまみ付ナイフ、すり石がみられることから同様のことがいえるだろう。

なお、土器片の出土数については、時期によって土器の大きさが異なることから、単純に対応しない面もあるが、一応の目安となるものである。

(2) フラスコ状ピットについて

今年度の調査で、新しく3基のフラスコ状ピットが確認された。ピット内には、柱穴状ピットを有するもの2基とそうでないもの1基である。これらのピットは、標高28～30mに集中している。覆土については、壁の崩落や外からの流れ込み等の自然堆積によるものである。また、分層に際しては、細分してその各層のサンプリング等を行なったが、わずかな炭化物粒が確認されただけで、良好な資料、結果は得られなかった。遺物については、AP-25の覆土から、くぼみ石が1点出土しただけである。これらのフラスコ状ピットは、昭和59年度A地区で確認されたものと同様の形状、規模のもので性格的にも同様のものであると考えられる。これらは、昭和59年度の弧状に並行して確認されたフラスコ状ピットに続くものと考えられる(図IV-1)。

(3) A地区の性格

昭和59、61年度の調査結果から、遺構の分布、想定される遺構の性格、出土遺物からみて、フラスコ状ピットが食料等の貯蔵穴であるとすれば、狩猟、漁労、採集などの収獲物を貯蔵したと考えられる。あるいは、フラスコ状ピットがもし墓であるとするならば、丘陵の中腹に設定された墓域とも考えられる。いずれにしても、昭和59、61年度の調査で確認された遺構、遺

IV 新道4遺跡 昭和61年度 A地区の調査

物からの性格を論ずるには危険性があり、あくまでも想像の域を脱しないものである。

(立川トマス)

包含層出土遺物一覧表

表Ⅳ-1

名 称	数 量	名 称	数 量	名 称	数 量
土器 II群	50	石 鏃	7	フ レ イ ク	101
III群 A 類	16	ポイント・ナイフ	1	U フ レ イ ク	6
B ₁ 類	9	つまみ付ナイフ	5	軽 石	1
IV群 A ₁ 類	159	スクレイパー	9	礫 [△]	60
A ₂ 類	38	磨 製 石 斧	4	礫	93
B 類	1	た た き 石	3	土 製 品	2
C 類	161	す り 石	3		
V 群	101	石 鋸	1	石 器 等 計	297
土 器 計	535	く ぼ み 石	1	合 計	8

包含層出土掲載土器一覧表

表Ⅳ-2

番号	分類	出 土 区	層	番号	分類	出 土 区	層	番号	分類	出 土 区	層
1	II B ₂	S-11	I	7	IV A ₁	Q-13、R-12	I・III	13	IV C	表 採	—
2	"	P-19	"	8	"	S-10	V	14	"	S-9	I
3	"	S-10	"	9	IV A ₂	O・R-16	I・III	15	V	T-3	III
4	"	S-6	III	10	"	Q-12・13	I	16	"	"	"
5	IV A ₁	P-16	I	11	"	O-17	"	17	V C	"	"
6	"	R-8	III	12	IV C	S-2	I・III				

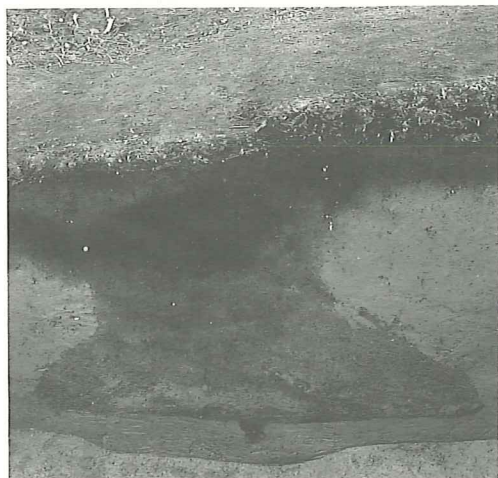
包含層出土掲載石器一覧表

番号	種 別	出土区	層	重 量	石 材	番号	種 別	出土区	層	重 量	石 材
1	石 鏃	R-15	III	0.8	S h	13	スクレイパー	T-4	I	1.9	S h
2	"	T-6	"	1.9	"	14	"	R-5	"	23.7	"
3	"	"	"	1.5	"	15	"	R-11	"	42.0	"
4	"	"	I	2.3	"	16	磨 製 石 斧	Q-3	III	193.7	G n
5	"	U-6	III	1.0	O b	17	"	T-4	I	27.9	Gr. Mud
6	"	S-3	I	2.5	S h	18	鐸 形 土 製 品	R-3	III	5.9	—
7	ポイント・ナイフ	R-10	III	11.4	O b	19	石 鋸	S-8	I	223.0	And
8	つまみ付ナイフ	S-3	攪乱	8.2	S h	20	す り 石	T-3	III	212.3	Dac
9	"	R-13	I	18.6	"	21	"	S-6	"	388.6	S a
10	"	R-15	III	8.1	"	22	た た き 石	P-19	"	259.6	S h
11	"	Q-15	表採	18.8	"	23	"	Q-18	I	399.4	Dac
12	"	T-6	攪乱	17.4	"	24	く ぼ み 石	AP-25	覆土	237.1	Mud

図版 I



A地区 調査風景



AP-18 セクション



AP-18 完 掘

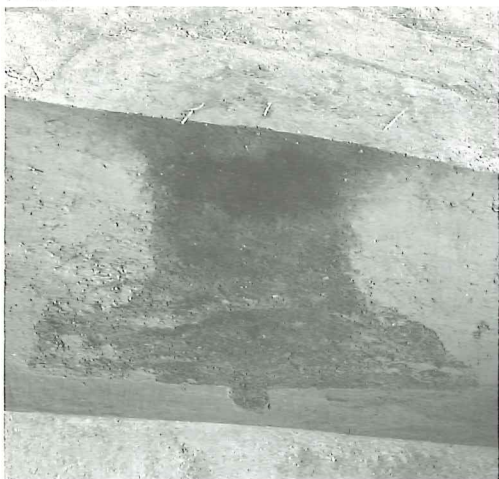


AP-25 セクション

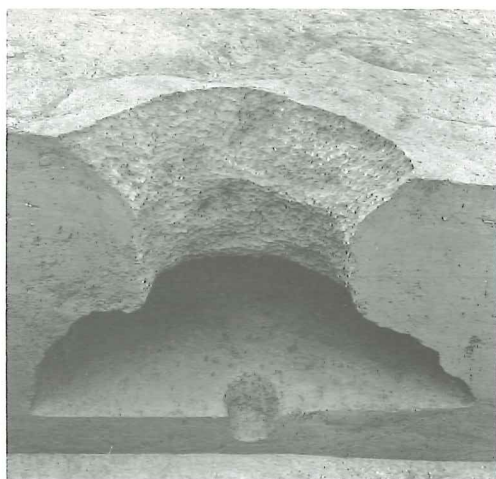


AP-25 完 掘

図版 2



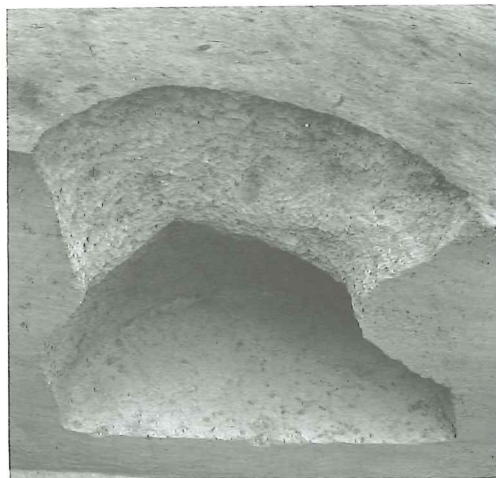
AP-20 セクション



AP-20 完 掘



AP-21 セクション



AP-21 完 掘



AP-22 セクション



AP-22 完 掘

図版 3

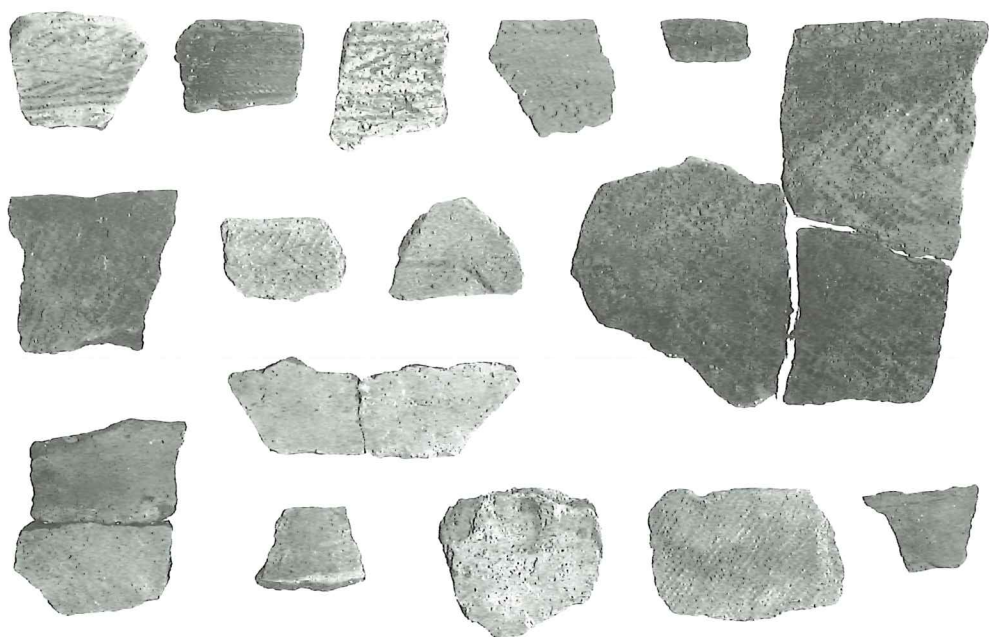


A地区 全完掘風景



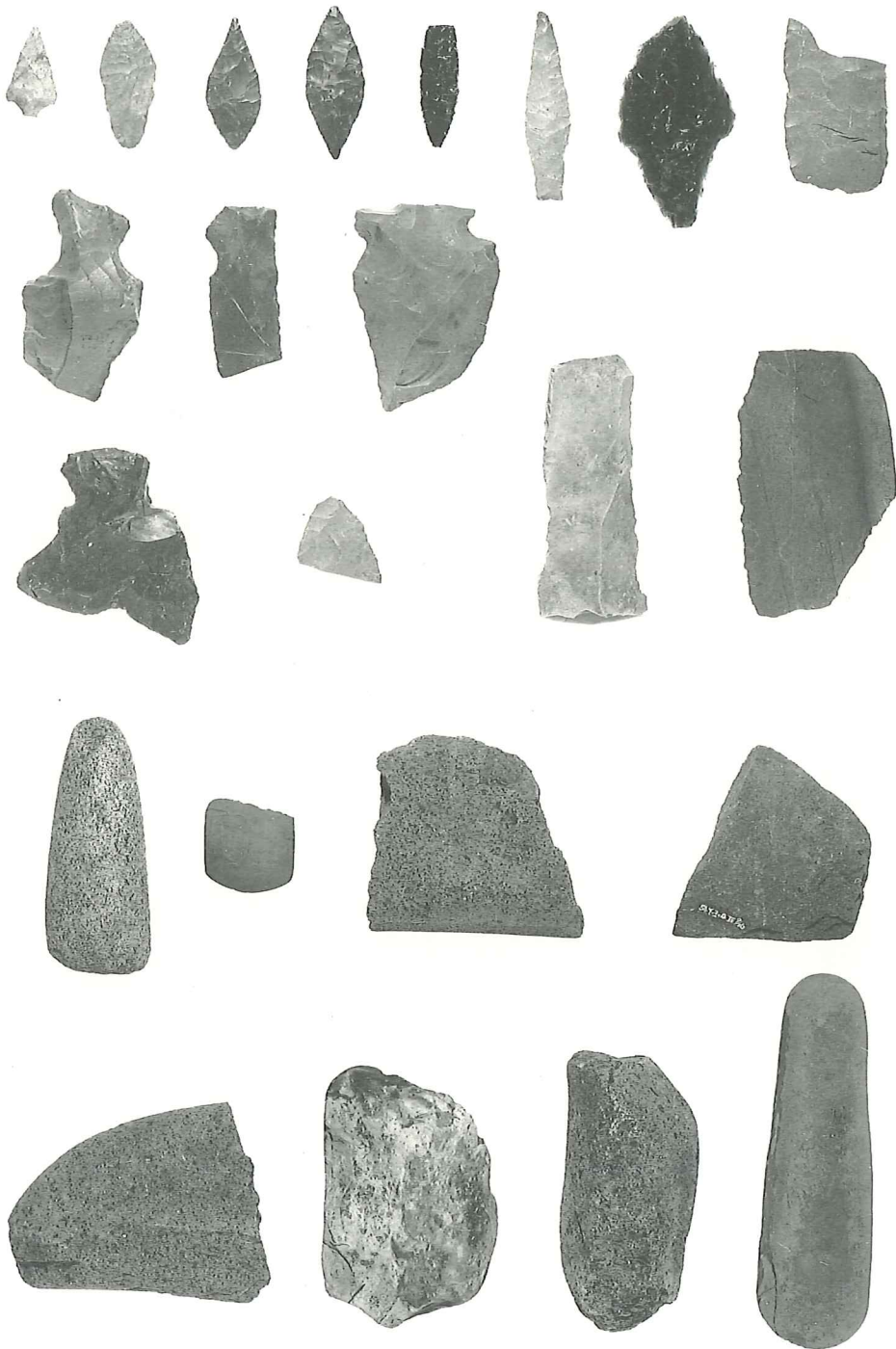
A地区 包含層出土の土器

図版4



A地区 出土の土器

図版 5



A地区 出土の石器

V 新道 4 遺跡 F 地区の調査

1. 遺跡の概要

この地区は昭和 59 年度に調査された A・B 両地区の北側にあたり、A 地区に連なる標高 19~24 m の丘陵地と B 地区に続く標高 17~19 m の海岸段丘面上に立地している。昭和 59 年度 A・B 両地区は町道を境とする 25 ラインによって分けられているが、地形的には標高 23 m あたりより傾斜がなだらかになってきている。調査前の遺跡は、丘陵地部分が杉林であり、抜根による攪乱のある他は遺跡の原形を大きくかえたような痕跡は認められなかった。段丘面部分は 25~27 ラインにかけて町道が通っており、そのため斜面上方にあたる西側が大きく削平されていた。27 ラインより東側は、59 年度 B 地区中央にはいていた沢の周辺部にあたる。この部分の層序を図 V-2 に示した。層名は基本層序と同じである。

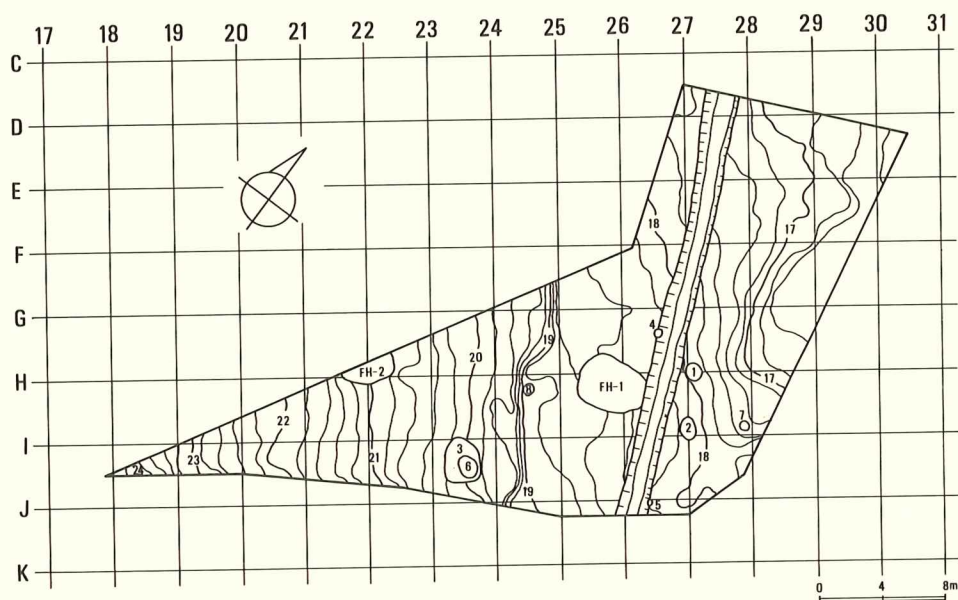
沢は IV 層によって埋没がはじまっている。時期は連続する B 地区の IV 層上面に II 群 B₂ 類土器の捨て場が形成されていたことから、縄文時代前期後葉以前と推測される。IV 層の上部には、厚さ 40 cm 程の III 層が堆積している。III 層中からは II 群 B₂ 類から IV 群 A₂ 類までの遺物が出土した。それらの出土状況からは、III 層黒とした上位 10~15 cm のところが III 群 B₃ 類以降の自然堆積層、III 下とした下位 20~30 cm のところは層界明瞭でローム粒が多いなどの特徴から III 群 B₃ 類期の排土層と考えられた。新道 4 遺跡では昭和 60 年度 B 地区（遠藤他 1986）の調査で IV 群 A₂ 類期後半の盛土が発見されているが、これに比べると今回の排土層に含まれる遺物は極めて少なく、ほぼ土砂のみを廃棄する“長者屋敷パターン”（高橋 1979、佐藤他 1981）に類するものであろう。近年では、この沢と町道にはさまれた部分は、道路に沿った溝が牛の逃亡を防ぐのに都合のよいことから、放牧地として利用されていたと思われ、さらにその上を I' 層とした以前の発掘調査や道路切りかえ工事などの排土が覆っていた。

調査の結果、遺構として住居址（2）、ピット（8）、焼土（2）が検出された。住居址は 2 軒とも縄文時代中期のものと判断された。FH-1 は卵形の平面形を呈するもので、覆土から床面にかけて多くの炭化物が出土し、焼失住居址と考えられる。FH-2 は調査範囲外にかかっており、また、立ちあがりの確認されない部分もあって平面形は不明瞭である。両者とも中央部に壁の硬くしまった円形の掘りこみがある。ピットでは、平面形が小竪穴状のもの（FP-3）や楕円形のもの（FP-2・6）、円形のもの（FP-1・4・5・7・8）がある。覆土中から III 群 B₃ 類の復原土器を出土した FP-3・8 を除いて、伴出遺物に乏しい。このため、時期の確証は得られないが、周辺の遺物分布状況から縄文時代中期末葉のものが多くと思われる。

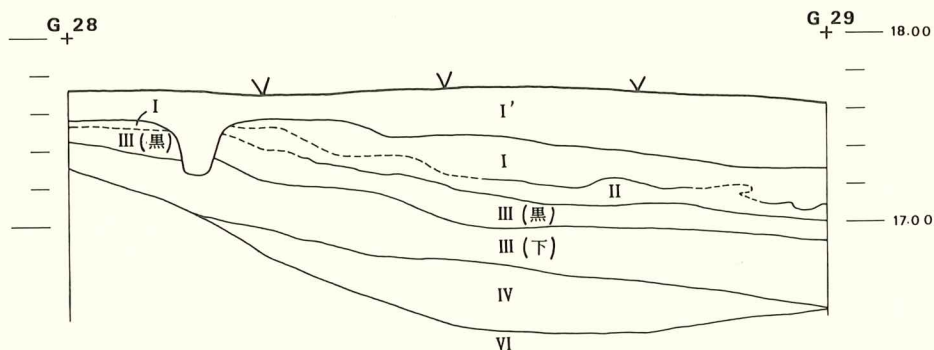
遺物では土器が 2,982 点、剥片・礫を含む石器類が 2,491 点出土した。土器では I 群 A 類、II 群 B₂ 類、III 群 A 類・B₃ 類、IV 群 A₁ 類・A₂ 類、V 群 C 類が出土している。このうち、主体となるのは III 群 B₃ 類で、総土器片数の 70% 近くを占めている。これについて、II 群 B₂ 類と IV

V 新道4遺跡 F地区の調査

群 A₂ 類がそれぞれ 15%程度出土している。ここでⅢ群 B₃ 類としたものの多くは煉瓦台式や涌元 I 式（大沼 1981・1986）とされているもので、その内容と編年的位置を明確にするための良好な資料と思われる。石器では石鏃、ドリル、ポイント・ナイフ、つまみ付ナイフ、スクレイパー類、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、砥石、石皿などが出土している。器種の片寄りは明確ではないが、西股遺跡（森田他 1974）で注目された縦長剥片を素材としたナイフ（今回はスクレイパー類として分類している）が目立っている。出土状況では、FP-3 の位置する I-23 区から出土した石器の多い事が注目される。また、剥片採取過程を示す接合資料も得られている。



図V-1 遺跡の地形と遺構分布



図V-2 沢の層序

2. 遺 構

(1) 住 居 跡

FH-1 (図V-3~5、図版V-2・6・7)

位 置 G・H-25・26 規 模 (4.2)×3.1/(4.1)×2.9/0.4

特 徴 町道下位のVI層面で検出された。平面形は卵形で、一部を近年の溝によって切られている。中央部にくびれるところがあり、増・改築の行われた可能性も考えられる。

覆土は1:暗茶褐色土(ローム粒・木炭粒を含む) 2:茶褐色土(ローム粒を多く含む。木炭は少ない) 3:褐色土(焼土を多量にのせるが、ローム粒は少ない) 4:暗黄褐色土である。ビット内には5:暗褐色土(薄い焼土を乗せ、ローム粒を多く含む) 6:暗褐色土(焼土・ローム粒・木炭粒を少量含む)が堆積している。Kは町道下の盛土である。覆土1は含まれるロームの多いaと少ないbとに分けられるが、明瞭には識別されない。覆土1と3との間には薄い黒色土の筋があり、そこを境に1では遺物が多く、3には少ない。1から掘りこまれた落ちこみが断面で確認されたが、立ちあがりを明確には捉えられなかった。木炭・焼土のとぎれているところを調べた限りでは、1.4×1.0mの楕円形を呈するようである。床面から覆土3にかけて多くみられた炭化物や焼土は西側に多く、東側には少ない。炭化物の中には他に比べしっかりした残存状態のものや、切り傷のような跡を残すものがある(図版V-6-2)。木製品の可能性もあるが、形状が不明確で断定できない。

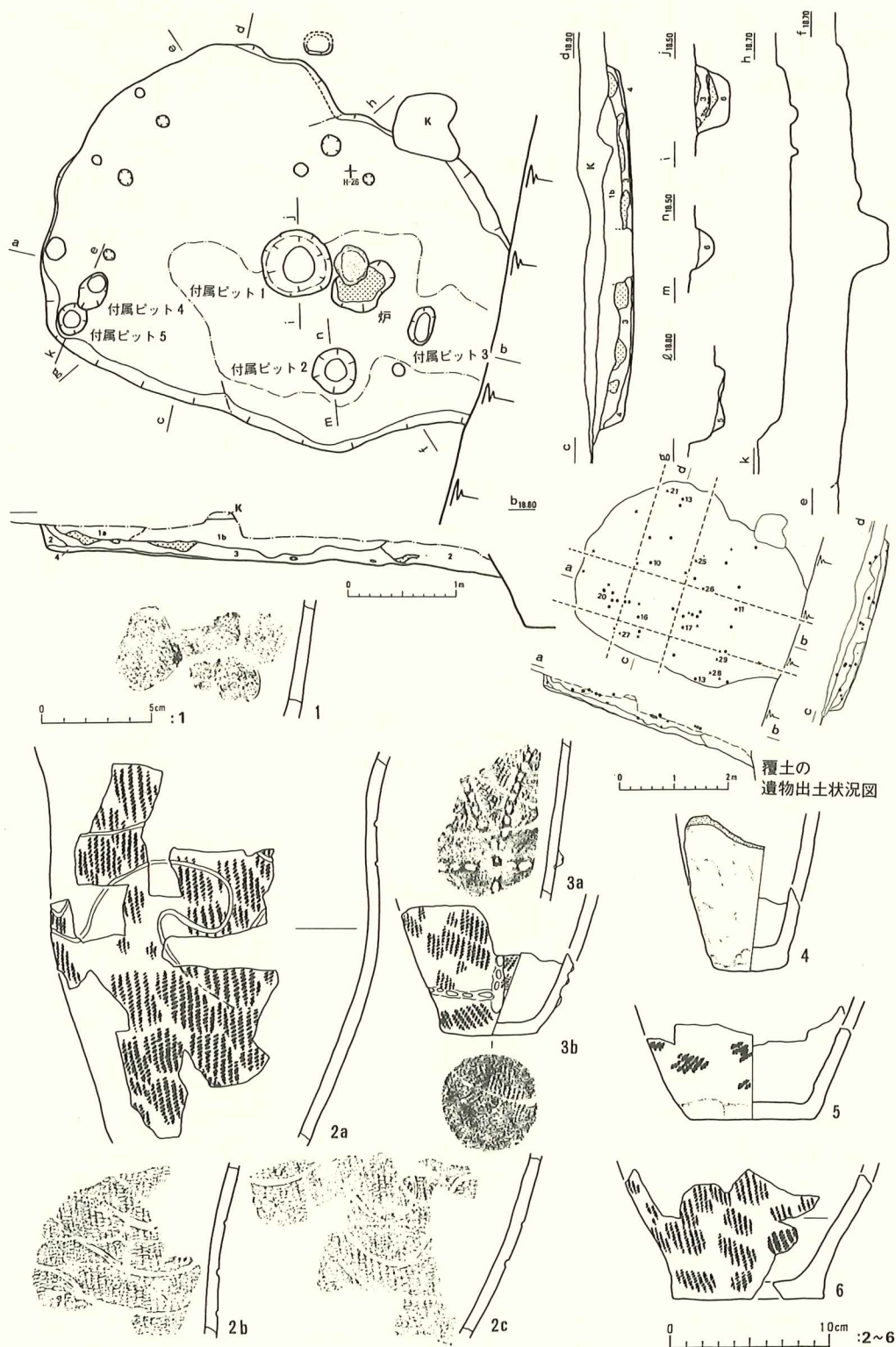
床面では、炉跡と付属ビット(5)、柱穴様ビット(5)が検出された。白ヌキのものは残く、床面の凹凸と区別しがたいものである。炉跡は5cm程度の浅いくぼみの状態で、下面に硬くしまった焼土がある。炉の上部には30の石皿がのっているが、炉跡確認面との間に数cmの暗褐色土をはさんでいる。炉跡の周辺は硬くしまっているが、面的には石皿設置面とはほぼ同じ位の高さである。中央部には壁の硬くしまった付属ビットがある(図版V-2)。断面形は整った鉢型を呈している。覆土中の焼土や炭化物は、住居焼失時の土(覆土3)がはいりこんだものと考えられ、壁面を焼きしめた痕跡はない。類例がBH-11やFH-2に認められる。

遺 物 床面からはIII群B₃類土器(1)と石皿(31)の他、数点の土器小片が得られている。

1は比較的小型の土器で、LあるいはLR原体を縦回転した、まばらな縄文がついている。

2~30は覆土出土の遺物である。分布図を示してあるが、層位図に投影した遺物はa-b、c-dのセクション・ラインから片側50cm以内のものに限っている。図示された遺物で出土地点のわかるものは、図番号を加えている。土器は7がII群B₂類の他は、III群B₃類のものである。2は縄文地に沈線文の描かれるもので、大きな波形状のモチーフが器体をめぐると思われる。4の底部周辺は指でおさえたような跡が残っている。8・9は無文の土器であるが、9には粘土帯の凸凹がそのままになっている。10の穿孔跡は補修孔を意図したものと思われる。11の縄線の原体はLRである。16にはいわゆる短刻線、18には浅い縦の縄線文がある。19は無節原体を縦回転している。20は貼付帯の剝落跡に縄文の認められるもので、貼付前に

V 新道4遺跡 F地区の調査



図V-3 FH-1と出土遺物



図V-4 FH-1出土の遺物(1)

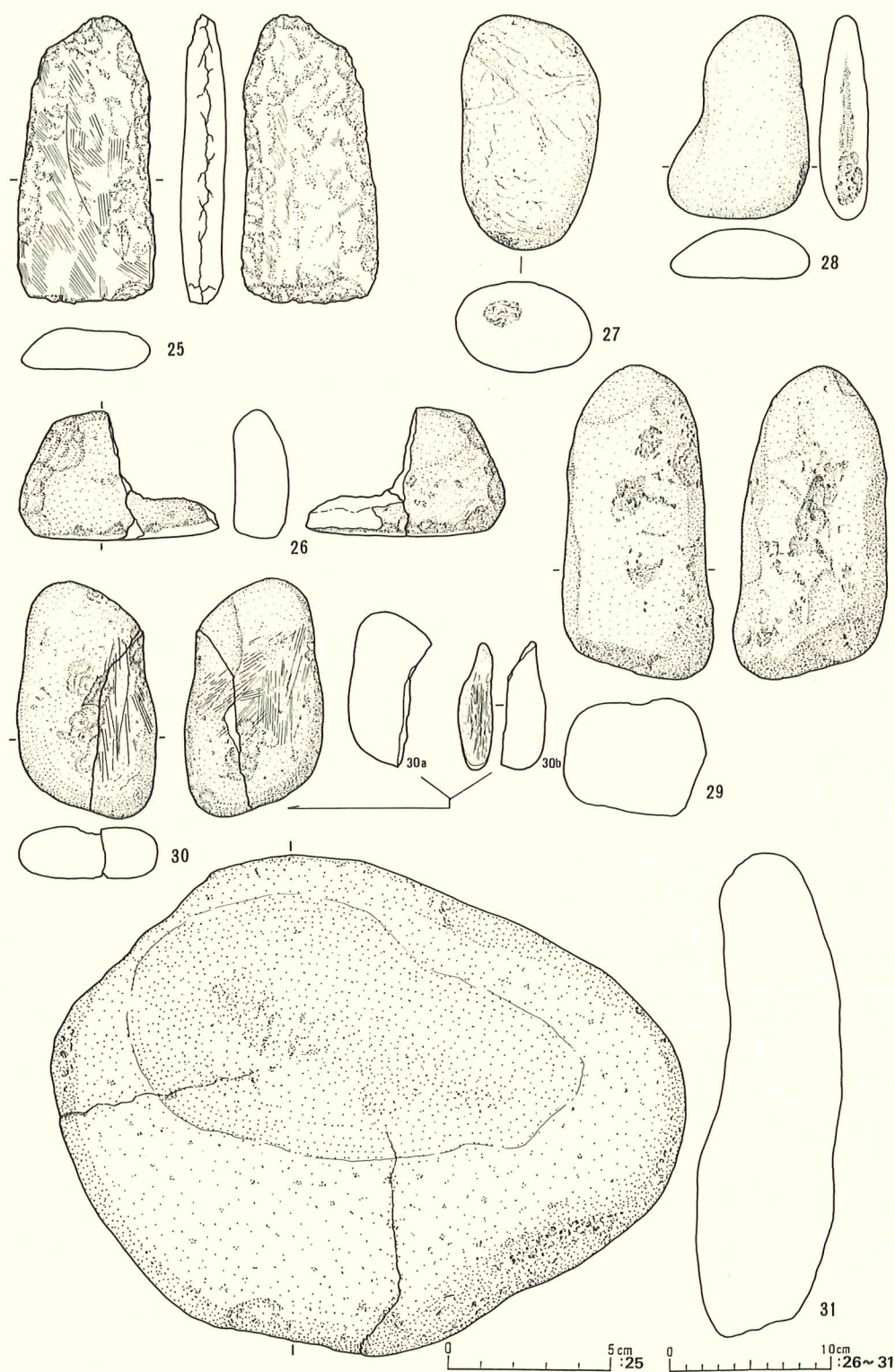
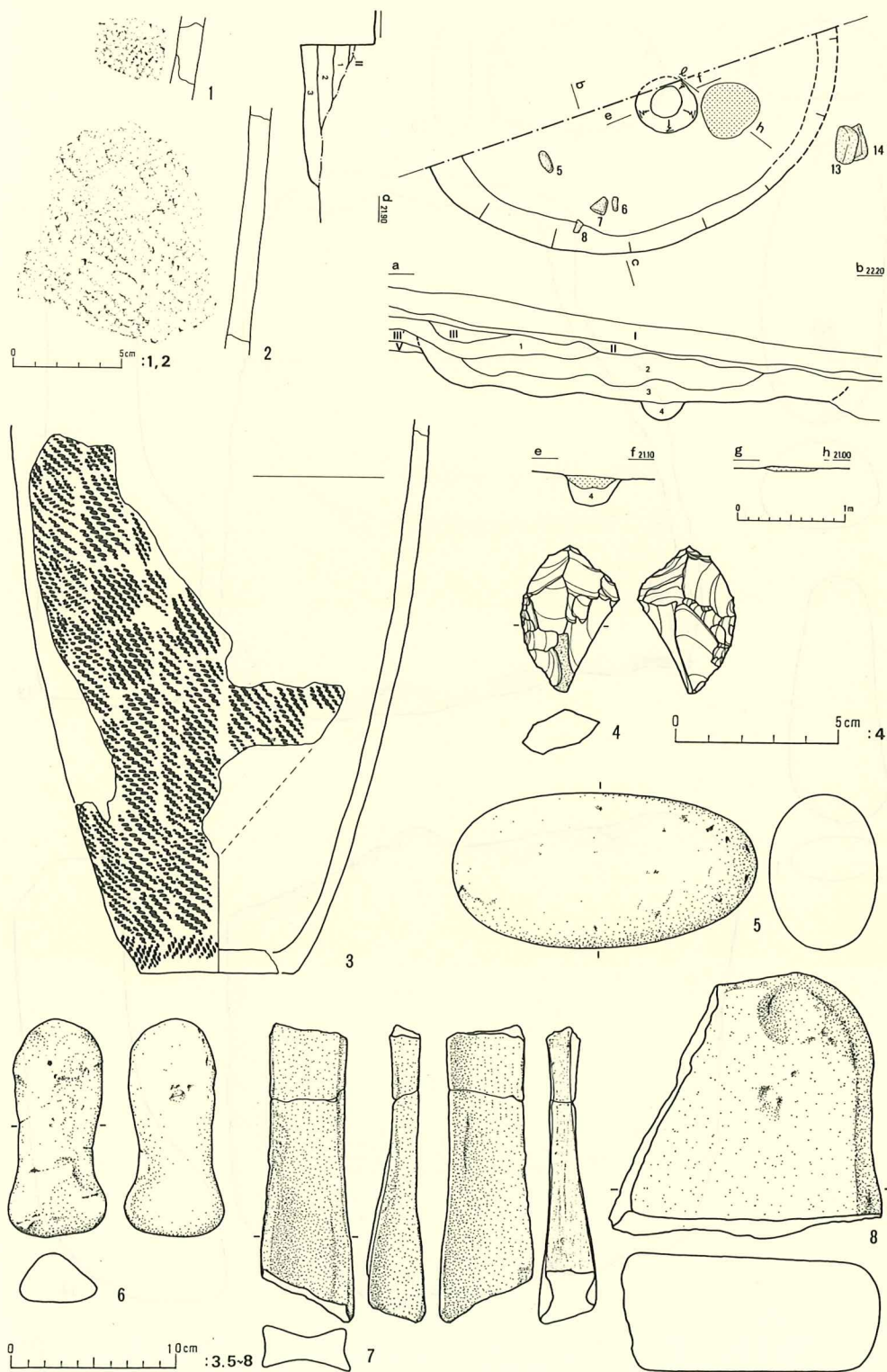
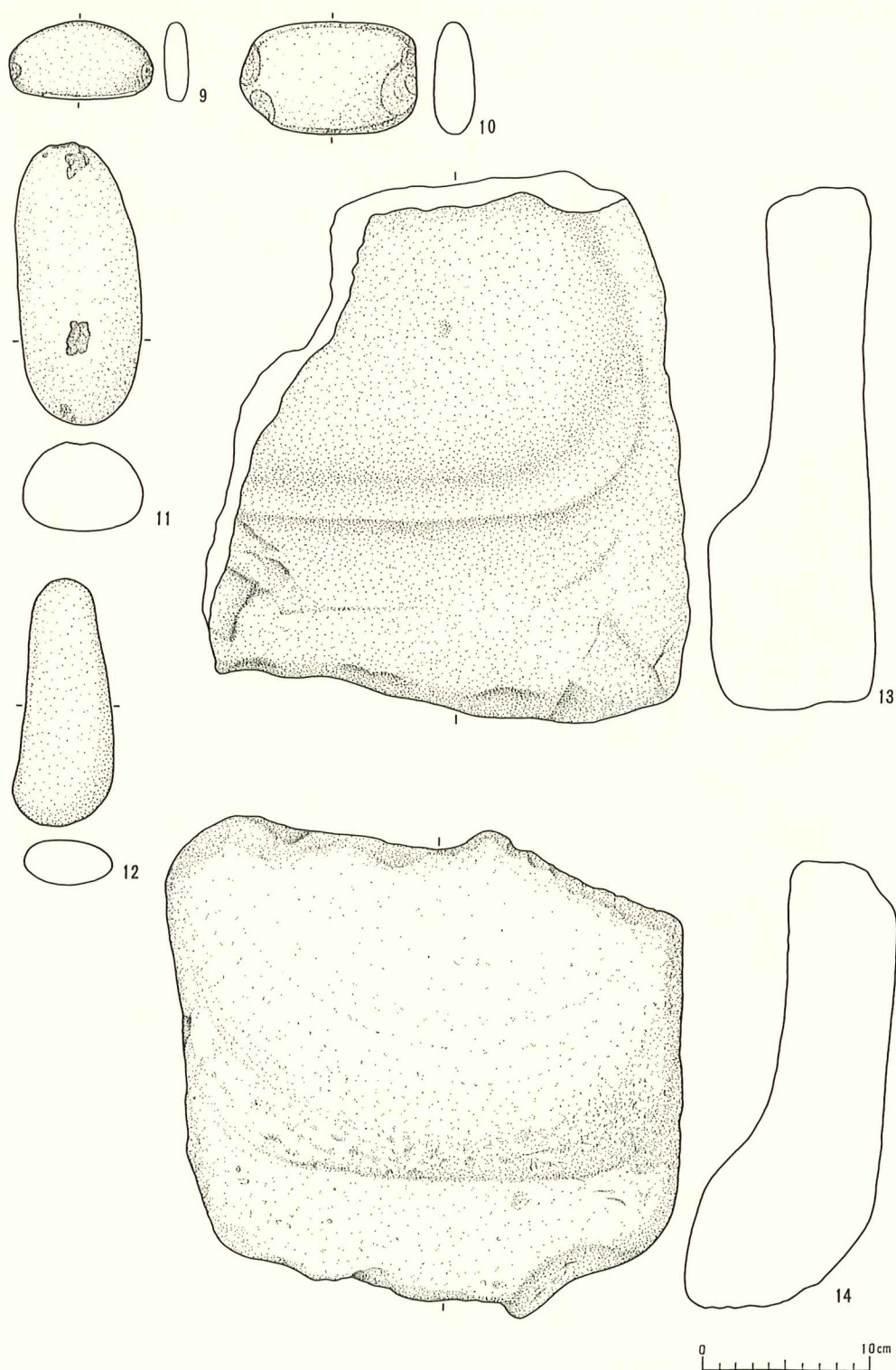


図 V-5 FH-I 出土の遺物 (2)



図V-6 FH-2と出土遺物



図V-7 FH-2 東側出土の一括礫器

地文のつけられていた事がわかる。右側の破片はH-22区出土のもので、これが接合するまでは13と同一個体と考えていた。13は貼付後に地文が施されるものである。

石器ではスクレイパー(21~23)、Uフレイク(24)、石斧(25)、すり石(26)、たたき石(27・28)、くぼみ石(29・30)などが得られている。21は黒曜石製で、床面直上から出土した。28はたたき石とすり石の機能を備えたもので、側縁と図化されていない面に擦痕がある。30もすり石とくぼみ石との機能をあわせもつものである。図左側の面ではaにくぼみがあり、接するbにはない。かわりに、bにはaとの接合面に擦痕がある。aとbとに破損した後、前者はくぼみ石として、後者はすり石として、主に利用されたのであろう。

時期 形状や出土遺物より縄文時代中期末葉と判断される。覆土3で採集した木炭による¹⁴C値は 3770 ± 120 y. B. P.、付属ピット1で採集したものでは 3740 ± 50 y. B. P.の値が得られている。

FH-2 (図V-6・7、図版V-3・6)

位置 G・H-21・22 **規模** $(3.95) \times (1.46) / (3.50) \times (1.20) / 0.42$

特徴 V層上面で検出され、斜面下方の立ちあがりは確認できなかった。土層断面ではIII層中から掘りこまれている。遺構は調査範囲外にかかっており、平面形は明確ではない。

覆土はすべて黒色土で、1・2・3の順に含まれるローム粒が増えている。III'はわずかにローム粒を含む黒褐色土で、これらの層界は不明瞭である。付属ピットの中には4:暗黄褐色土(炭化物・焼土を多く含む。土にしまりが無い)がある。

床面では焼土と付属ピットが検出された。焼土跡は地床炉と考えられる。付属ピットはFH-1に認められるものに類似し、壁が硬くしまっていた。円形の平面形、断面が鉢形の形状も共通する。柱穴は確認されていない。なお、住居の東側から9~14の礫石器類がまとまって検出された。13・14の石皿の下から9~12が出土した。傾斜はあるもののFH-2床面より下位で確認され(図版V-3-2)、掘りこみの有無に注意したが、見出されなかった(図版V-3-3)。FH-2の立ちあがりの識別が困難であったことから、FH-2に伴う可能性も考えられ、ここで報告する。これらが住居址内に残されていたとすれば、FH-2の平面形は炉・付属ピットを長軸に配する楕円形になるのかもしれない。

遺物 床面から5~8の礫石器類が出土している。5・6・8には明瞭な使用痕は認められない。7は四面を使用した砥石で、上部の破片はG-28区のI層から出土している。1~4は覆土出土の遺物で、1はII群B₂類土器、2・3はIII群B₃類土器、4はUフレイクである。9~14は先述した、一括出土の礫石器類である。10には打欠きが認められるが、剝離跡は磨耗しきったようになめらかになってしまっている。すり跡は認められないが、形態からすり石に分類した。12には特に明瞭な使用痕が認められない。

時期 覆土出土の土器から縄文時代中期末葉の可能性が高い。7は「四面砥石」と呼ばれているもので、道央部では北筒式や余市式に伴う事が多い(西田 1985)とされている。

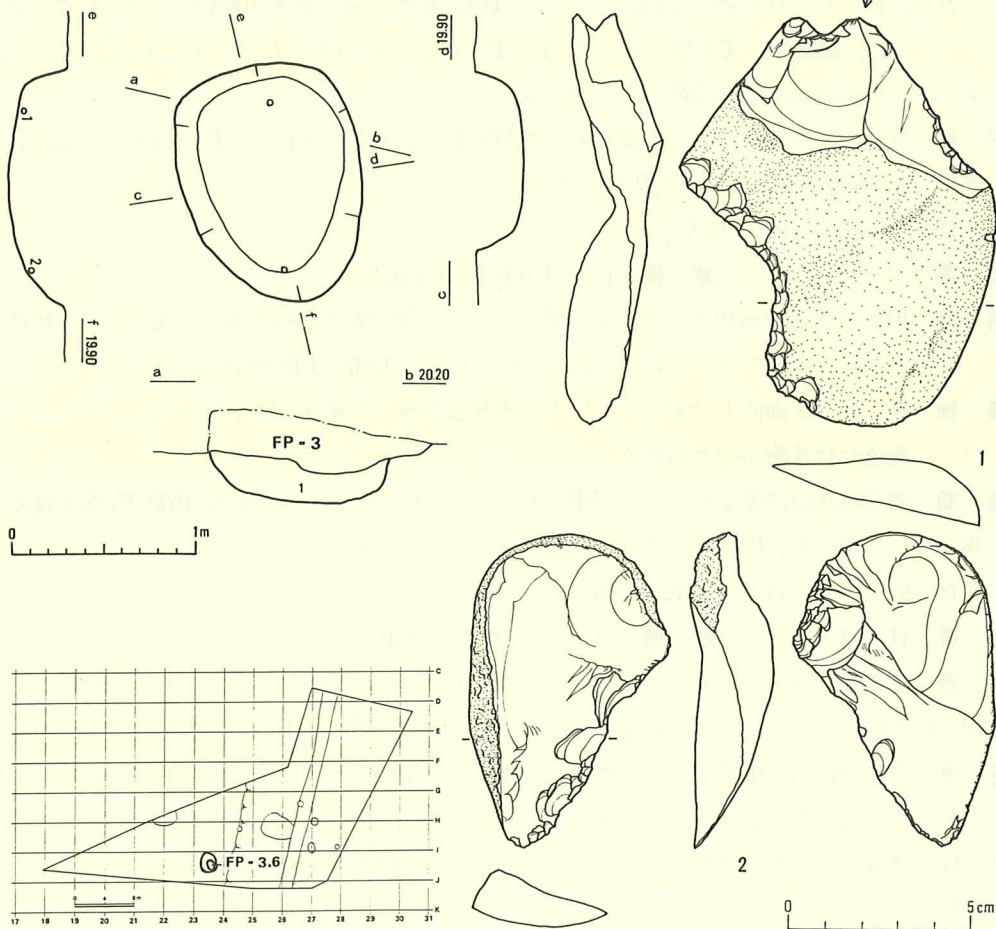
(2) ピット

7個のピットが確認されている。分布は、町道や溝により削平されたものもあろうが、23ラインより沢にむかって点在する状況である。時期や形態、立地による分類は行えなかったので、おおよそ斜面上方にあるものから記述していく。

FP-3 (図V-8、図版V-4・6)

位 置 I-23 規 模 $2.6 \times 2.3 / 2.2 \times 1.8 / 0.4$

特 徴 V層上面で確認されている。斜面下方側の立ちあがりはつかめなかったが、平面形は隅丸方形と思われる。壁のくずれか、瘤状の張りだしが認められた。覆土は上位に、1：黒褐色土（ローム粒を少量含む）、2：茶褐色土、3：明褐色土（まだらで、ローム・ブロックを含む）、下位に5：暗褐色土（ローム塊を含む。木炭粒が帯状に認められ、土にしまりがある）がある。部分的に4：褐色土（ローム粒、木炭粒を含む）、6：暗黄褐色土（木炭粒を含む）、7：明黒褐色土（ローム粒を含む）が認められる。覆土4とV'としたまだらの褐色土との識別は困難であったが、V'に木炭粒の認められない事を目安にした。焼土が1と5の境に認められた。



図V-9 FP-6と出土遺物

5の下部にあるものは、わずかな焼土粒が認められる程度である。遺構はFP-6の上面を切って構築されている。

遺物 すべて覆土中から得られている。遺物出土状況図では、セクション・ラインより片側25cm以上離れていないものを土層図に投影している。覆土5に相当する部分に遺物が認められるが、図版V-4-3や現場のメモをみると、覆土1から出土していると判断される。状況図中の土層図に示したように、1層が点線のように西側に延びていたと思われる。

1は胴上半部のすぼまる器形をしている。縄文・沈線の順で施文され、その後、縄文のすり消しを行っている。下書き様の沈線や地文の縄文が消えずに残っているところがある。得られた破片からわかる文様配列は、模式図で示した。器面には、ほぼ全面にわたって赤色顔料の付着が認められる。2も1と類似した器形の土器で、破片は遺構外からも得られている。口縁部は無文で、胴部は貼付帯・縄文・縄線文の順に施文されている。貼付帯と縄線(LR)の交点にはボタン状貼付がある。1には沈線で括られたモチーフが連結せずに、丸く描かれた独立した部分がある。2では貼付帯が肩部に限定されると思われ、そこに縦の縄線が施される。これらは新しい文様要素と思われ、あるいはIV群A₁類に含まれる可能性がある。石器ではポイント(3)、礫皮面を残すUフレイク(4)、打ち欠きのあるすり石(5)などが出土している。5では図左側の面に煤の付着が認められる。

時期 周辺の遺物出土状況から縄文時代中期末葉のものと思われる。覆土出土の土器は、III群B₃類とIV群A₁類との接点的な様相をもっている。

FP-6 (図V-9、図版V-4)

位置 I-23 **規模** 1.3×1.0/0.9×0.6/0.3

特徴 FP-3床面で検出された。平面形はいくぶん角のある卵形である。覆土は1:褐色土(まだら。ローム粒を多く含む)で占められている。上部はFP-3に切られている。

遺物 1・2とも床面直上で出土している。礫皮面を残した素材に簡単な刃部の認められるもので、褐色の付着物が認められる。

時期 縄文時代中期末葉であろう。FP-3より古いものであるが、周辺にIII群B₃類を遡る遺物の少ないことから、FP-3と大きな隔たりはもたないと考えられる。

FP-8 (図V-10、図版V-4・6)

位置 H-24 **規模** (1.0)×-/0.7×0.6/0.5

特徴 町道と丘陵部とのカット面で検出され、上部の大半は削平されている。残存部からは円形の平面形とフラスコ状の断面形を持つと思われる。覆土は1:暗褐色土である。

遺物 覆土中位からIII群B₃類土器(1)と礫(2)が得られている。他にはII群B₂類の小片がある。1の底部は指でおさえた跡が残っている。2には黒色の煤状の付着物がある。

時期 確証はないが、遺物の出土状況から縄文時代中期末葉と考えられる。

FP-4 (図V-10、図版V-4)

位置 G-26 **規模** (0.4)×-/ (0.8)×-/0.3

特徴 発掘区を通る溝の壁面で検出され、遺構の大半は溝によって削られている。形状は平面が楕円形、断面がフラスコ状を呈すると思われる。覆土は、1：茶褐色土(細かなローム粒含む。土にしまりがある)、3：黒褐色土(Ⅲ層に類似し、ローム粒含む)、4：暗褐色土(大きなローム粒含む。漸移層)である。部分的に2：明茶褐色土(まだら。ローム・ブロックを含む)がみられ、壁の崩落を示すものかもしれない。遺物は出土していない。

時期 形状や周辺の遺物出土状況から縄文時代中期末葉の可能性が高い。

FP-5 (図V-10)

位置 J-27 **規模** (0.9)×-/0.4×-/0.4

特徴 FP-4と同様、溝の壁面で検出された。大半を溝によって削平されているが、底面は残っていた。平面形は小さな円形で、小ピットと言い得るものかもしれない。層位図を記録し忘れたが、メモによれば上位は黒味が強くしまりのある土、下位はやや明るくしまりのない土となっている。底面に薄い焼土跡が認められた。

遺物 覆土からⅢ群 B₃ 類と思われる土器片(3)とフレイク・礫が出土している。

時期 周辺の遺物分布状況から縄文時代中期末～後期のものと思われるが、小ピット様であり、新しい時代のものの可能性もある。

FP-1 (図V-10、図版V-4)

位置 G・H-26・27 **規模** 0.9×-/0.7×-/0.3

特徴 I層除去後のⅥ層面で確認された。平面形は円形である。覆土は1：茶褐色土(わずかに木炭粒やローム粒を含む)と2：褐色土である。上位にはⅢ層に相当すると思われる硬くしまった茶褐色土があるが、町道下位に認められた盛土にも類似している。

遺物 覆土からⅢ群 B₃ 類と思われる土器小片(4)とフレイク・礫が出土している。

時期 断定は出来ないが、周辺の遺物出土状況より縄文時代中期末～後期の可能性が高い。

FP-2 (図V-10、図版V-4)

位置 H・I-26・27 **規模** 1.3×1.0/1.2×0.8/0.3

特徴 Ⅵ層面で検出された。平面形は楕円形である。覆土は1：暗茶褐色土(細かなローム粒含む) 2：暗茶褐色土(ローム・ブロックを含む)である。

遺物 覆土中位からⅢ群 B₃ 類と思われる土器小片が出土している。

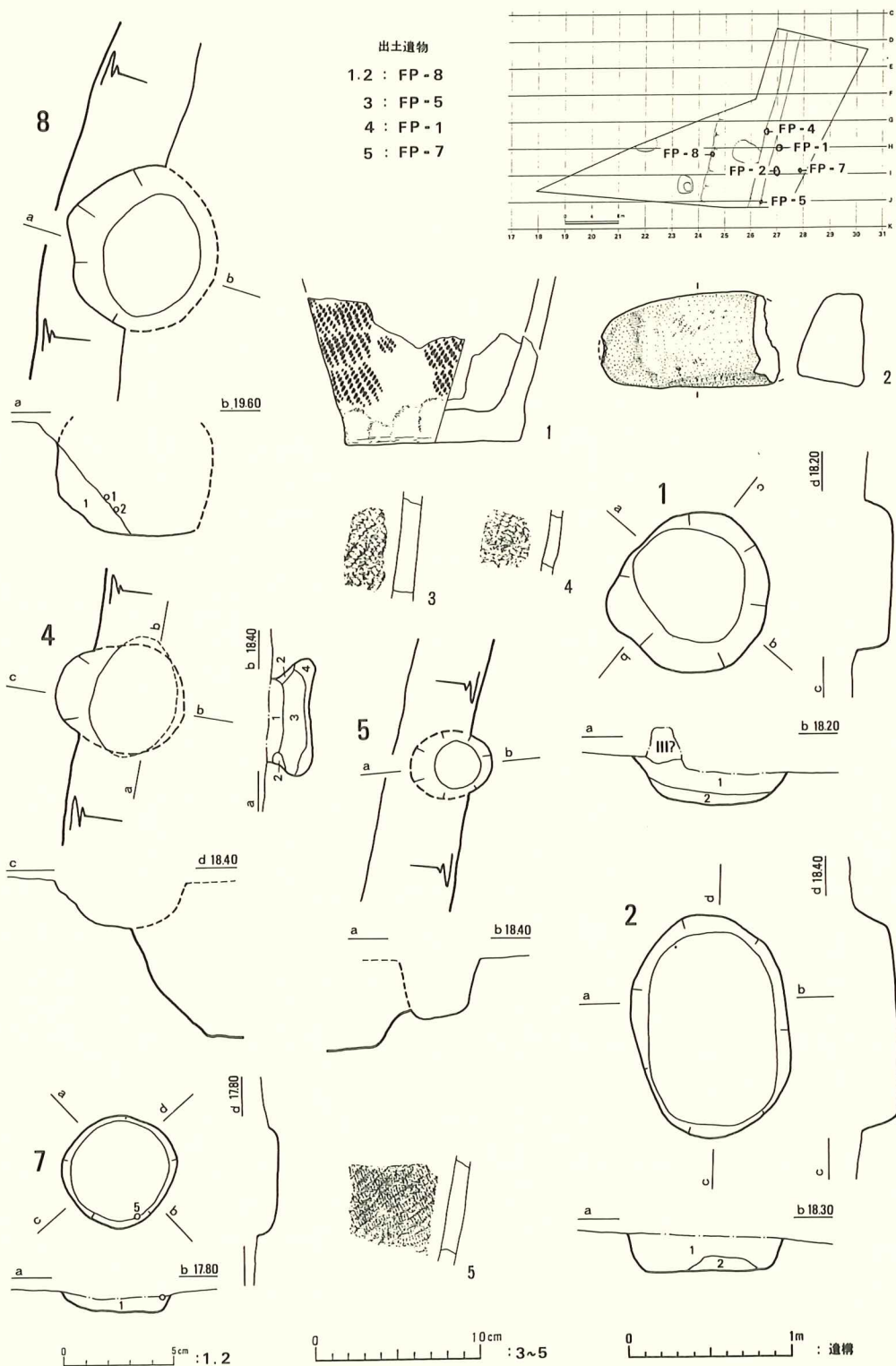
時期 59年度B地区で検出された楕円形プランをもつピットの時期や周辺の遺物出土状況より縄文時代中期末葉と思われる。

FP-7 (図V-10、図版V-4)

位置 H-27 **規模** 0.7×-/0.6×-/0.1

特徴 Ⅵ層上面で検出された。平面形は円形である。覆土は1：暗褐色土(土にしまりがなく、ローム粒含む)で占められている。H-27区はⅢ層が比較的良好に残っているが、Ⅵ層面まで遺構を確認出来なかった。このことから覆土とⅢ層とが類似したものであったと思われる。

遺物 壁ぎわからⅢ群 B₃ 類土器(5)、覆土中からⅡ群 B₂ 類土器片と礫が出土している。



図V-10 FP-1・2・4・5・7・8

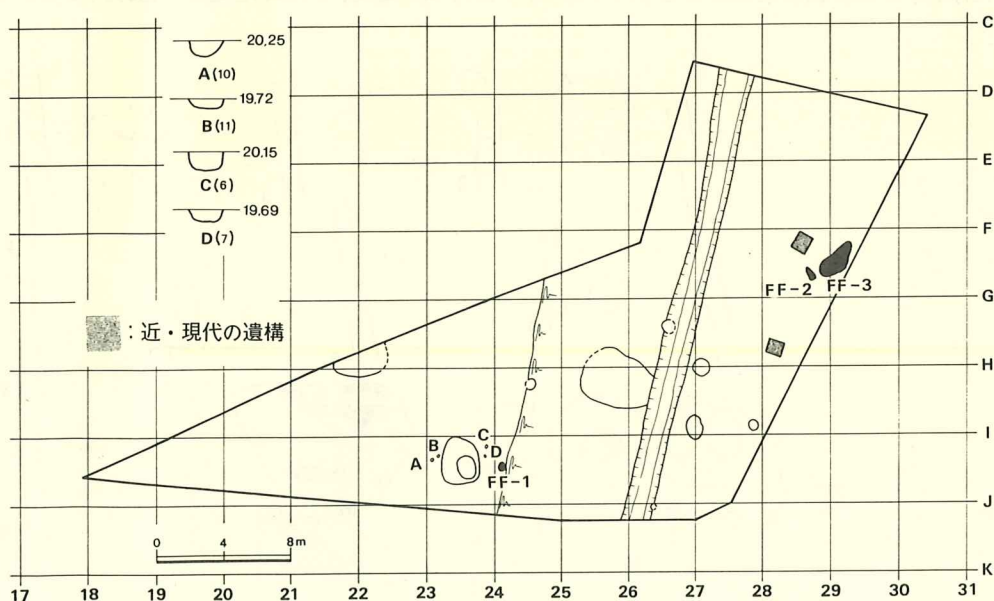
時期 縄文時代中期末葉と考えられる。覆土は概要で述べたⅢ群 B₃ 類期の排土に相当する可能性があり、遺物ではⅢ群 B₃ 類土器が出土している。

(3) その他の遺構 (図V-11、図版V-5)

焼土跡が3カ所、小ピットが4個検出されている。FF-1(厚さ5cm)はⅢ層上面、FF-2(厚さ5cm)はⅢ層中位、FF-3(厚さ18cm)はⅥ層上面で確認されている。FF-3は沢の傾斜に沿って堆積しており、上下のレベル差は18cmを数えるが、水平面では4~6cm程度の厚さと思われる。遺物はFF-1から赤変したⅡ群 B₂ 類土器片が出土しているのみである。確認面からは、FF-1・2が縄文時代中期末葉、FF-3が縄文時代前期のものと思われる。

小ピットは、FP-3周辺に4個見出された。木根や地層の凹凸と思われないものを記録したが、明らかに人為的な遺構とする決め手はない。Bは筒状の断面形を呈し、覆土はしまりのない暗褐色土である。その他のものは椀状の断面形で、覆土はまだらぎみの褐~暗褐色土である。深さはアルファベット横のカッコ内に示した。

この他、Ⅰ層中から掘りこまれた近・現代のものが2個検出されている。F-28区のもの(図版V-5-1)は四辺に木枠の跡が認められ、すでに壊れていたが、桶を思わせる^{たが}箍状のワイヤーと板材が置かれていた。飼葉桶に似ているとの話があり、放牧に関連するものかもしれない。E-28区では、きれいな正方形に掘りこまれた穴から板材やガラスびんの破片、鉄片などが投げ込まれた状態で出土した(図版V-5-2)。何らかの掘りこみをゴミ穴に転用したものと思われる。ガラスびんの中にはミツカン酢、タカラ焼酎と書かれたものがあった。



図V-11 その他の遺構

3. 包含層出土の遺物

(1) 土 器

縄文時代早期から晩期にわたる土器片が約3,000点出土している。比較的出土数の多いⅡ群B₂類、Ⅲ群B₃類、Ⅳ群A₂類は分布図を作成してある(図V-15)。分類別の分布や特徴はそれぞれの記述の中で行う事とする。

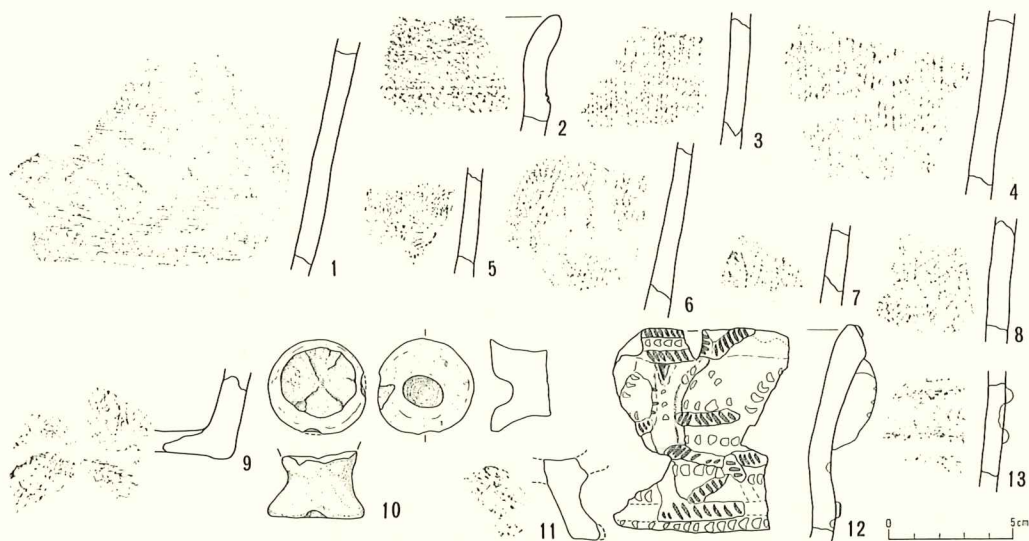
Ⅰ群A類 (図V-12-1)

1点のみ出土している。条痕様の貝殻の押引き文がある。胎土にはわずかに繊維の混入が認められる。59年度A地区(立川・大沼 1986)出土のⅠ群土器(2)と同一個体の可能性がある。

Ⅱ群B₂類 (図V-12-2~11)

口縁部27点、胴部167点、底部21点の破片が得られた。口縁部破片から12~13種の個体があると思われる。口縁部文様では縄線文の施されたものが大半で、1例、縄文のみの認められる小片がある。縄線の原体はLR、またはLと思われるものが多い。胴部文様では撚糸文：平織状撚糸文：縄文が9：6：1の比率である。撚りの不明なものが半数近くあるが、L：38点に対し、R：15点である。撚りの異なる原体を2本1巻にしたものは5点ある。綾絡文のあるものは16点で、すべて結束2種によるものである。分布では他群に比べると調査区の西側先端部分に多い。沢部分にもまとまりがあるが、概要でふれたⅢ群B₃類期の排土に混入していた可能性が高い。

2は縄線文の施された口縁部で、山形を基調にするモチーフである。胴部との区画には結束2種による綾絡文がある。3~6は撚糸文の施されたもので、4は撚りの異なる撚紐を2本1巻にした原体、6は多軸絡条体によるものである。7は付加条縄文、8は縦走縄文と思われるもので



図V-12 包含層出土の土器(1) Ⅱ・Ⅲ群

ある。9には底面にも縄文があり、8と同一個体の可能性がある。10・11は台付土器の器台部分である。11には、表面に化粧土を塗布したと思われる赤褐色の部分がある。

III群A類 (図V-12-12・13)

10点出土している。縄文のみのもの3点を除くと、すべて爪形刺突文がある。刺突には竹管によるもの(12)と縄によるもの(13)とがある。特に分布傾向はつかめない。

III群B₃類 (図V-13・14-14・15・18~70、図版V-8)

本遺跡の主体を占める土器群である。口縁部75点、胴部940点、底部31点が得られ、口縁部破片では最大で51種のものが認められた。文様では、破片から刺突のあるもの・縄線のあるもの・刺突や縄線の加わらない隆帯をもつもの・地文の縄文のみのものの比率をみると、2:1:4:20となる。口縁部破片に限ると2:2:1:3となり、口縁部では縄文以外の文様をもつものが半数以上ある事になろう。沈線文、無文のものはIV群土器との識別が判然とせず、ごく少数である。縄文原体を判別された資料で見ると、LRとRLがほぼ半数ずつを占める。原体の回転方向では縦:横:縦と横のものが、2:1:1の比率で認められる。分布では25ラインから沢部分にかけて濃密である。本類土器は、文様要素やその配列からi(18~29)・ii(30~39)・iii(14・15・40~70)の3つのグループに分けている。土器の変化を考慮したものであるが、iiiにはIV群A₁類段階の資料が混入しているかもしれない。

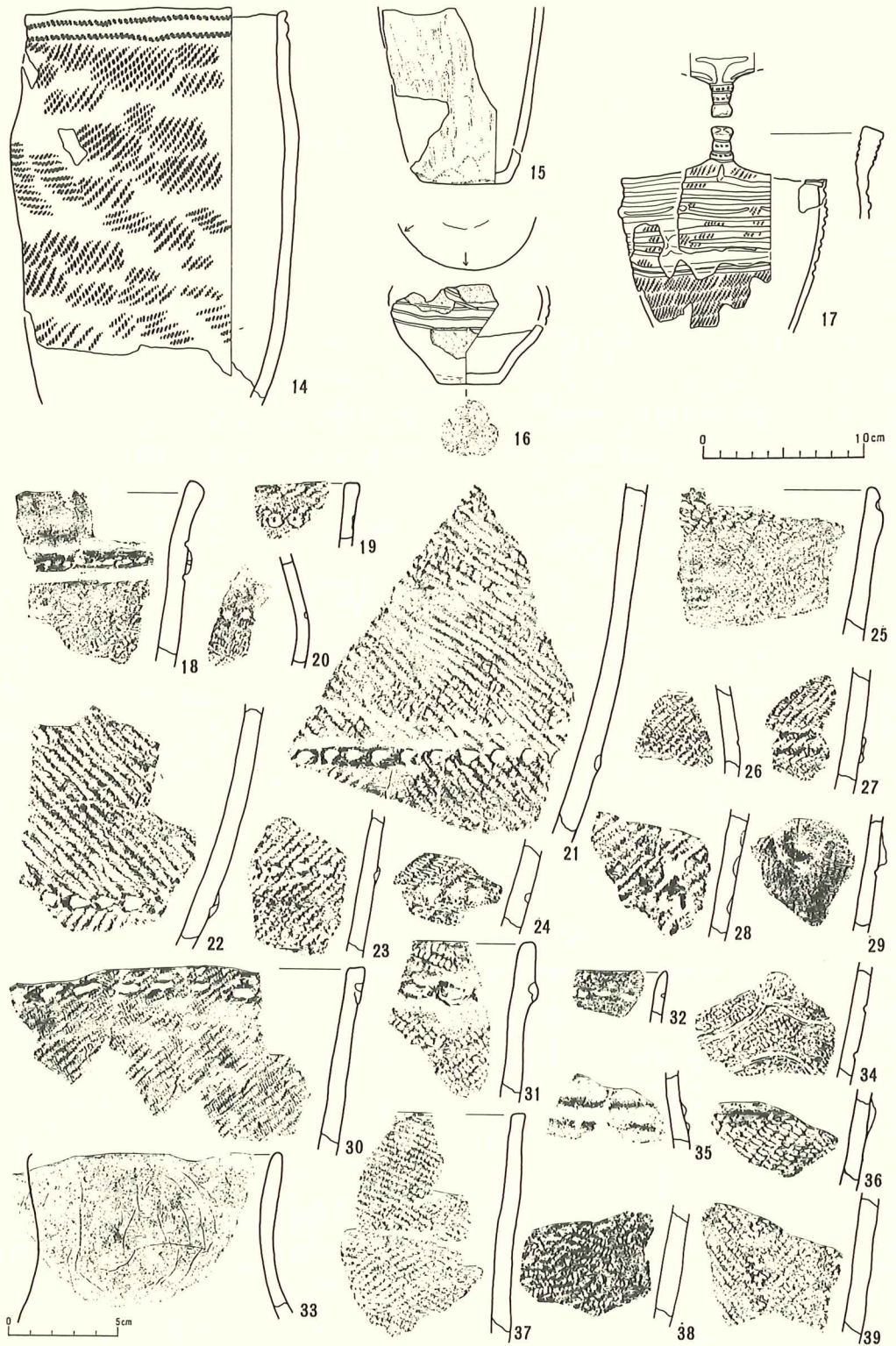
i) 18~24・28は刺突のあるもので、隆帯上に施されたもの(18・21~24)と隆帯をもたないもの(19・20・28)とがある。刺突にもほぼ垂直に突かれたもの(18~20)と斜位に突かれたもの(21~24・28)とがある。18の地文は条にすぎ間があり、付加条に類するものと思われる。20の上部は無文帯になっている。25~27には縄線文が認められる。いずれも2段の原体によるもので、26はLRである。29には波状の沈線の凹部に傾いたC字状の貼付がある。

ii) 30~32の刺突はいずれも斜位から突かれている。34には沈線、35では無文地に2列の隆起線がある。36~39は羽状縄文のもので、36では隆帯中央部を境に条の方向が変えられている。

iii) 40は沈線と刺突文の施されたもので、補修孔も穿たれている。14・41~44には縄線文があり、圧痕の不明瞭な43を除き、すべて2段の原体である。45~48には折りかえし、あるいは貼付による肥厚帯がある。49~58は縄文のみの認められるもので、50は口縁部と胴部とで羽状を呈している。52には条の右傾する浅い縄文がある。54では縄文のつぶれているところや原体の末端を結んだ撚紐と思われる跡がある。56・57は条の間隔が開いており、18と同種の原体か、絡条体によるものであろう。58は無節の縄文である。15・59~61は無文の土器で、15には縦方向の調整痕が残っている。60には幅の広い貼付、61には軽いくびれがある。62~64は充填、あるいは磨消縄文の施されたもので、62には赤色顔料が付着している。65~69は底部で、65には荒い縄文がついている。66・67は、前者の上端に縄文の認められる他は無文で、断面のみを示した。68も無文のものである。70は小型の土器である。

IV群A₁類 (図V-14-16・71~79、図版V-8)

図示された沈線文のものだけを分類している。あるいはIII群B₃類のiiiとしたものやIV群A₂

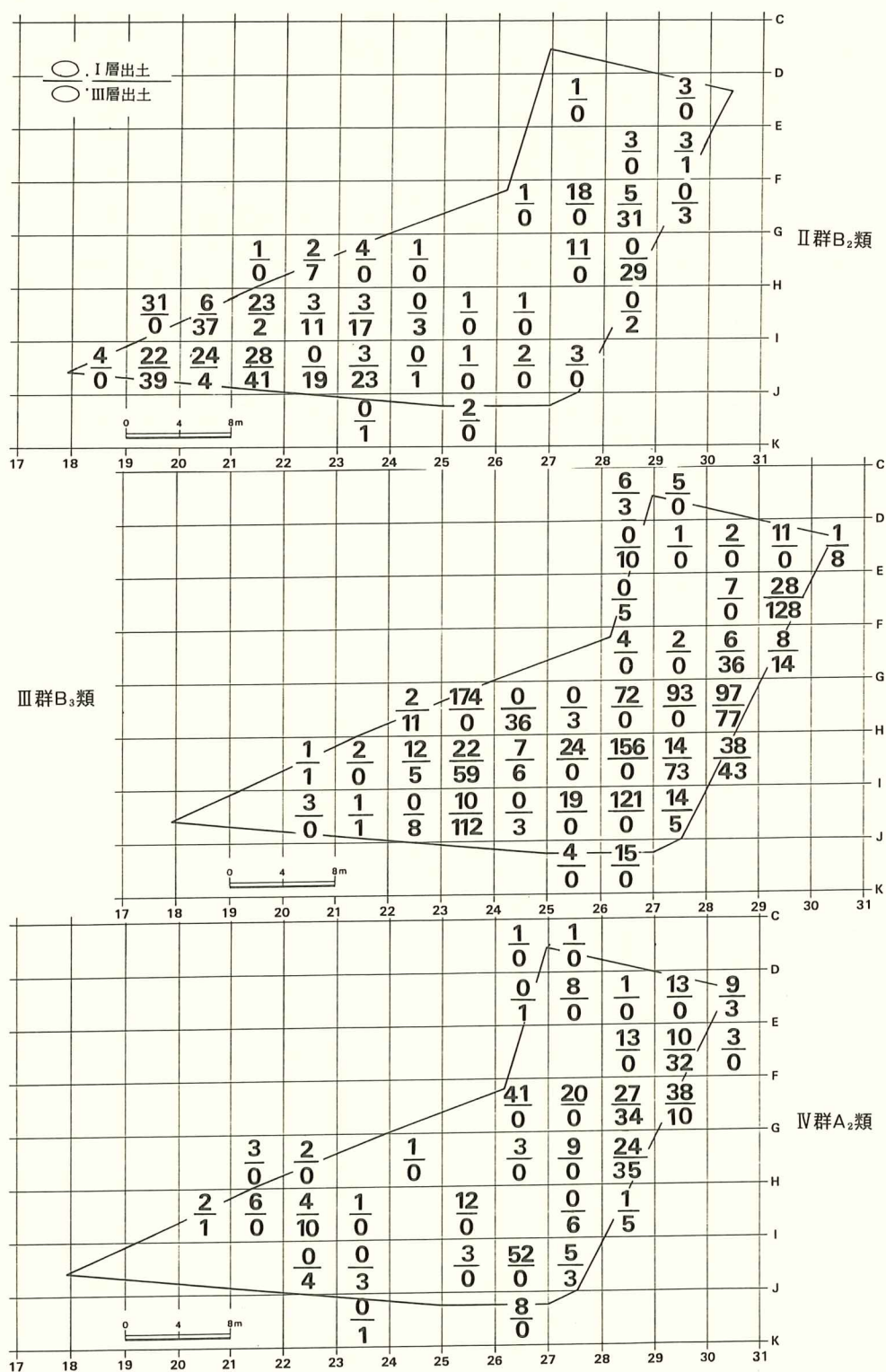


図V-13 包含層出土の土器(2) III~V群



図V-14 包含層出土の土器(3) III・IV群

V 新道4遺跡 F地区の調査



図V-15 土器片出土数

類に含まれるものかもしれないが、ここでは分離する事にした。

16・71～75・78・79が無文地のもの、76・77は縄文の認められるものである。16の内面には内面調整後に貼られたと思われる粘土粒が2カ所(図矢印)に認められ、外面には赤色顔料が塗布されている。71の口唇部には縄による刻みがある。72の刻みが突起部に限られたものであるかどうかは判定できない。73・74は細い平行沈線が走っている。76は中央部が磨消による無文帯になっている。77には無節の縄文がある。78では2本の平行沈線のあいだに弧状の沈線を入れている。79は櫛目状の細沈線の上に斜方向の沈線が加えられている。

IV群A₂類 (図V-14-80～88)

口縁部22点、胴部298点、底部36点が得られ、口縁部破片では最大で17種のものが認められる。文様では沈線文のあるものが約5割、無文のものが約3割ある。残りは少数の縄文の認められる破片と文様が不明瞭で胎土から本類と判断したものである。これらは、他類との混同の可能性があり、本類も沈線文が主体を占めるものと思われる。分布は沢べりの部分に濃密である。

80・81は無文地に沈線、82～84は沈線で括られた部分に擦痕の認められるものである。84には縄文も加えられている。85は刺突風の文様をもつもの、86～88は縄文地に沈線、ないしは磨消縄文のものである。

V群C類土器 (図V-13-17、図版V-8)

図示されたもの以外には、口縁部破片が1点出土している。17は欠損部が多く、文様を推定してはみたが、不確実な状態である。上位から4段目の沈線部分は低く隆起しており、小さな粒状の貼付がある。

(2) 石器

石鏃(1～15)

17点出土している。基部の不明な欠損品2点を除き、すべて有茎のものである。1～4は有茎凹基、5は有茎平基、6～12は有茎凸基、13～14は木葉形を呈するものである。1はかえしの片側がなく、非対象形である。12の先端部は磨耗している。13は側面観が湾曲しており、基部にはアスファルト様の付着物があがる。15は未製品と思われる。断面では2・6・14が薄身、4・10・11は楕円形を呈して厚身である。

ドリル(16～19)

図示した4点が得られている。いずれも剝片の一端に機能部を作り出したものである。特に明瞭な摩耗痕をもつものはない。

ポイントもしくは両面加工のナイフ(23～25)

3点出土している、23は右図左上辺がやや潰れている他は、鋭利な縁辺を残している。24・25は石銚先と言い得るもので、前者はドリルの可能性もある。

つまみ付ナイフ(20～22)

図示した3点のみ出土している。いずれも打瘤付近につまみ部を作り出している。

スクレイパー類 (26～52)

36点出土している。26～28は両面加工のもの、29～33は周辺加工により刃部を作り出したものの、34～50は西股遺跡報文のなかで「ナイフ」として分類されているもの、51・52はサムネイル・スクレイパーに類似したものである。

27は爪で傷がつく程の軟質の頁岩製である。31の左上辺の剥離は欠損後に加えられている。34～50は一辺に礫皮面や風化面を残し、対にある一辺に刃部、もしくは微細な剥離痕をもつものである。縦長剥片を使用したものが多いが、45～48のように横長剥片を素材とするものもある。礫皮面が主剥離面に対して垂直に近いもの(34・37・40・42～45・47・48)とそれほどの角度をもたないもの(35・36・39・41・46・50)とがある。前者は直線的な輪郭を描き、後者は曲線的な輪郭を描くものが多い。

不定形石器類 (53～64)

53～59は縦長剥片、60～64は横長、あるいは下ぶくれの剥片を利用している。54の下端部は明瞭な作り出しによるものではない。

コア (65～67)

後述する接合資料83～85・92を含めた10点が出土している。65は図左面に3～4枚の剥片採取跡がある。66は打面の定まらない残核様のもの、67は上部にある原石面を打面にして比較的幅広の剥片を採取している。

磨製石斧 (68～71)

14点出土している。68は小型のもので表裏に煤状の付着物がある。69では欠損部にも磨き加えられている。71は図右の面にのみ、すり跡が認められる。

すり石 (72～75)

10点出土している。72は敲打による整形で、断面が五角形を呈している。73～75は縁辺に打欠きの施されたもの、75は半円状扁平打製石器と称されているものである。73の擦部は狭い。75下辺右には幅1cm程の擦部が残っているが、左のそれは失われている。

たたき石 (76)

9点出土している。76の両側縁には煤状の付着物がある。

くぼみ石 (77)

1点のみ出土している。長軸両端には打欠きがみられ、たたき石の機能も考えられる。

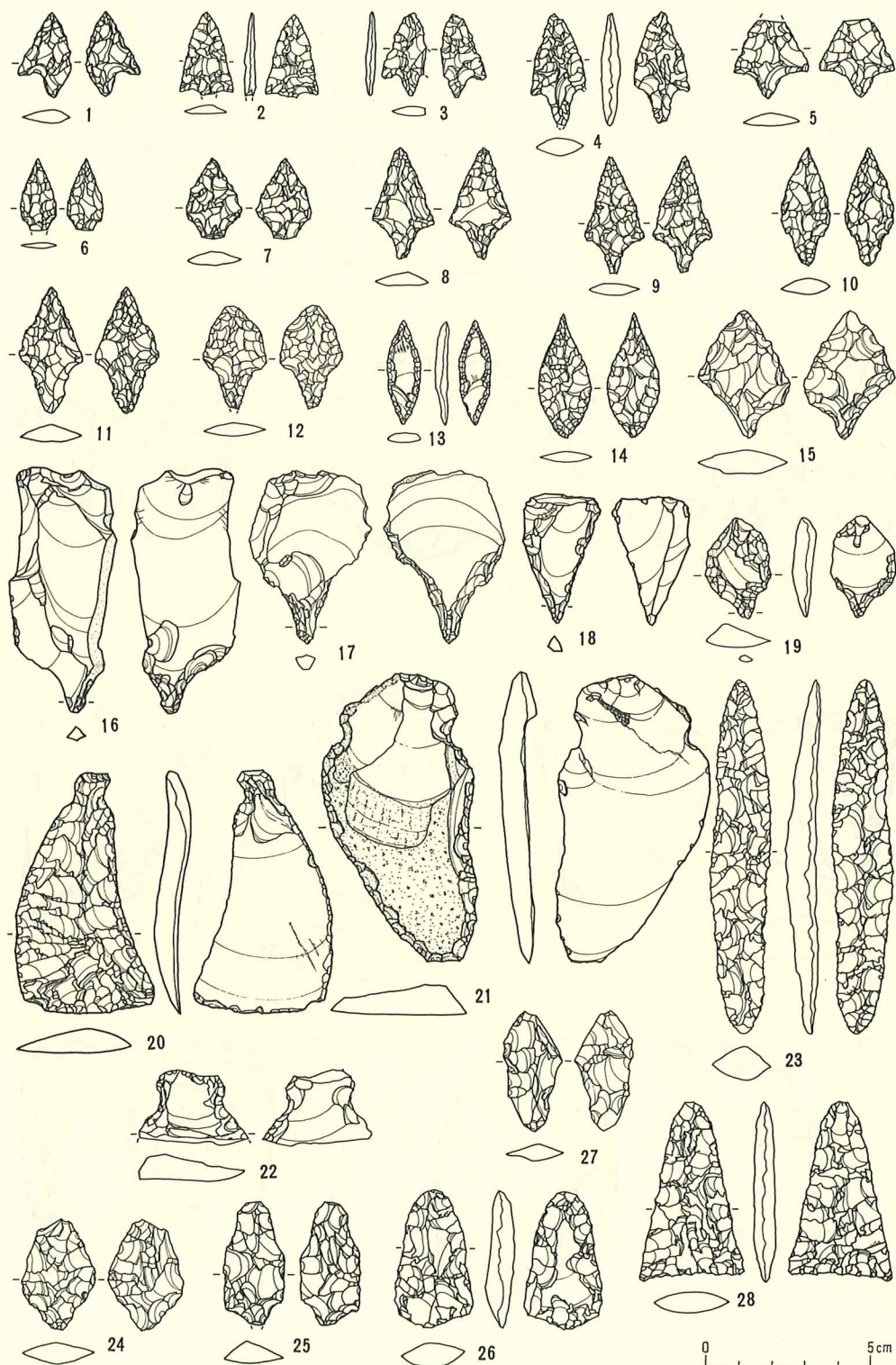
石皿・台石 (79)

4点出土している。79の両面のところどころには煤状の付着物がある。

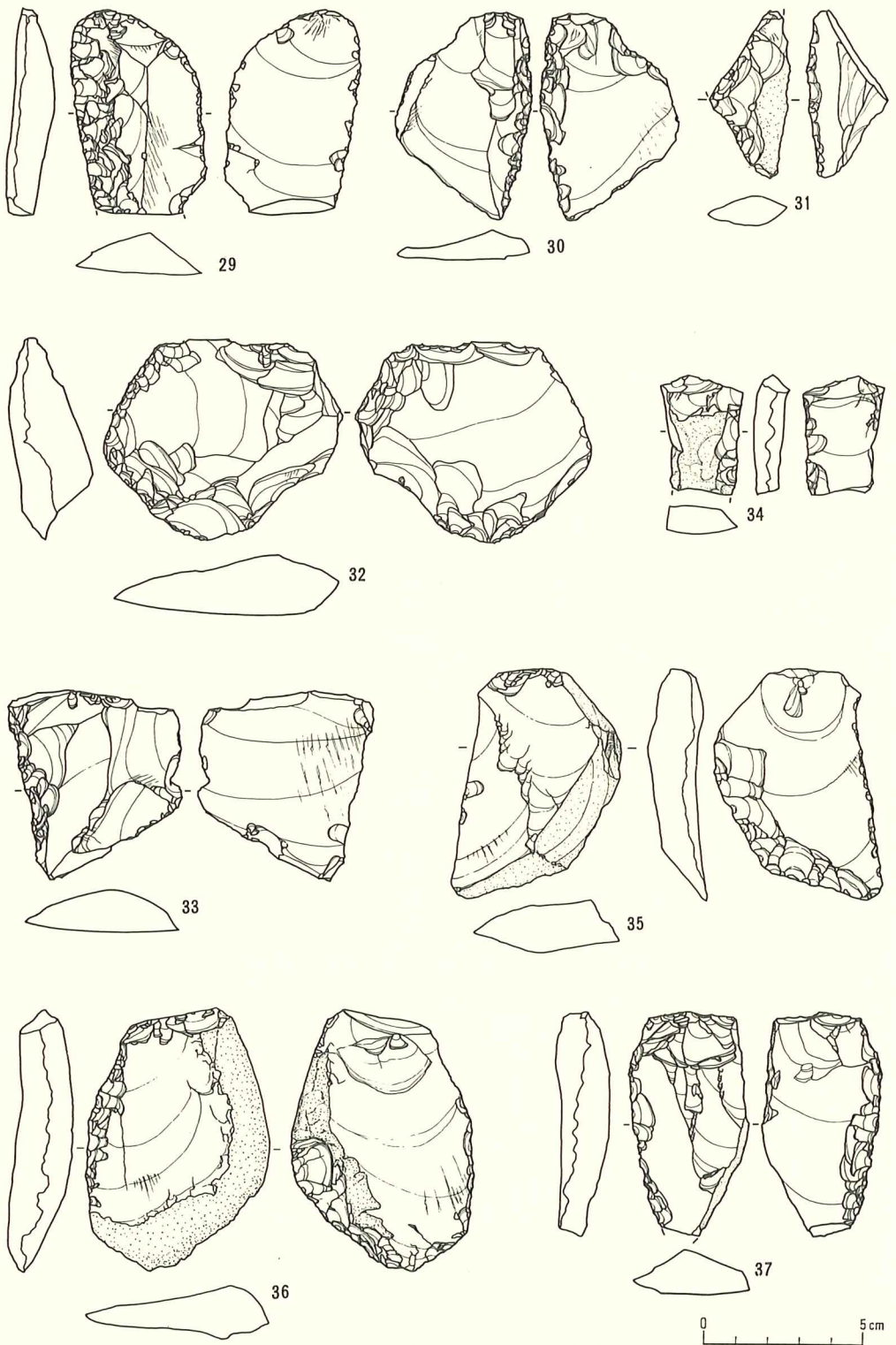
石製品 (78)・未製品 (80)

78は切れこみによりひょうたん形に作られた石製品である。右側のくびれは穿孔跡の可能性もあり、円盤状を呈するものかもしれない。

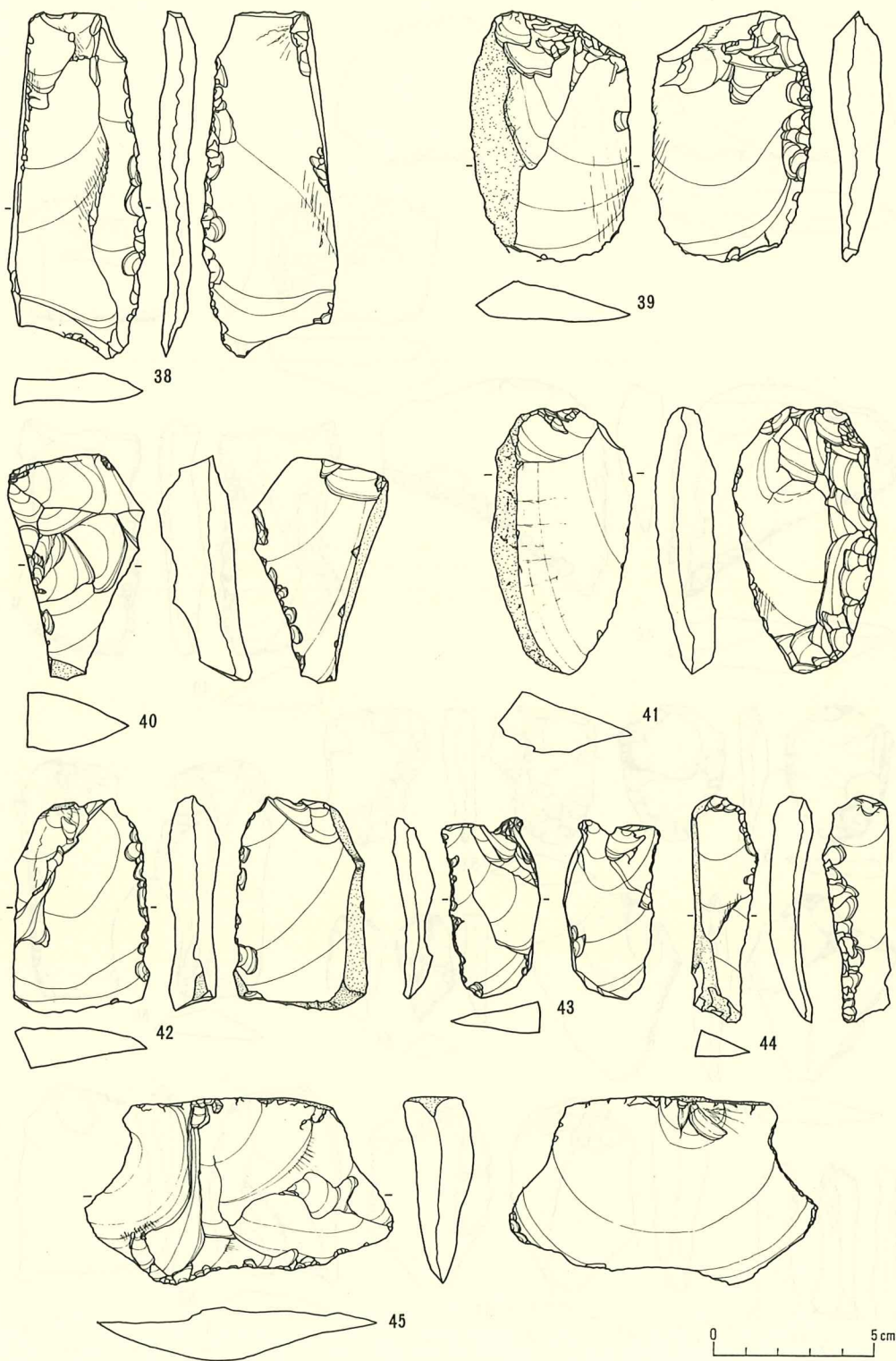
80は下端がぶ厚く残されており、調整中に欠損したもののように思われる。両面のドットをうった部分は赤褐色を呈し、熱を受けている可能性がある。



図V-16 包含層出土の石器(1)



図V-17 包含層出土の石器(2)



図V-18 包含層出土の石器(3)

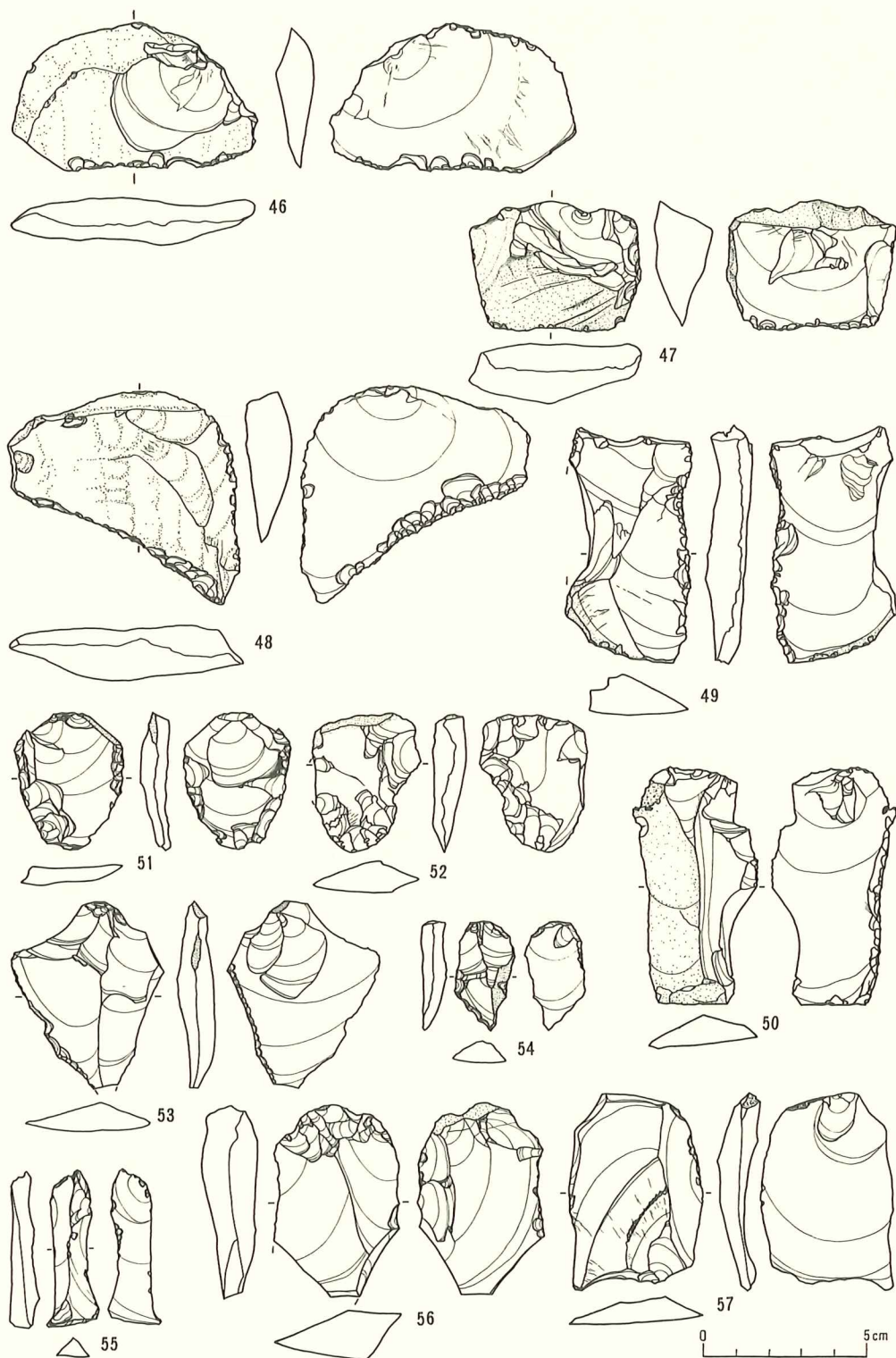
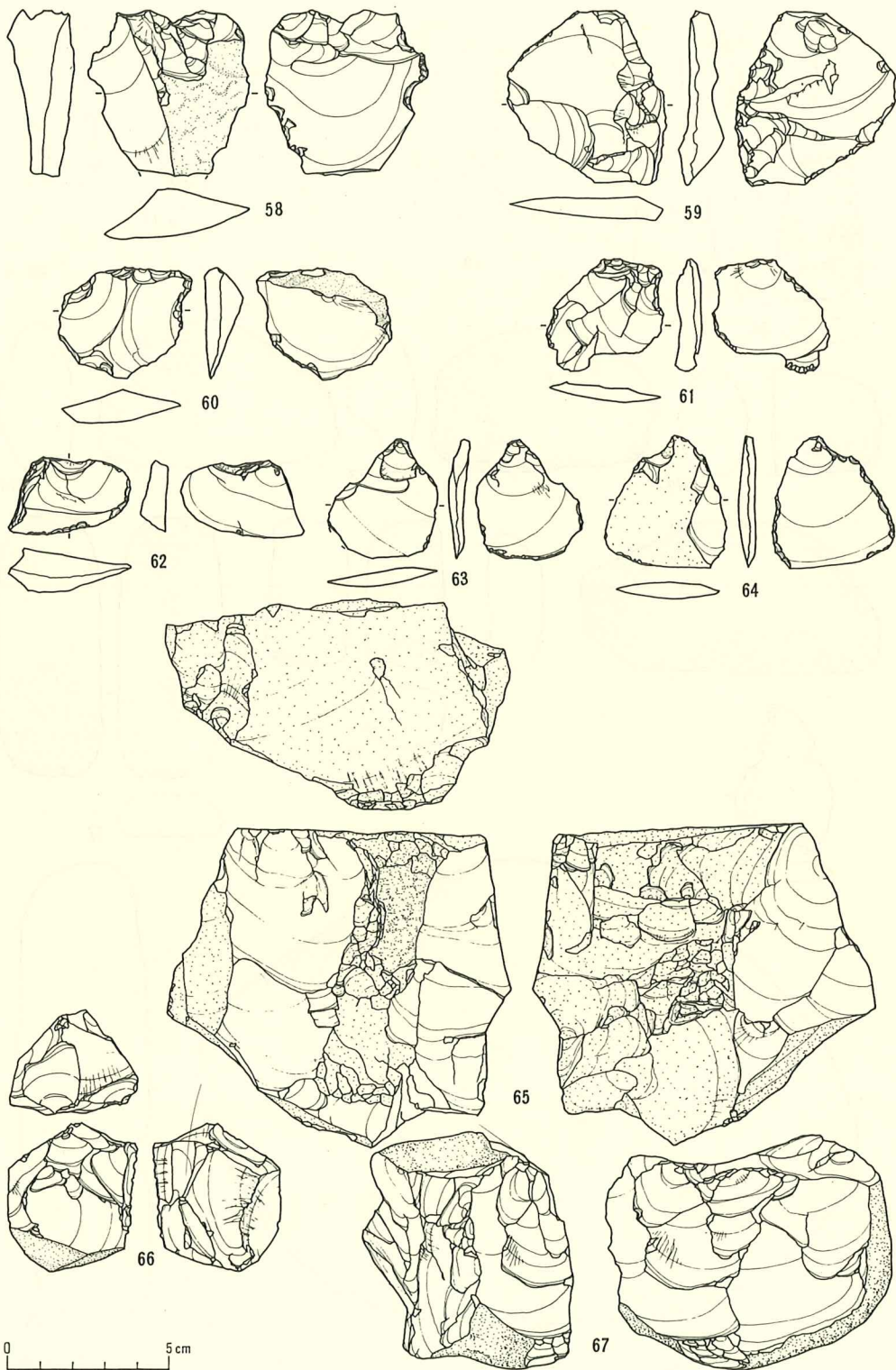
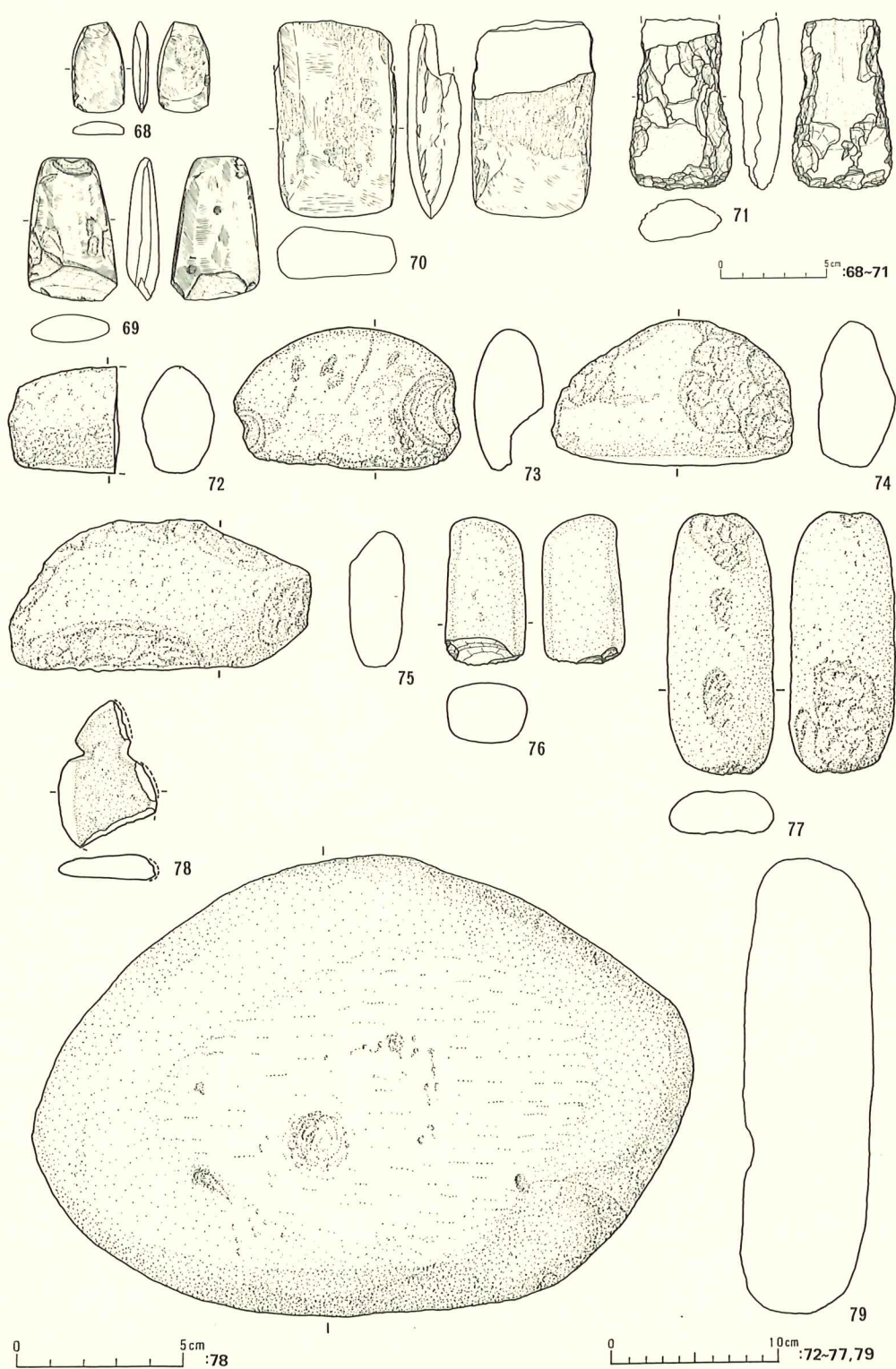


図 V-19 包含層出土の石器 (4)



図V-20 包含層出土の石器(5)



図V-21 包含層出土の石器(6)

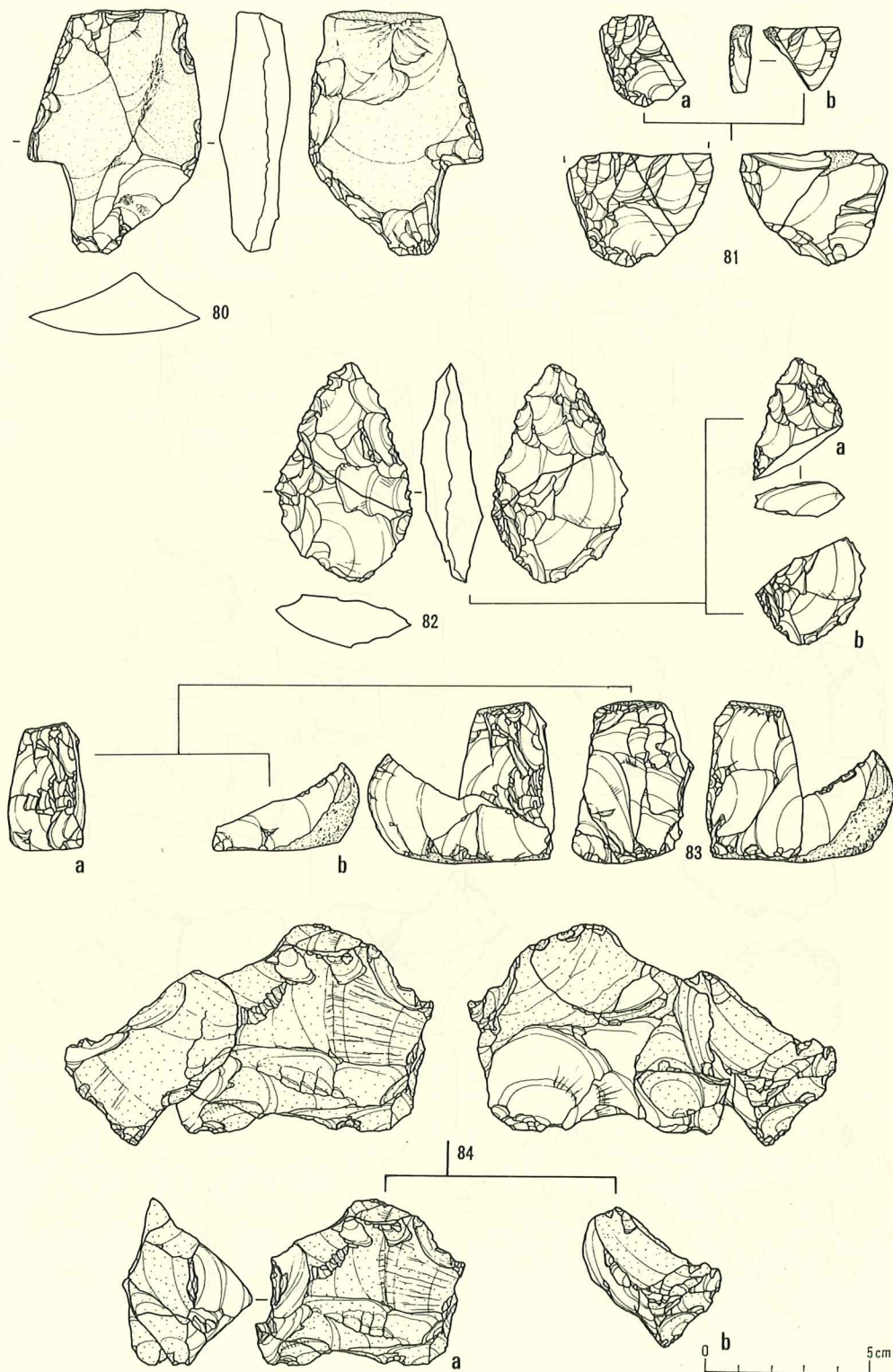
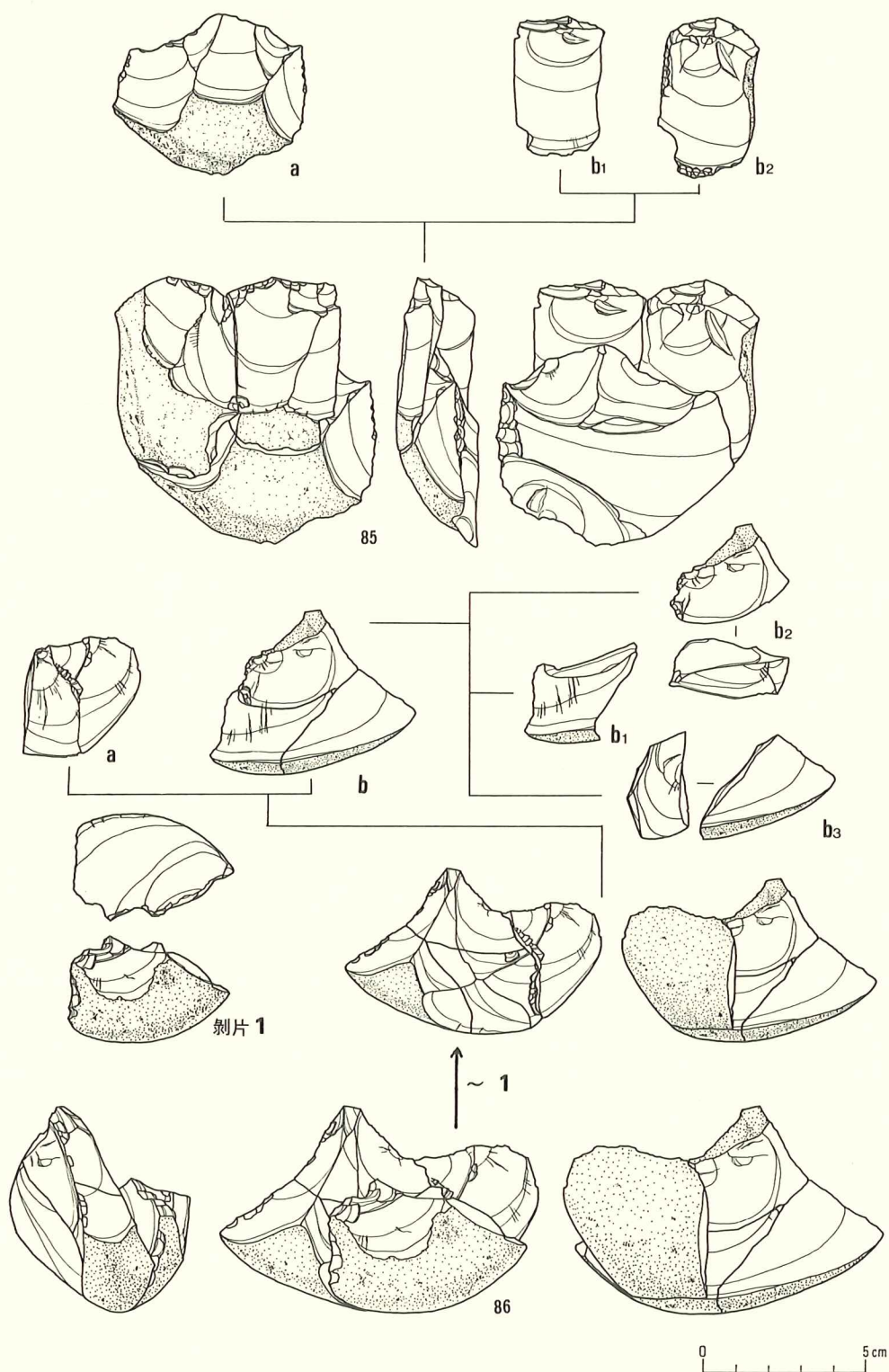
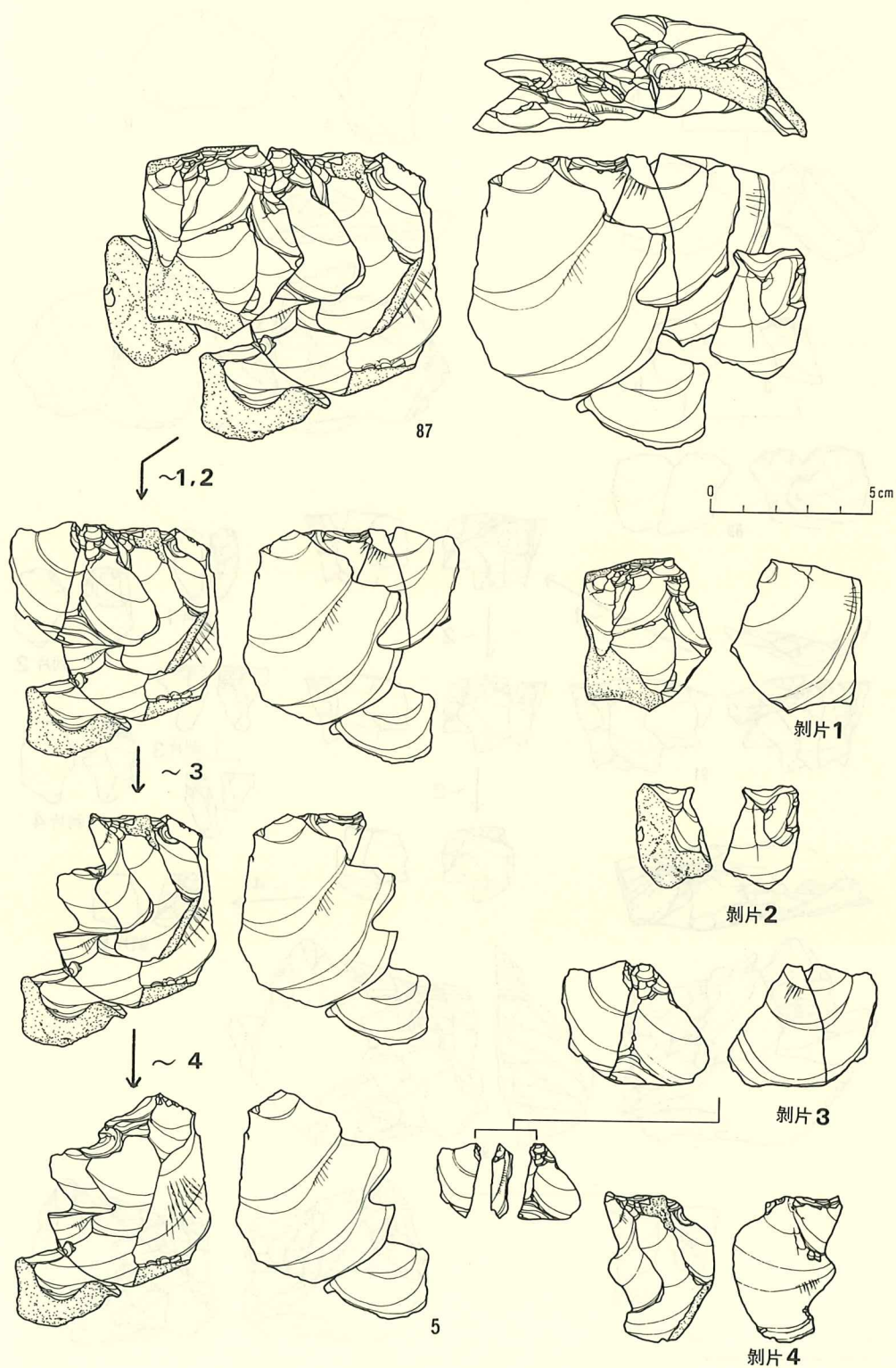


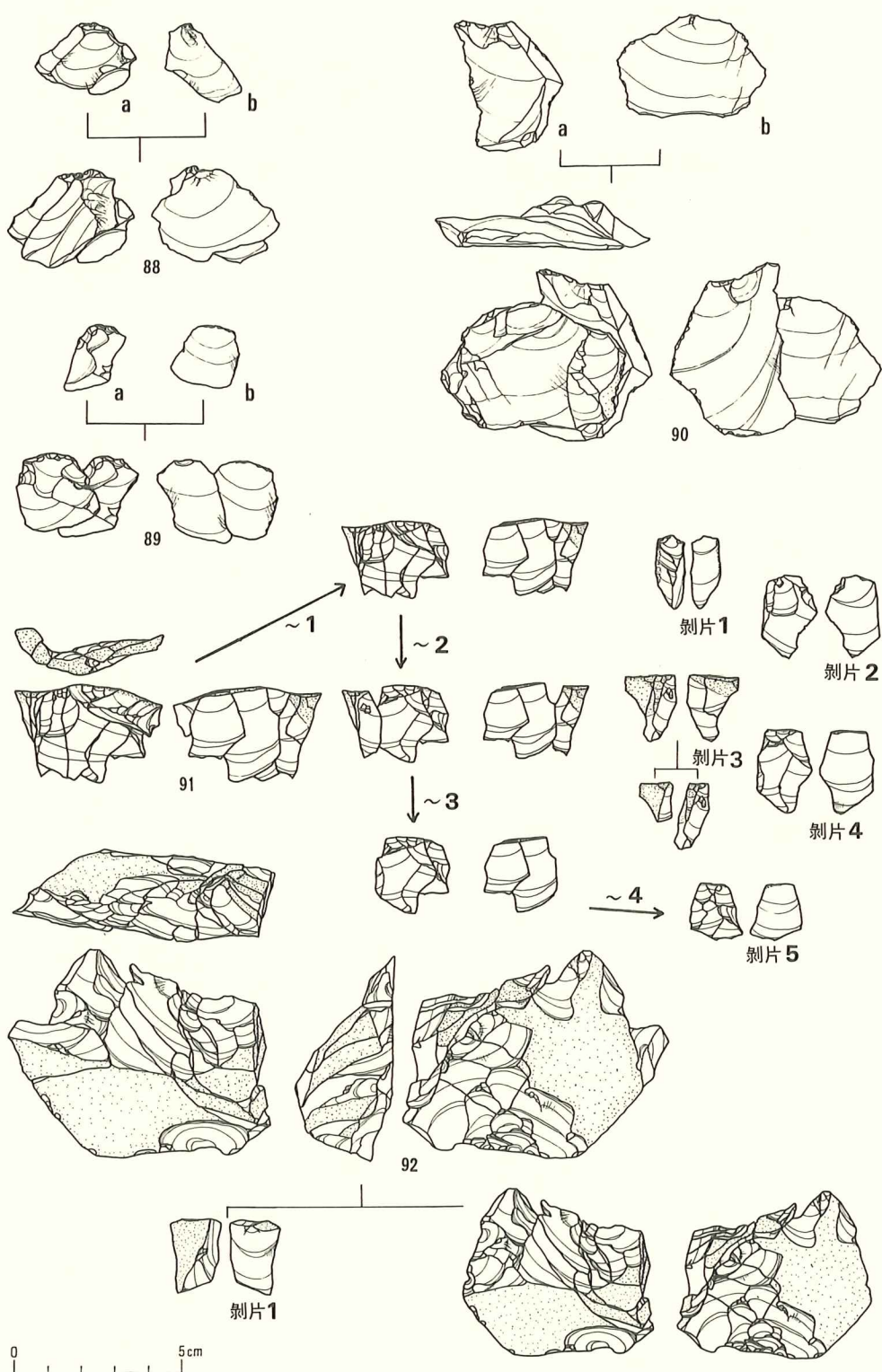
図 V-22 包含層出土の石器 (7) 接合資料(1)



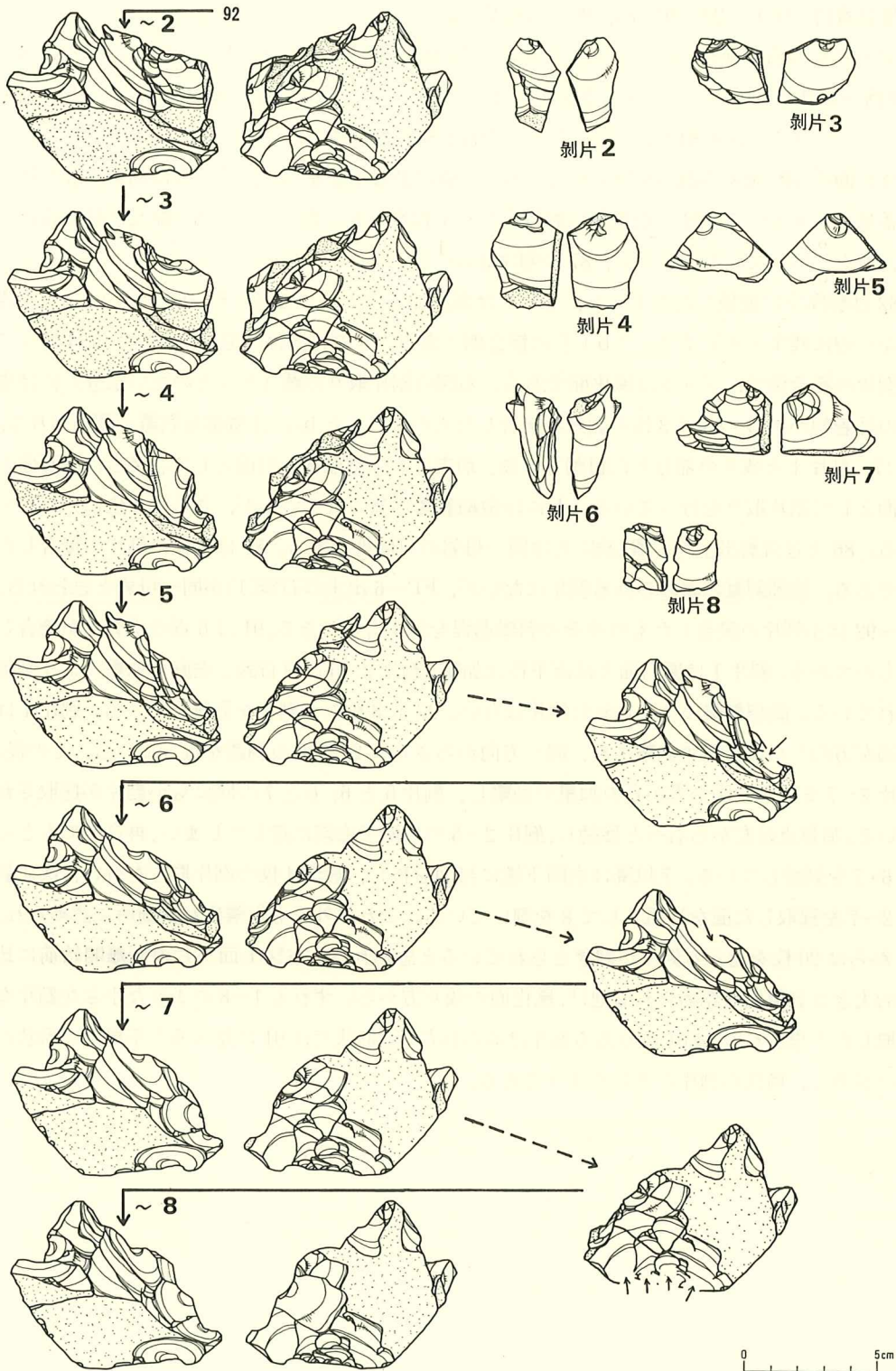
図V-23 包含層出土の石器(8) 接合資料(2)



図V-24 包含層出土の石器 (9) 接合資料(3)



図V-25 包含層出土の石器 (10) 接合資料(4)



図V-26 包含層出土の石器 (11) 接合資料(5)

接合資料（図 V-22～26-81～92、図版 V-8）

37 点の接合資料が得られている。これらの中には破損・欠損したと考えられるもの（81・82）や粗割・礫皮取りを行っていると思われるもの（86）、剥片取り過程の窺われるもの（87・91・92）などがある。図を細線でつないだものが接合資料を分割したものであり、接合によって隠された面や折断面・破損面を図示している。太線は剥離工程を示し、その際に剥離された剥片の番号を入れている。92 の点線部は剥離痕から工程をたどったものである。縮尺は接合資料が $\frac{1}{2}$ 、他を $\frac{2}{5}$ にしている。ただし、87 の剥片 3 は $\frac{1}{4}$ である。

82 は製作中に破損したポイント、もしくは両面加工のナイフであろう。83 はコア（a）と礫面を一辺に残すスクレイパー（b）との接合例である。a の打面は一定していない。84 はコアと剥片の接合例で、ドットは風化面である。右図の剥片取りの跡（ドットのない部分）には褐色の付着物がある。85 は 3 枚の剥片が接合したもので、a と b₂ には微細な剥離が認められる。86 は、剥片 1 と残りの部分とに粗割した後、前者はその剥離面を打面として、後者は原石面を打面として剥片取りを行っている。b には微細剥離が施されているが、さらに 3 枚に分かれている。86 と包含層出土の石器（58）とは同一母岩の可能性がある。87 は 7 枚の剥片の接合した例である。微細剥離の認められる剥片はないが、FP-6 出土の石器（1）が同一母岩と思われる。88～92 は小剥片の接合したものやその剥離過程を示すものである。91 は 6 点の小剥片が接合したものである。剥片 1 は原石面とほぼ平行な加撃、剥片 2～5 は原石面と垂直な加撃により剥離されている。微細剥離の加えられた剥片はない。92 も 8 枚の小剥片を剥離している。剥片 1 は左図左方向からの打撃で剥離され、同一方向からさらに 2～3 度の剥離を行っている。その後、剥片 2～7 までを左図上方からの加撃で剥離し、剥片 5 と 6、6 と 7 の間にも小剥片が採取されている。加撃点は左から右へと移動し、剥片 2～5 の段階で右端に達してしまい、再び左にもどって 6・7 を剥離している。7 以降は右図下端に打面を移し、最低 4 枚の剥片取りを行い、次に剥片 2～7 を採取した面を打面として 8 を剥いでいる。これ以外にも剥離痕が数箇所認められ、92 からは 20 枚を超える剥片が剥ぎとられていると思われる。左図上面からの剥離開始前に比較的大きな剥離痕の認められる他は、風化面の残り方からいずれも 1～8 のような小さな剥片を採取したと思われる。加工痕のある剥片はみられない。形状では 91 に比べると不規則な形状のものが多く、横長の剥片がまじるようである。

4. ま と め

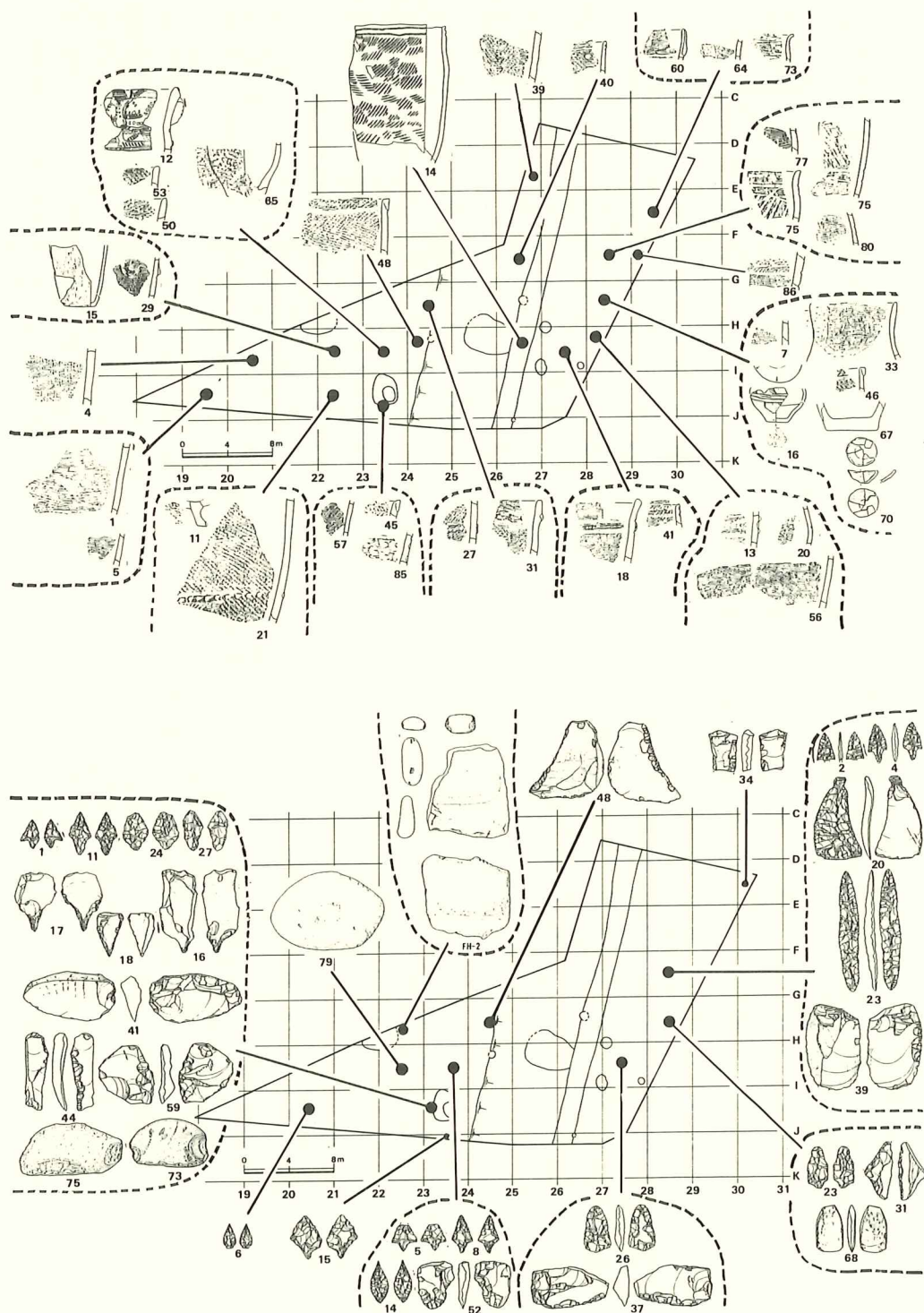
本地区の全体的な内容は概要に述べたとうりであり、ここではいくつかの項目について補足的な説明を行いたい。

1) 排土層の時期

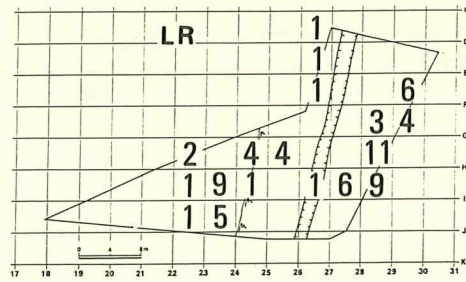
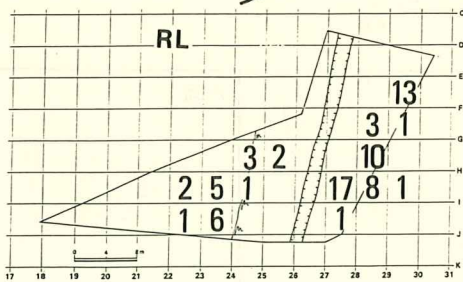
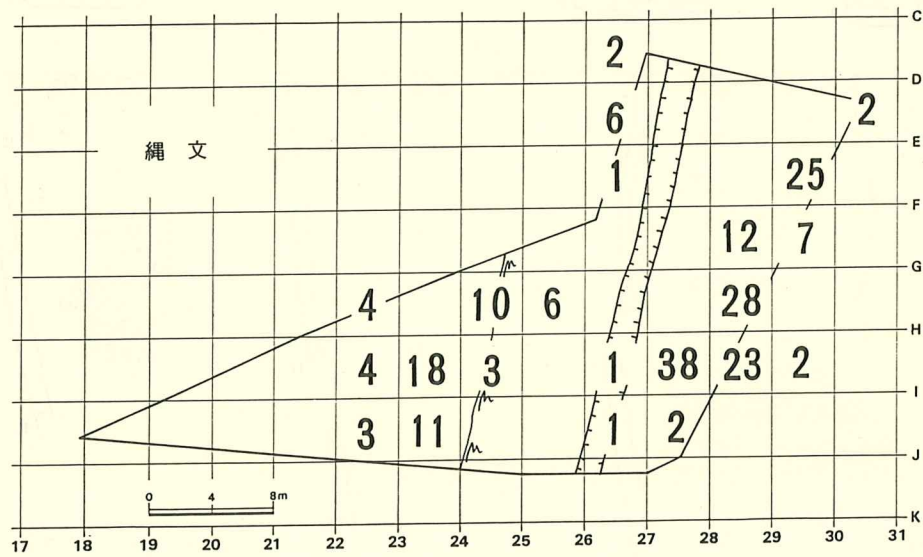
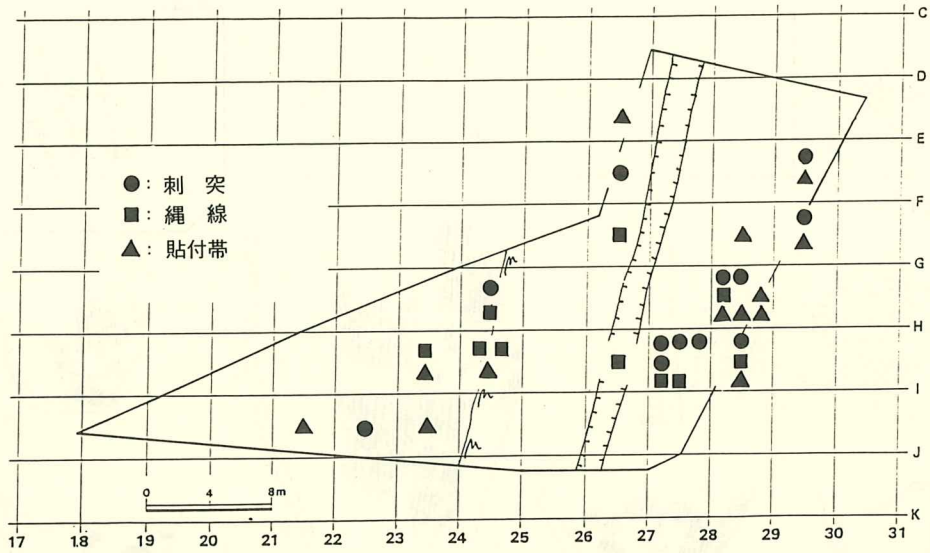
図V-27は報告した土器・石器の中から、III層出土のそれを抜きだしたものである。土器の出土状況では、沢部分(E~G-28区周辺)に堆積していた排土層に係わるものとして、次のような取り上げ時の記録がある。H-28区の18・42はIII層黒、H-29区の62は同じくIII層黒の最上位、I層の可能性もある面から出土している。G-28区の33はIII層下位で出土し、16・69はポイントを落として取りあげている。16はII層下7cmで、層位図にあてはめるとIII層黒の中~下位に位置する。69はI・II層直下である。F-28区の64・77・81はすべてIII層黒であがっている。他のものはただIII層とのみ書かれている。また、整理時に明確にIV群A₂類と思われる資料を調べたところでは、Gライン南側の沢部分からは出土していなかった。こうしたことから、沢部分の排土層は、IV群A₂類期以前に堆積していた事がほぼ確実であり、本遺跡ではIV群A₁類の実態が不明瞭な事もあって、III群B₃類期と判断した。

2) III群B₃類土器について

図V-28はIII層に限った文様要素別の破片出土数である。刺突・縄線としたものは、隆帯の有無を別にしてその文様の認められるもの、貼付としたものはバンド状の貼付のみが認められるものである。ただし、地文の縄文は考えていない。分布状況から時間差の窺えるものかどうかを判断する目的であったが、示されたとおり、特に片寄った分布はみられない。資料数が少なく、調査範囲も限定されているうらみはあるが、これらの文様要素が混在する一時期のものであるか、時間差を示すにしても連続的な変化の中で捉えられる可能性があるかのように思われる。下図は縄文の認められる破片から、原体の撚りの分布差をみたものであるが、違いは見出せない。図V-29は、本群土器が比較的まとまって出土したFH-1覆土の遺物を取りあげ記録に従って並べたものである。FH-1覆土中、Aは最も上位に位置する焼土から得られた土器である。調査時は覆土3上位に認められる焼土と同じものと考えていた。径20cm程度の範囲でH-26区の杭そばに位置している。確認レベルは18・611mで、覆土3上面の焼土が東側に傾斜している事を考えるとIb層の上位に存在していたものかもしれない。土器は熱を受けたと思われる小片で、無文地に描かれた太い沈線や胎土からIV群A₂類の可能性はある。この種の土器はこれ1点しか出土していない。他に特徴の異なる土器には覆土2出土の7があり、明るい赤褐色を呈する事から熱による変化の考えられるものである。14・15・18にもその疑いがあり、これらはFH-1出土のIII群土器の中では羽状縄文、隆帯上の刺突など古い様相の窺われるものである。17も覆土2の焼土中から出土したものであるが、これには大きな熱変はみられない。13は覆土3にしているが、覆土1出土のものと接合しており、レベル的にも覆土3の上面である。覆土1は最も多くの遺物が得られた層であり、Aの出土を重視すれば床面出土のIII群



図V-27 Ⅲ層出土遺物の分布



図V-28 文様別 III群土器の分布



図V-29 FH-1出土の土器

B₃類土器からIV群 A₂類期までの遺物を含む層となるが、削平の度合や包含層の出土遺物を考えると、包含されていた遺物にはかなりのまとまりが窺えるものと考えられる。

やや細かく出土状況に触れてきた。これは、まとまりのある遺物での比較・検討を行う以外に、すでに指摘されているこの段階の土器の系統の相違（大島・瀬川 1982）やそれに基づく地方差（建川2参照）を把みきれないように思われるからである。この点で遺構内の層位ごとの文様出現頻度を明らかにした木直C遺跡（小笠原・松岡 1981）の調査や住居址出土の遺物をもとに分類を行った弥栄平（1）遺跡（三浦他 1986）の報告は評価される。FH-1出土遺物は木直CにおけるノダップII式後半の段階、弥栄平1における中期II群の段階に相当させられるであろう。

包含層出土の遺物では、iとしたグループには木直C報文で古い様相とされる刺突文が認められる。また、胴部への施文は、E地区出土の余市式の貼付帯が口縁部に限られてくる事からも古い様相をもつと考えられる。ただし、沈線文のものにはあてはまらない。25の土器は、榎林式に認められる口唇部沈線との類似や大きな流れとして口唇に文様を施すクセの減少する事から、古いものと判断した。iiには、これも主にE地区出土のIV群 A₁類土器との比較から、確実に減少していくと思われる刺突文や羽状縄文をもつものをあてている。33・35の壺形を呈する土器は、幅の広い無文帯や大島氏によって大木10系類似の土器の特徴とされる断面三角形の隆起線をもっている。FP-3出土の土器よりも次段階につながる要素が薄いと判断してここに含めた。34はFH-1出土の2と類似する沈線文であるが、縄文が斜行しており、この種の土器としては後出する要素をもつかもしれない。

最後にIV群 A₁類とした沈線文の土器について触れておきたい。道南のIII群 B₃類土器には量の多少を別とすれば、沈線文をもつ土器が伴なうものと思われるが、ノダップII式から余市式への変化に重点がおかれ、それに伴出する沈線文の実態は判然としない。また、後期的沈線とされるものもその内容は不明瞭である。こうした事からこの種の資料を判断しかねて、IV群 A₁類にまとめた訳である。分布からいけば、III群 B₃類より新しいものの可能性が高いが、資料の増加をまちたい。

3) 石器について

石器では、I-23区から出土したものの多い事が注目される。同区では縄文時代中期末葉のFP-3が検出されている。その覆土中には、焼土やIII群 B₃類の壺形土器をのせる面があり、これらの石器はこの面に連続するところか、それより上で検出されたと考えられる。同区では85のような、60年度B地区（盛土地区）出土の2類に相当する資料も出土している。しかし、III層からの出土はこれ1点のみである事、周辺のIII層にもこの段階の土器は見あたらない事等から、これらの石器はIII群 B₃類期の土器に件うものと考えたい。G-22区出土の礫石器類は、FH-2に含めて報告したように、FH-2と同期か、それに近い時期と思われる。沢部分で出土している石器は23がII層直下のIII層黒、2・22・24・35・68はIII層下位の排土層から出土したと思われる。その他、フレイク出土の多いところとして、FH-1覆土(198点)、E-29(178点)、

H-23 (98点)、G-23 (95点)、I-23 (69点) 区が挙げられる。フレイクを出土した1区の平均値は22点である。

接合資料もフレイク出土数の多い区から出土するものが目立つ。87・92がI-23区III層、86はFH-1覆土から出土している。前者は先述したI-23区出土の石器、後者はFH-1覆土出土の土器に伴出するものと思われ、III群B₃類期のものであろう。92は最も母岩段階からの形状を残しているものである。打面は一定しないが、一枚のみの剥離しか認められないところと剥片2~7を含む10枚近い剥片を採取しているところとがある。これは打面と加撃される面との角度や厚みと関連するようと思われる、92の剥片2~7を剥いだ面は打面との角度が徐々に急になり、かつ薄い状態になってきている。1~2枚の剥離しか行われなところはこれと似た状態を呈している。また、この種の剥離面はその後、打面として使われる事が多く、あるいは剥片取りよりも打面調整の意図が強いのかかもしれない。92の左図下端の剥離は工程図の剥片採取後の打面となっている。また、剥片2~7のみを接合すると91のような形になる。88~91は剥片だけが残され、コアとなりうる部分は出土していない。住居址内からの出土ではないが、「剥片貯蔵」(三浦 1978、鈴木他 1980、三浦 1983)とされるものに類似したあり方かもしれない。時期的にも縄文時代中期末葉に認められるようであり、91・92で採取された剥片の形状も名高根遺跡(三浦 1983)にみられる剥片貯蔵のものに類似している。

器種の中で目立つのは西股遺跡で報告されているナイフに類似するもので、時期的にも近いものと考えられる。これらの石器の特徴としては、刃部あるいは微細剥離痕の認められる側縁と対になる一辺に礫皮面を残している事が挙げられる。この特徴は、そのまま斜里町内藤遺跡(金盛・村田他 1981)で報告されている安山岩製のナイフにあてはまる。安山岩製のものは縄文時代晩期であり、時期的に異なる事、本遺跡のものに較べると大形のものが多し事などの違いはあるが、構造上からは共通する要素が強いと思われる。この種の石器の用途や時期的な消長など、今後も検討を加えたい。

(葛西智義)

引用文献

- 大島 直行・瀬川 拓郎：『札幌台地の縄文時代集落址』 登別市教育委員会(1982)
 大沼 忠春・遠藤 香澄・立川 トマス他：『建川1・新道4遺跡』 ㊦北海道埋蔵文化財センター(1986)
 大沼 忠春：「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66-4(1981)
 小笠原 忠久・松岡 達郎：『木直C遺跡』 南茅部町教育委員会(1981)
 鬼柳 彰・西田 茂他：『千歳5遺跡』 ㊦北海道埋蔵文化財センター(1985)
 金盛 典夫・村田 良介他：「内藤遺跡」『斜里町文化財調査報告Ⅰ』 斜里町教育委員会(1981)
 菅原 弘太郎・鈴木 優子：「高畑遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』 岩手県教育委員会(1980)
 高橋 信雄：「Ⅳ 地形・地質」『松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)』 ㊦岩手県埋蔵文化財センター(1979)
 高橋 文夫・佐藤 勝：『松尾村長者屋敷(Ⅱ)』 ㊦岩手県埋蔵文化財センター(1981)
 高橋 文夫・三浦 謙一他：『都南村湯沢遺跡-遺構編-』 ㊦岩手県埋蔵文化財センター(1978)
 松下 亘・森田 知忠他：『西股』 北海道第四紀研究会(1974)
 三浦 圭介他：『弥栄平(Ⅰ)遺跡』 青森県教育委員会(1986)
 三浦 謙一：『名高根遺跡発掘調査報告書』 ㊦岩手県埋蔵文化財センター(1983)

5. 遺物一覧表

表V-1の数字は発掘時の出土点数であり、接合終了時の点数をもとにした本文中の数字とは異なるものがある。表V-2の() 付は床面出土、() なしは覆土出土のものである。

1. 遺物一覧表

表V-1

名 称	数 量	名 称	数 量	名 称	数 量
I 群 A 類土器	1	ド リ ル	4	台 石	2
II 群 B 類土器	448	ポイント・ナイフ	4	石 錘	1
III 群 A 類土器	12	つまみ付ナイフ	3	フ レ イ ク	1,168
III 群 B ₃ 類土器	2,005	スクレイパー	36	U フ レ イ ク	42
IV 群 A ₁ 類土器	10	石 斧	16	R フ レ イ ク	20
IV 群 A ₂ 類土器	409	た た き 石	12	コ ア	10
V 群 土器	79	す り 石	12	礫 [△]	120
不 明, 小 破 片	18	く ぼ み 石	3	礫	1,012
土 器 計	2,982	砥 石	6	石 器 計	2,491
石 鉄	17	石 皿	4	総 計	5,473

2. 遺構出土遺物一覧表

表V-2-(1)

遺構番号	名 称	数 量	遺構番号	名 称	数 量	遺構番号	名 称	数 量
全 遺 構	II 群 B 類土器	16	全 遺 構	礫 [△]	16	FH-1	礫 [△]	8
	III 群 B ₃ 類土器	414		礫	88		礫	74(4)
	IV 群 A ₂ 類土器	1		石器計	361		石器計	302
	不 明・小破片	9	FH-1	II 群 B 類土器	7	FH-2	II 群 B 類土器	5
	土器計	440		III 群 B ₃ 類土器	352(11)		III 群 B ₃ 類土器	21
	ポイント・ナイフ	1		IV 群 A ₂ 類土器	1		土器計	26
	スクレイパー	3		不 明・小破片	6		た た き 石	(1)
	石 斧	2		土器計	377		砥 石	(1)
	た た き 石	3		スクレイパー	3		台 石	(1)
	す り 石	2		石 斧	2		フ レ イ ク	11(1)
	く ぼ み 石	2		た た き 石	2		U フ レ イ ク	1
	砥 石	1		す り 石	1		礫 [△]	1(1)
	台 石	1		く ぼ み 石	2		礫	2
	石 皿	1		石 皿	(1)		石器計	20
	フ レ イ ク	233		フ レ イ ク	198(4)	FP-1	III 群 B ₃ 類土器	1
	U フ レ イ ク	6		U フ レ イ ク	2		土器計	1
	コ ア	2		コ ア	1		フ レ イ ク	1

表V-2-(2)

遺構番号	名 称	数 量	遺構番号	名 称	数 量	遺構番号	名 称	数 量
F P-1	礫 [△]	3	F P-3	礫 [△]	2	F P-7	Ⅲ群B ₃ 類土器	1
	石器計	4		礫	7		不 明・小破片	1
F P-2	Ⅲ群B ₃ 類土器	2	F P-5	石器計	26	F P-8	土器計	3
	土器計	2		Ⅲ群B ₃ 類土器	1		Ⅱ群B類土器	1
F P-3	Ⅲ群B ₃ 類土器	24		土器計	1		Ⅲ群B類土器	1
	不 明・小破片	2		フ レ イ ク	4		土器計	2
	土器計	26		礫	1	礫 [△]		1
	ポイント・ナイフ	1		石器計	5		石器計	1
	す り 石	1	F P-6	U フ レ イ ク	(2)	F F-1	Ⅱ群B類土器	1
	フ レ イ ク	13		フ レ イ ク	1		土器計	1
	U フ レ イ ク	1		石器計	3	F F-2	Ⅱ群B類土器	1
コ ア		1	F P-7	Ⅱ群B類土器	1		土器計	1

3. 遺構出土掲載石器一覧表

表V-3

遺 構	図・番号	名 称	層	重 量	石材	遺 構	図・番号	名 称	層	重 量	石材
F H-1	V-4-20	スクレイパー	覆土	9.3	O b	F H-2	V-6-7	砥 石	床	218.5	S a
"	" 21	"	"	11.8	S h	"	" 8	台 石	"	2,600	And
"	" 22	"	"	5.1	"	F H-2 (G-22)	V-7-9	す り 石	Ⅲ下	95.1	S a
"	" 23	U フ レ イ ク	"	7.1	"		" 10	"	"	263.7	And
"	" 24	石 斧	"	82.5	Sch	"	" 11	た た き 石	"	1,290	"
"	V-5-25	す り 石	"	368.2	G n	"	" 12	礫 [△]	"	327.8	S a
"	" 26	た た き 石	"	990	Che	"	" 13	石 皿	"	13,200	And
"	" 27	"	"	420.2	S a	"	" 14	石 皿	"	12,800	Q.P.
"	" 28	く ぼ み 石	"	1,850	And	F P-3	V-8-3	ポイント・ナイフ	覆土	12.3	S h
"	" 29	"	"	402.8	Mud	"	" 4	U フ レ イ ク	"	20.6	"
"	" 30	石 皿	床	12,400	Q.P.	"	" 5	す り 石	"	800	And
F H-2	V-6-4	R フ レ イ ク	覆土	15.3	S h	F P-6	V-9-1	U フ レ イ ク	床	115.0	S h
"	" 5	礫 [△]	床	1,740	And	"	" 2	"	"	62.8	"
"	" 6	た た き 石	"	305.6	Q.P.	F P-8	V-10-2	礫 [△]	覆土	263.5	"

4. 包含層出土掲載土器一覧表

表V-4-(1)

図・番号	分 類	発 掘 区	層	図・番号	分 類	発 掘 区	層	図・番号	分 類	発 掘 区	層
V-12-1	I A	I-19	Ⅲ	V-12-8	Ⅱ B	F-27	I	V-13-15	ⅣA ₁	H-22	Ⅲ
" 2	Ⅱ B	H-21	I	" 9	"	F-27	"	" 16	ⅣA ₂	G-28	"
" 3	"	I-20	"	" 10	"	G-27	"	" 17	V	G-28	I
" 4	"	H-20	Ⅲ	" 11	"	I-22	Ⅲ	" 18	ⅢB ₂	H-27	Ⅲ
" 5	"	I-19	"	" 12	Ⅲ A	H-23	"	" 19	"	G-26	攪乱
" 6	"	H-19	I	" 13	"	H-28	"	" 20	"	H-28	Ⅲ
" 7	"	G-28	Ⅲ	" 14	ⅣA ₁	H-26	"	" 21	"	I-22・23	"

表V-4-(2)

図・番号	分類	発掘区	層	図・番号	分類	発掘区	層	図・番号	分類	発掘区	層
V-13-22	ⅢB ₃	I-26	攪乱	V-14-45	ⅢB ₃	I-23	Ⅲ	V-14-68	ⅢB ₃	F-28	攪乱
" 23	"	G-27	"	" 46	"	G-28	"	" 69	"	I-26	I
" 24	"	G-26	"	" 47	"	G-23	攪乱	" 70	"	G-28	Ⅲ
" 25	"	G-26	"	" 48	"	H-24	Ⅲ	" 71	ⅣA ₁	I-26	攪乱
" 26	"	G-23	I	" 49	"	表採	—	" 72	"	"	I
" 27	"	G-24	Ⅲ	" 50	"	H-23	Ⅲ	" 73	"	E-29	Ⅲ
" 28	"	G-27	攪乱	" 51	"	I-26	I	" 74	"	F-26	攪乱
" 29	"	H-22	Ⅲ	" 52	"	I-26	"	" 75a	"	F-28	Ⅲ
" 30	"	I-26	I	" 53	"	H-23	Ⅲ	" 75b	"	"	"
" 31	"	G-24	Ⅲ	" 54	"	J-26	攪乱	" 76	"	I-27	攪乱
" 32	"	G-27	攪乱	" 55	"	F-26	"	" 77	"	F-28	Ⅲ
" 33	"	G-28	Ⅲ下	" 56	"	H-28	Ⅲ	" 78	"	G-26	攪乱
" 34	"	G-27	攪乱	" 57	"	I-23	"	" 79	"	F-27	"
" 35	"	G-26	"	" 58	"	G-26	攪乱	" 80	ⅣA ₂	F-28	Ⅲ
" 36	"	G-23	I	" 59	"	H-28	Ⅲ	" 81	"	G-27	攪乱
" 37	"	G-27	攪乱	" 60	"	E-29	"	" 82	"	H-25	"
" 38	"	G-28	Ⅲ	" 61	"	D-27	攪乱	" 83	"	C-26	I
" 39	"	D-26	"	" 62	"	G-26	"	" 84	"	F-27	攪乱
" 40	"	F-26	"	" 63	"	E-30	攪乱	" 85	"	I-23	Ⅲ
" 41	"	H-27	"	" 64	"	E-29	Ⅲ	" 86	"	F-29	"
" 42	"	G-23	I	" 65	"	H-23	"	" 87	"	G-22	I
" 43	"	E-28	攪乱	" 66	"	G-27	攪乱	" 88a	"	J-26	攪乱
" 44	"	表採	—	" 67	"	G-28	Ⅲ	" 88b	"	"	"

5. 包含層出土掘載石器一覧表

表V-5-(1)

番号	名称	出土区	層	重量	石材	番号	名称	出土区	層	重量	石材	番号	名称	出土区	層	重量	石材
1	石 鐵	I-23	Ⅲ	1.1	S h	19	ド リ ル	F-27	攪乱	3.4	S h	37	スクレイパー	H-27	Ⅲ	39.5	S h
2	"	F-28	"	0.8	"	20	つまみ付ナイフ	F-28	Ⅲ	20.1	"	38	"	I-25	攪乱	44.9	"
3	"	E-28	攪乱	0.8	"	21	"	H-23	I	33.7	"	39	"	F-28	Ⅲ	53.6	"
4	"	F-28	Ⅲ	2.3	"	22	"	G-23	攪乱	5.0	"	40	"	G-23	I	47.1	"
5	"	H-23	"	1.7	"	23	ポ イ ント	F-28	Ⅲ	14.2	"	41	"	I-23	Ⅲ	55.9	"
6	"	I-20	"	0.5	"	24	"	I-23	"	4.1	"	42	"	G-26	攪乱	44.2	"
7	"	I-18	I	1.5	"	25	"	G-28	"	3.9	"	43	"	H-28	Ⅲ	13.1	"
8	"	H-23	Ⅲ	2.0	"	26	スクレイパー	H-27	"	8.1	"	44	"	I-23	"	14.1	"
9	"	H-24	I	1.5	"	27	"	I-23	"	1.4	"	45	"	H-26	攪乱	27.8	"
10	"	G-27	攪乱	2.0	"	28	"	G-27	攪乱	9.4	"	46	"	I-26	攪乱	38.8	"
11	"	I-23	Ⅲ	2.9	"	29	"	表採	—	30.7	"	47	"	表採	—	30.9	"
12	"	I-26	攪乱	2.5	"	30	"	H-21	I	20.5	"	48	"	G-24	Ⅲ	50.2	"
13	"	F-27	"	1.1	"	31	"	G-28	Ⅲ	9.3	"	49	"	H-21	I	34.9	"
14	"	H-23	Ⅲ	1.6	"	32	"	I-26	攪乱	86.3	"	50	"	H-26	攪乱	27.6	"
15	"	J-23	"	6.1	"	33	"	D-27	"	40.3	"	51	"	I-23	Ⅲ	8.5	"
16	ド リ ル	I-23	"	20.2	"	34	"	D-30	Ⅲ	10.9	"	52	"	H-23	"	12.8	"
17	"	"	"	11.8	"	35	"	G-22	I	57.8	"	53	U フ レ イ ク	G-27	攪乱	15.0	"
18	"	"	"	6.4	"	36	"	I-25	攪乱	77.5	"	54	"	I-23	Ⅲ	3.3	"

V 新道4遺跡 F地区の調査

表V-5-(2)

番号	名 称	出土区	層	重量	石 材	番号	名 称	出土区	層	重量	石 材	番号	名 称	出土区	層	重量	石 材
55	Uフレイク	H-19	I	3.6	S h	68	磨製石斧	G-28	Ⅲ	11.6	Gr-Mud	81	接合資料	G-28	Ⅲ	15.3	S h
56	"	H-24	攪乱	32.6	"	69	"	F-29	攪乱	52.7	"	82	"	H-22	"	32.8	"
57	"	I-23	Ⅲ	20.7	"	70	"	I-24	I	189.0	S l	83	"	F-26	攪乱	91.5	"
58	"	G-23	I	31.7	"	71	"	G-23	攪乱	95.0	Sch.	84	"	-27-28	I	191.9	"
59	"	I-23	Ⅲ	23.2	"	72	すり石	表採	-	264.7	S a	85	"	FH-1 GH-26	攪乱	143.1	
60	"	G-26	攪乱	10.4	"	73	"	I-23	Ⅲ	625.0	G n	86	"	F-28 H-23 I-22	I ・ Ⅲ	179.8	"
61	"	H-21	I	6.7	"	74	"	G-23	攪乱	795.0	Dac.						
62	"	H-27	Ⅲ	7.1	"	75	"	I-23	Ⅲ	798.8	G. P.	87	"	G-H-23	Ⅲ	169.4	"
63	"	G-28	Ⅲ	4.6	"	76	たたき石	G-28	I	221.2	Mud.	88	"	E-29	攪乱	5.3	"
64	"	H-21	I	7.3	"	77	くぼみ石	I-21	"	420.0	And.	89	"	"	Ⅲ	3.5	"
65	コ ア	F-28	Ⅲ	650.0	"	78	石製品	G-23	攪乱	6.9	T u※	90	"	FH-1	攪乱	27.2	"
66	"	G-27	攪乱	54.3	"	79	石 皿	H-22	Ⅲ	15,500	And.	91	"	FH-1 H-25	I	8.4	"
67	"	I-25	"	360.8	"	80	未製品	G-28	"	73.5	S h	92	"	I-23	Ⅲ	101.0	"

※78は溶結凝灰岩である。

図版 I



1. F地区 調査風景



2. F地区 全完掘風景

図版 2



1. FH-1の完掘



2. FH-1のセクション



3. FH-1床面・HP-1の完掘



4. FH-1床面 炭化材出土状況

図版 3



1. FH-2の完掘



2. FH-2 土器出土状況



3. 遺物出土状況



4. FH-2のセクション

図版 4



1. FP-1の完掘



2. FP-2の完掘



3. FP-3のセクション



4. FP-3・6完掘



5. FP-4の完掘



6. FP-7の完掘



7. FP-8のセクションと遺物出土状況



8. FP-8の完掘

図版 5



1. F地区 近・現代の遺構



2. F地区 近・現代の遺構

図版6



1. FH-1 覆土出土の土器



2. FH-1 出土の炭化物



3. FH-2 覆土出土の土器



4. FP-3 覆土出土の土器



5. FP-8 覆土出土の土器

図版7



FH-1 覆土出土の土器

図版8



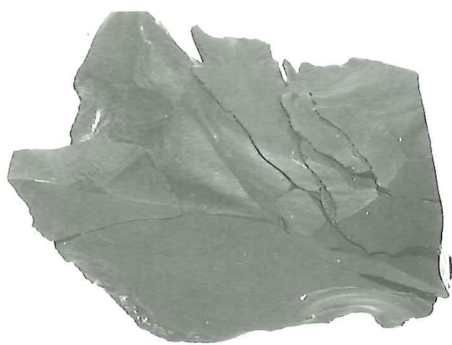
包含層出土の土器



包含層出土の土器



包含層出土の土器



包含層出土の石器（接合資料）

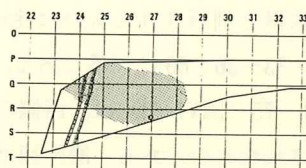
Ⅵ 新道 4 遺跡 H 地区の調査

1. 遺跡の概要

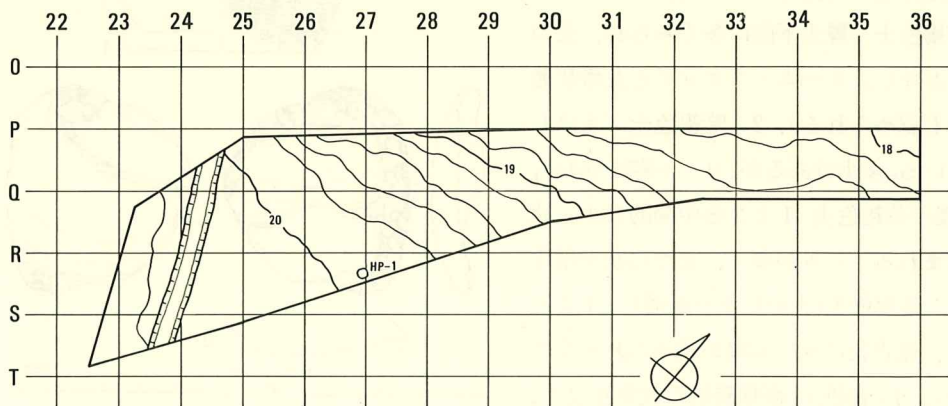
この地区は新道 4 遺跡 B～G 地区をのせる海岸段丘面上に立地し、標高は 18～20 m である。昭和 59 年度に調査された B 地区と北側で接し、町道をはさんだ西側には本年度に調査された A 地区がある。調査範囲の中央部は、北に向かってなだらかに傾斜している。標高の低い東端部（P-34・35 区）には IV 層黒色土が認められ、窪地であった事が窺われる。西側には平坦な面が広がっており、ピットや小ピット群、焼土跡が検出されている。この平坦面は、削平をまぬがれた III 層下面より平坦な面を形成しており、人為的に成された痕跡は見出されなかった。

調査の結果、ピット (1)、小ピット (75)、焼土 (10) が検出された。ピットは縄文時代前期の所産で、焼土が詰まっていた。小ピットのうち、68 個は先述した西側に集中していた。これらも縄文時代前期のものである可能性が高い。また、23～25 ラインにかけては、B・F 両地区から連続する近・現代の溝がある。

遺物は、土器が 8,527 点、剥片・礫を含む石器類が 4,006 点出土している。土器では II 群 B₂ 類、IV 群 A₁ 類、同 A₂ 類が多く、III 群 A 類、同 B₂ 類、同 B₃ 類、V 群も出土している。石器では、石鏃・ドリル・スクレイパー・磨製石斧・すり石・くぼみ石等の他に、擦切跡を残した石斧素材と旧石器時代のブレイド 1 点が出土している。調査にあたっては、昭和 59 年度 B 地区の調査結果に基づき、多数の遺物出土が予想された P-32～35 区の III 層を 5 cm ずつ掘りさげる方法を試みた。しかし、大規模な攪乱跡の存在や III 層そのものに排土層的な性格が窺われ、十分な成果を挙げる事は出来なかった。



小ピットの位置



図Ⅵ-Ⅰ 遺跡の地形と遺構

2. 遺 構

(1) ピ ッ ト

HP-1 (図VI-2・図版VI-1)

位 置 R-26・27 規 模 0.7×0.55/0.45×0.35/0.25

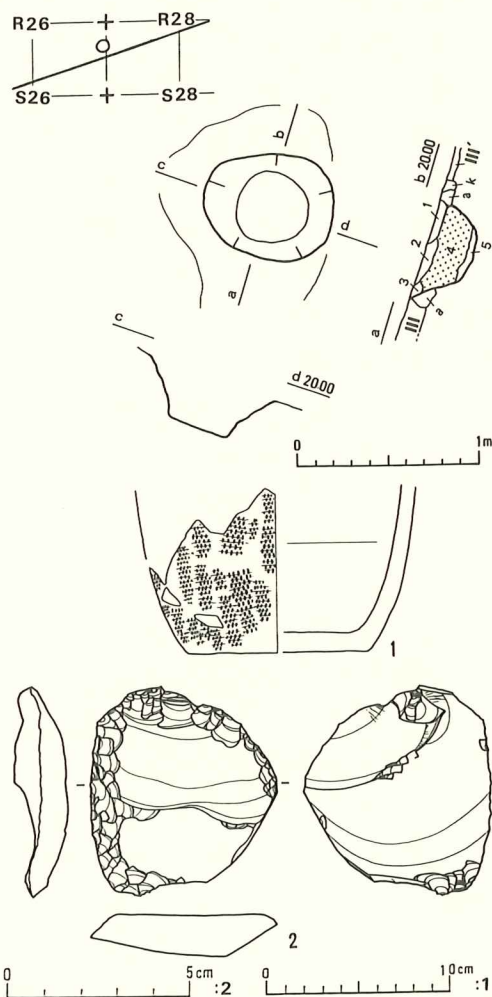
特 徴 V層上面で確認された。覆土は1：暗褐色土(木炭粒を含む) 2：褐色土(まだら) 3：明褐色土 4：焼土 5：茶褐色土(焼土に木炭、ローム、褐色土がまじる)である。aは黄褐色ロームで、V層に類似すると思われる。遺構周辺はV層面であっても暗褐～茶褐色の土の広がりが認められ、全体に窪んだ状態が窺われた。

遺 物 遺構内はほぼ焼土で占められており、そこから出土した遺物はない。1は覆土上面から得られたII群B₂類土器である。HP-1の確認面あたりでは、II群B₂類土器が細片化した状態で出土しているが、故意に破砕したものかどうかは不明である。2も覆土上面から出土したスクレイパーである。

(2) 小ピット (図VI-3・4、図版VI-2～6)

V～VI層面にかけて、多数の小ピットが検出された。発掘区西側で68個、東側で7個の計75個を数える。これらはすべて半割したため、平面形は明確ではない。また、図示した以外にも半割した落ちこみはあるが、明らかに木根と判断されたものは除いている。9・28・33～36・65は欠番である。

1～75(図VI-3)は、西側の調査区から検出されたものである。層位図は、主に断面形状の明瞭なものを図示した。覆土は1：黒褐～暗茶褐色土(覆土下位に多くみられ、土のしまりが無い。ローム・ブロックと互層状態のものも認められる)、2：暗褐色土(土はしまっている。多少はあるが、ローム粒を含む)、3：黒褐～茶褐色土(1と2の中間的な土。比較的含まれるロームが多く、まだら状を呈する)、4：茶褐色土(土のしまりが弱い。1より明るく、斑点状にローム塊が認められるものが多い)、5：褐色土(漸移層的な状態を呈し、標準層位のV層に近いが、土にしまりが無い)



図VI-2 HP-1

である。VI'としたものは浮いた、あるいは汚れた状態のVI層のロームである。また、ロームを含む覆土には、数字にダッシュをつけている。掘りこみ面の確実なものはない。調査範囲の壁にかかる16はI層直下で、残存していたIII層を切っている。59(図版VI-4-8)は、掘り込みは不明瞭で、III層中位で乱れた層状態を呈している。IV群A₂類を出土したIII層上位の黒色土のところは、影響を受けていないようである。

これらの小ピットは、確認面からの深さにより、I:深さ40cmを超えるもの、II:深さ20~40cmのもの、III:深さ20cm未満のものに分けている。タイプ別の分布図は、4・まとめのところに掲げている。覆土の状態では、数枚に分層されるものとはほぼ単一の層のものとがあり、タイプIには前者が、タイプIIIには後者が多い。形状では、タイプIはVI層との層界が明瞭で、1~3のような筒状を呈するものが大半を占める。タイプIIでは層界が不明瞭で、断面の定まらないものがみられる。明瞭なものでは、タイプI同様の筒形のものに加え、24のような鉢型のものも認められる。タイプIIIでは、V層中に認められる凸凹と類似した状態のものがあり、碗状や皿状の断面形を呈するものが多い。

遺物は、SP-2・12・20・27・48からII群B₂類土器、SP-46ではIV群A₁類土器、SP-70・73では側縁に礫皮面を残したスクレイパー、SP-48からはフレイクが出土している。その中から特徴の明瞭なものを図示した。また、整理作業段階で、出土地点が小ピット上に位置する遺物が認められた。SP-51の上部からは、II群B₂類土器の小片が得られている。HP-1上面にちらばっていた同群土器より低いレベルで取りあげられており、沈んだ可能性がある。SP-48の上位からIV群A₁類土器(図VI-11-18)が得られ、これも周囲の遺物出土状況をみると、沈んだものと思われる。

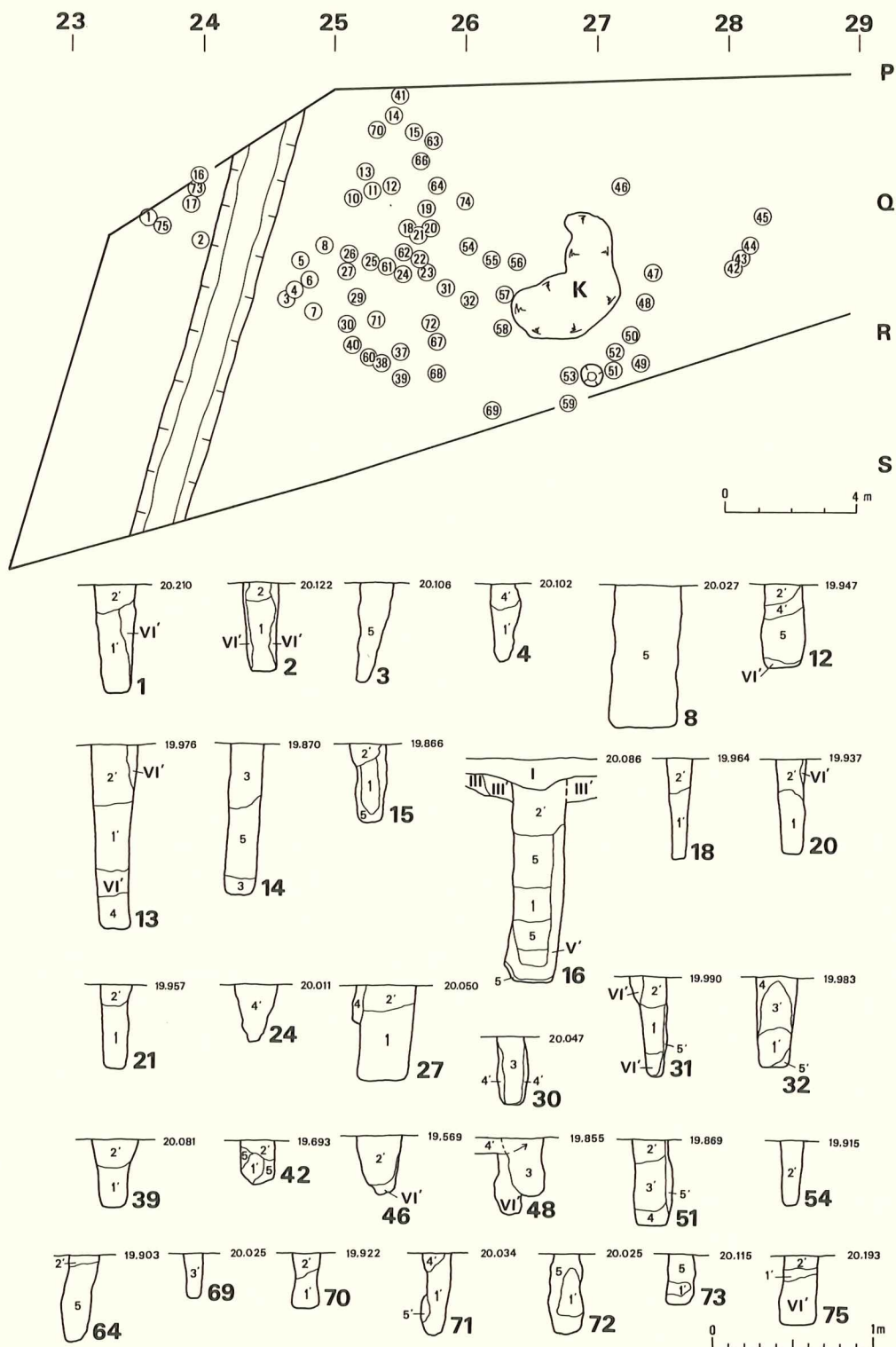
a~gは、東側の調査区に点在する状況で検出されている。覆土はロームを含まず、土のしまりの弱いものが多い。eの上部は、排水溝によって切られている。gは排土と思われるローム・ブロックを切り、図VI-7-16~19のIV群A₁類土器が出土している。

(3) 焼土 (図VI-5)

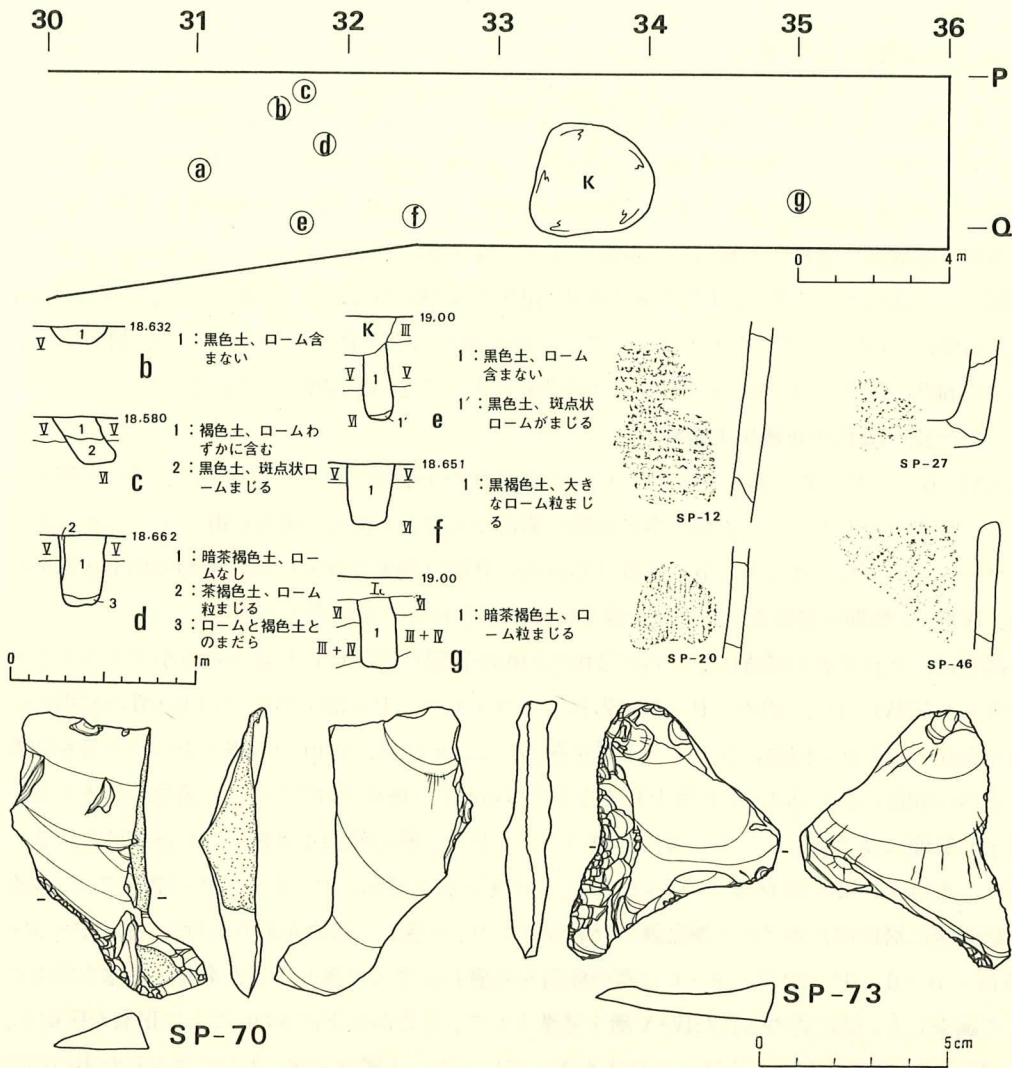
10カ所で焼土跡が検出されている。特に掘りこみの認められたものはない。時期では、検出面からF-2・3・4・5・7・8が縄文時代前期のII群B₂類期と判断される。F-1・6・9は、いずれも風倒木痕とされる攪乱部のへりにあり、縄文時代後期のものがへこみにもぐったものと思われる。F-10の直上からは、図VI-12-26の土器が出土し、近くからは同図-28・31が得られている。このうち、28は赤変しており、これらの状況からはIV群A₂類期の所産と考えられる。

1は、F3上面から得られたIV群A₁類土器で、赤変はしていない。レベルからは焼土より後の時期のものと判断される。2はF8から得られたII群B₂類土器で、赤変している。

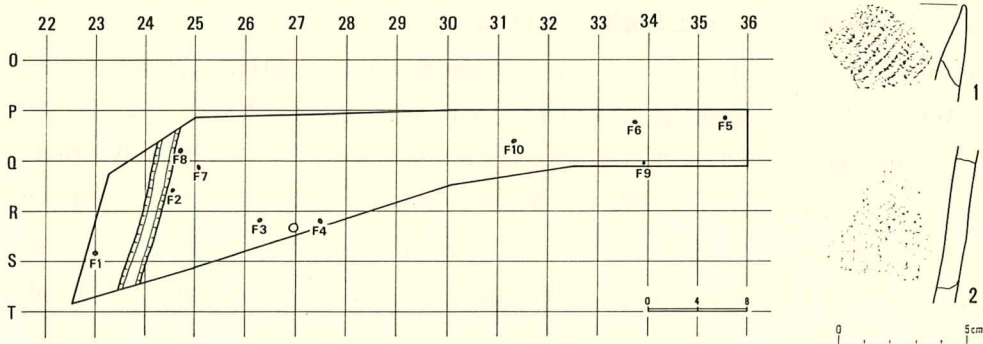
VI 新道4遺跡 H地区の調査



図VI-3 小ピット群 (I)



図VI-4 小ピット群(2)



図VI-5 焼土の分布と遺物

3. 包含層出土の遺物

概要で触れたように、厚い包含層の存在が予想されたP-32~35区は、後述する5cmごとの掘り下げを行った。その他の調査区ではⅢ層出土遺物は位置を記録して、Ⅰ層出土遺物は発掘区ごとに一括して取りあげている。報告もこれに従い、P-32~35区のⅢ層出土遺物、32ライン西側のⅢ層出土遺物、Ⅰ層出土の遺物に分けて行う事にする。

層ごとの遺物出土点数は、Ⅰ層が8,239点、Ⅲ層が4,267点である。後者のうち、土器は2,451点、石器は45点で、残りの大半はフレイクや礫の類である。P-32~35区からは、Ⅲ層出土土器の約60%にあたる1,484点、石器では約半数にあたる21点が出土している。

1) P-32~35区のⅢ層出土遺物

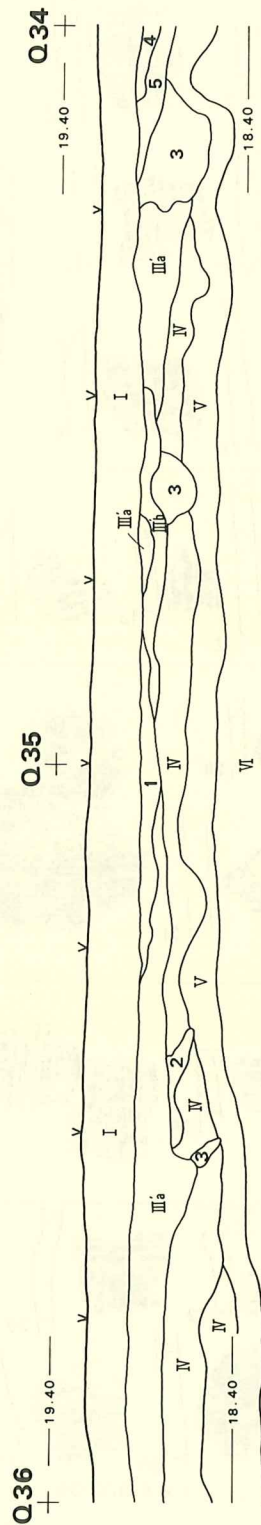
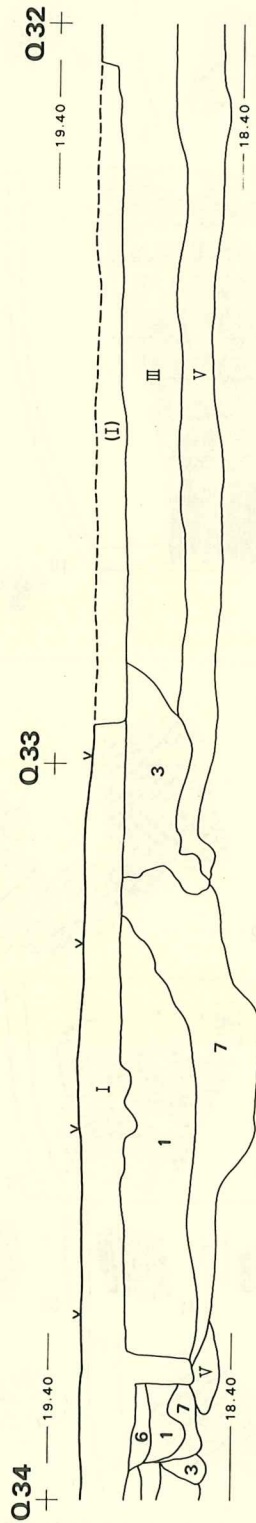
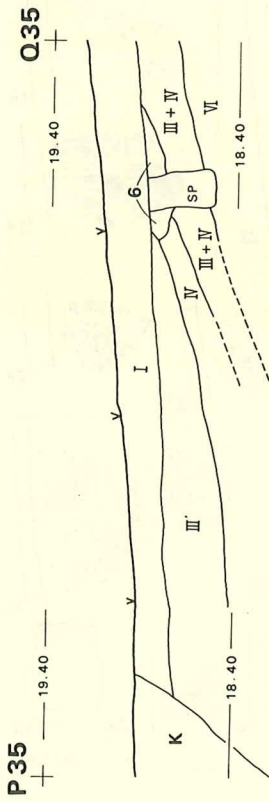
図VI-6は、P-32~35区南壁及びP-35区西壁の土層図である。Ⅲ層には、ローム粒を含まない暗褐色のものとローム粒を含む茶褐~褐色のものとがある。後者をⅢ'とし、これはさらにローム粒の少ないaと多いbとに分けられる。Ⅱ層は削平されている。遺物の出土状況からは、Ⅳ群A₂類期の遺物を含むⅢ層上面もほぼ削平されていると考えられる。

調査は、それぞれの調査区をさらに2m×2mに分割して設定したa~dの小グリッドごとに行った(図VI-11)。始めにP-34・35区ではa・cの、P-32・33区ではb・dの四隅のレベルを測り、それが同値になるまでⅠ層を掘削した。その後、5cmの目盛りをつけた箸を四隅とその中間部に差し込み、この箸を目安として5cmずつ掘り下げていった。遺物の出土しないⅣ・Ⅴ層面に達するまで、この方法を続けた。これは、層の傾斜を考慮しない試掘的な方法であり、遺物はP-32~35区までのものをひとつにまとめて図示した。また、P-33区では、調査開始直後に層位図に示された攪乱跡の存在がわかり、一括して遺物を取りあげた。残るP-34・35区-b・d、P-32区-a・cは層の傾斜を考慮し、すでに掘り下げた発掘区の壁を参考にして調査した。壁に認められたⅣ・Ⅴ層を基準として、そこから上に5cmごとにⅢ層を区切り、Ⅳ(Ⅴ)+5、+10、+15……と印した竹串を差ししていった。Ⅰ層除去後、3辺にさされた串の同段階のものが現われるまで順に掘り下げた。遺物も段階ごとに取りあげ、その順に図示している。なお、遺物の分類や文様は一覧表に記入し、本文では触れていない。

i) P-35区-b・d出土の遺物 (図VI-7)

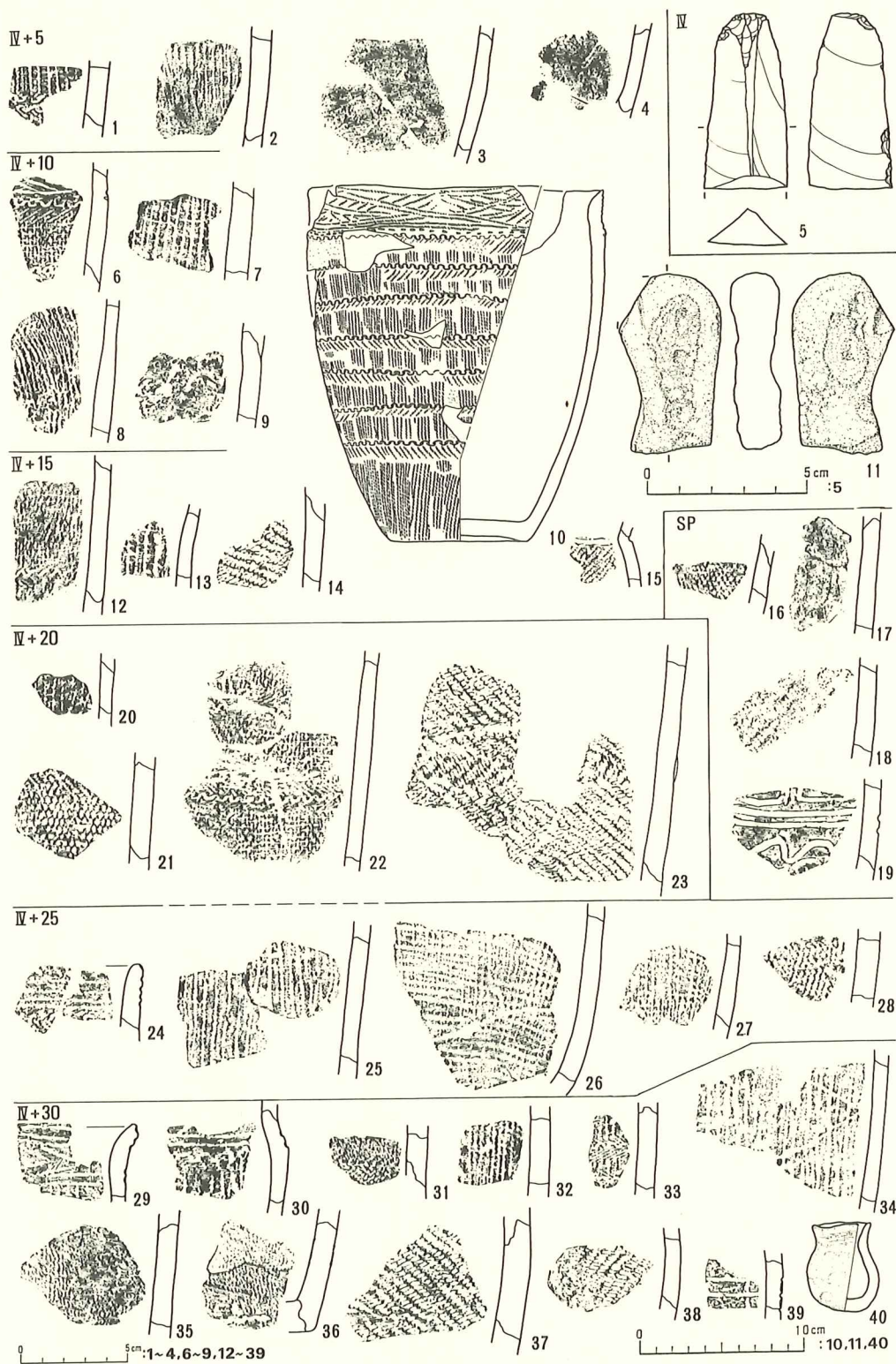
5はⅥ層上面から出土したブレードである。本地区から出土した旧石器は、これ1点のみである。3・4は同一個体の可能性がある。8は条の方向にばらつきのある撚糸文、9は表面が摩耗している。10はⅥ+5・+10・+20の各段階から破片が得られている。多くはⅣ~Ⅳ+10までに出土しているが、口縁部破片の一部がⅣ+20段階に認められた。16~19は先述したSP-g(図VI-4)から出土している。15もこの小ピットから出土した可能性の考えられるものである。25は34と同一個体と思われ、一方の破片はⅣ+20段階から出土している。40は、Ⅰ層とⅢ層との境から出土している。口縁の一部に剝落痕のある他は、完形である。

ii) P-34区-b・d出土の遺物 (図VI-8、図版VI-2)



- 1: 暗黄褐～黄褐色ローム、浮いた土と思われる。
- 2: 赤褐色土、Ⅲ層の焼土化したものの可能性がある。木炭粒を含む。
- 3: 黒褐色土、土のしまりがやや弱い。
- 4: 褐色土、Ⅲ層と思われる火山灰が斑点状にはいる。
- 5: 黒色土、Ⅲ上に相当する。
- 6: 褐色土、ローム粒多く含まれる。
- 7: 黒褐色土と茶褐色土とにローム・ブロックがまじり、まだら。

図VI-6 P-32～35区の層序

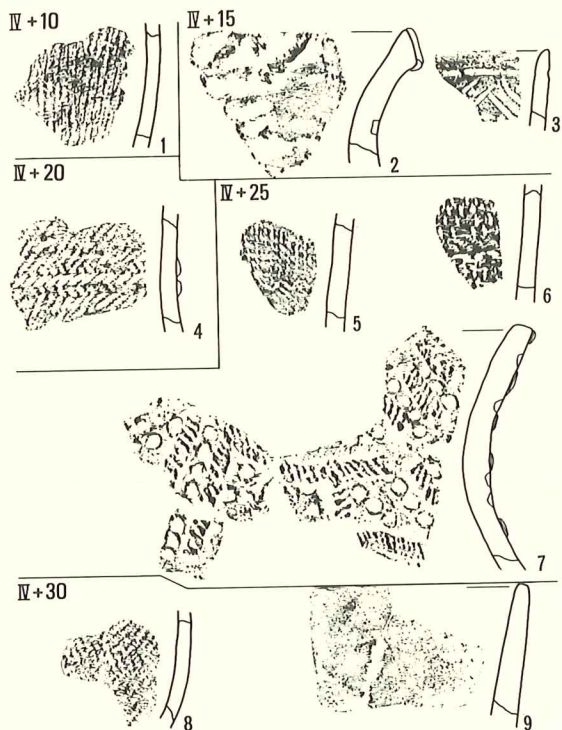


図VI-7 P-35区のⅢ層出土遺物

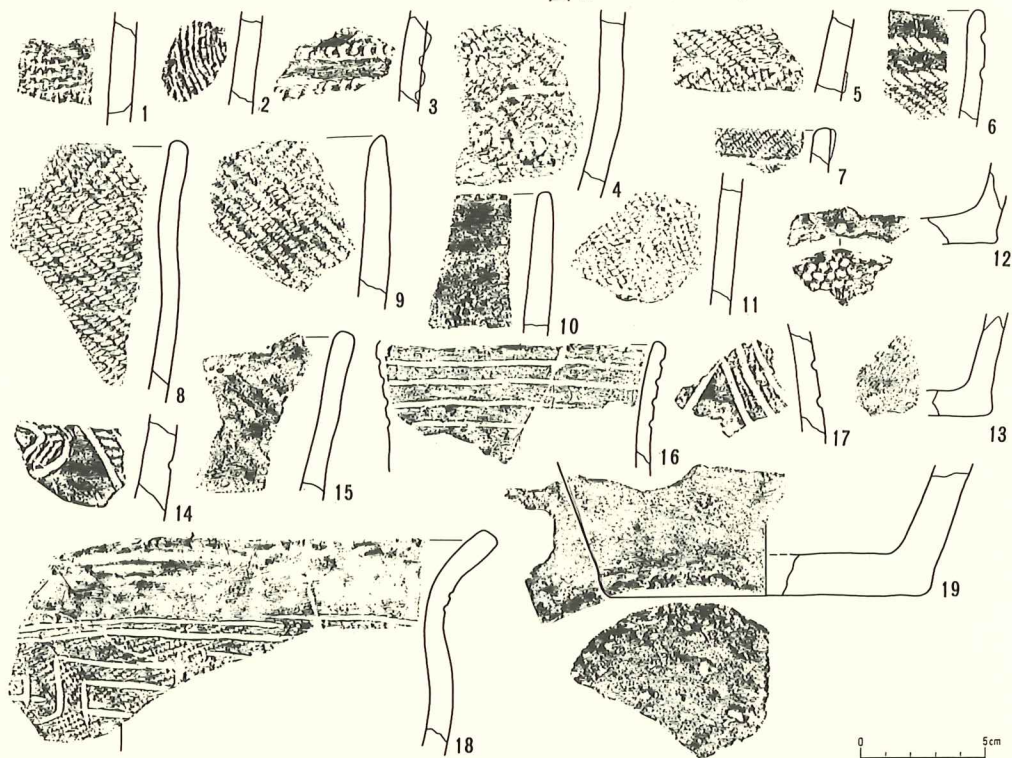


図VI-8 P-34区のⅢ層出土遺物

P-34区-dの東壁には、P-35区-a掘削時に8の土器片が半分現われていた。Ⅲ層下位からの出土であり、Ⅳ群A₂類土器としては明らかに低く、遺構の存在が予想された。P-34区-dの東壁を観察したところ、Ⅲ層中にやや土のきめが荒く、ボソボソした状態を呈するところが認められた。しかし、明瞭に一線を引く事は出来ず、遺物の出土状況をみながら慎重に掘り下げていった。その結果、図版Ⅵ-2-3にみられる範囲にフレイクの出土が多く、土に黒味の強い事がわかった。しかし、立ちあがりを確認する事が出来ず、明瞭な掘り込みをもたない削平跡のようなところと思われた。1~7はこの部分から出土したものであ



図Ⅵ-9 P-32区のⅢ層出土土器



図Ⅵ-10 P-32~35区のⅢ層出土土器

る。4には浅い無節の縄文がある。6・7は同一個体かもしれない。10と同一個体のものは、P-32区のI層からも得られている。20の割れ口には補修孔の跡がある。21は図VI-13-9と同一個体と思われる。33は上部に荒い縄文が認められる。35の縄文は無節である。27・28はIV+15で得られた石器である。

iii) P-32区-a・c出土の遺物 (図VI-9)

P-34・35区に比べると遺物が少なく、それらのほとんどは摩滅したII群B₂類土器や縄文のみの小片である。7の刺突文は竹管様工具によるものである。9は図VI-7-3・4と同一個体かもしれない。

iv) P-32区-b・d、P-33区、P-34・35区-a・c出土の遺物 (図VI-10、図版VI-2)

ここには層の傾斜を考慮せず、水平に掘り下げる方法によって得られた土器と攪乱跡の認められたP-33区出土の土器をまとめている。石器はIII層出土の石器(図VI-15)のところで報告する。土器は特徴の明瞭なものに限って図示した。他の多くはiiiと同様、小片か、地文のみのものである。7の縄線は2段の原体によるものである。10は図VI-9-9と同一個体である。13は上部に浅い縄文がある。

2) 32ライン西側のIII層出土土器 (図VI-11・12)

図VI-11下図が土器の出土地点である。この部分のIII層は、調査範囲の南壁に沿った部分やP・Q-30・31区部分を除いて、下面まで削平されている。P・Q-24区の出土遺物は、II群B₂類期の面がわずかに残っていた事を示すと思われるが、P-23・26区のものは、風倒木痕様の落ち込みから得られたものである。P-31区の28・31、P-30区の14・15は同一地点、同一レベルで取りあげられている。

I群B₃類 (図VI-1-11-1)

丸底を呈する底部近くの破片と思われる。表面は摩滅しており、割れ口には炭化物が付着している。出土は、III層上～中位のIV群A₁類期と考えられる面からである。

II群B₂類 (図VI-11-2～10)

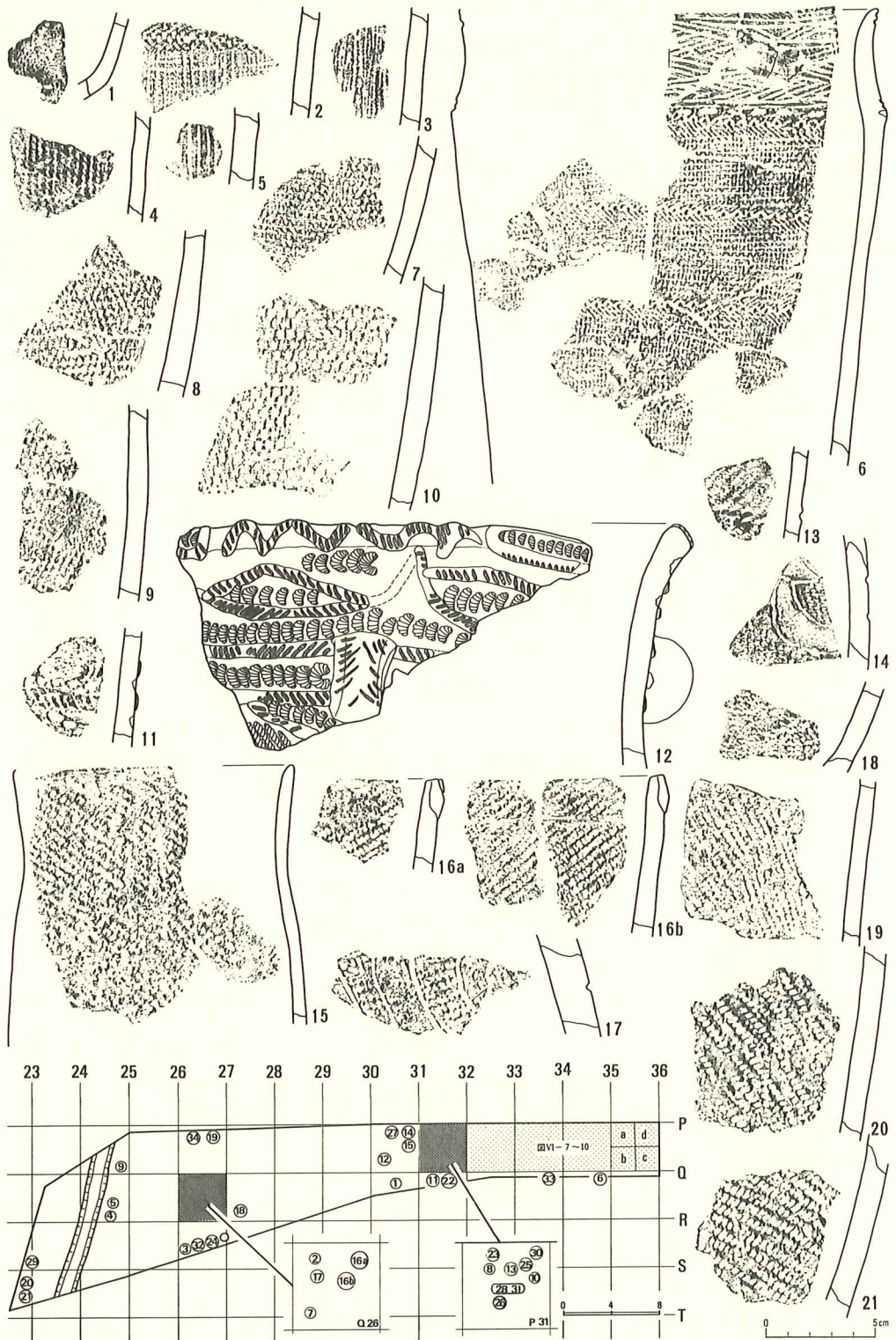
2～5が撚糸文、6～10が平織状撚糸文のもので、9・10は撚紐を2本1巻にした原体によるものである。6の口唇部には縄文が認められる。9には浅くて不明瞭であるが、縄文が加えられている。出土状況は、2～5までがII群B₂類期と思われる面、6～10は浮いた可能性のあるもので、多くは周囲のIV群A₁類土器に近いレベルから出土している。

III群A類 (図VI-11・12)

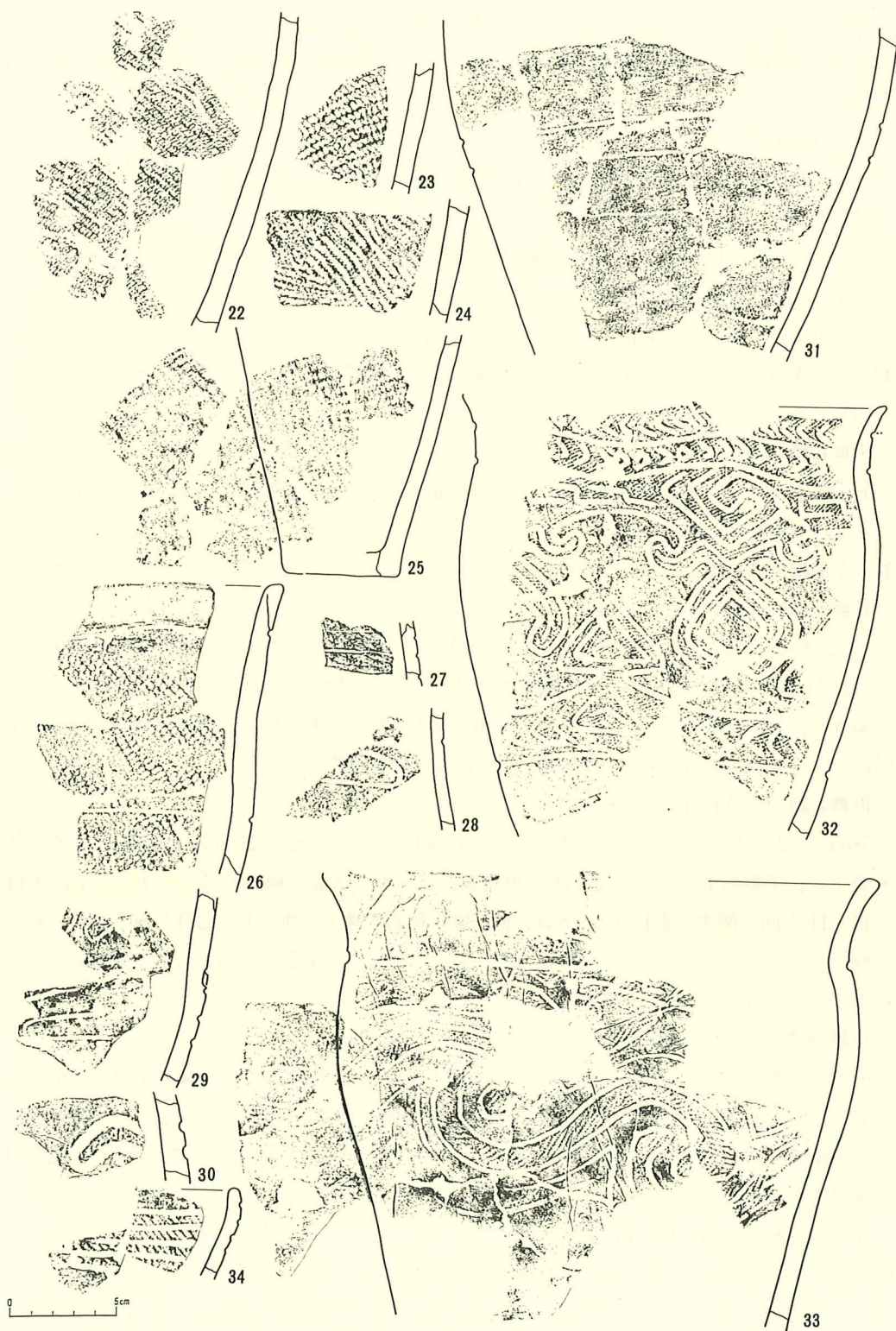
11は竹管様工具、12は縄による馬蹄形圧痕文がついている。出土状況は、10cmのレベル幅をもつ破片の接合した例などがあり、面的なものは読みとれない。

III群B₂類 (図VI-11-13～15・24・25)

13は薄い隆帯上に縄線の加えられたもの、14は磨消縄文のものである。15にはくびれが認められる。24・25は羽状縄文の施されたものである。24を除いて、周囲に認められたIV群A₁類



図VI-11 Ⅲ層出土の土器(1)



図VI-12 III層出土の土器(2)

土器との出土状況の差は見出せなかった。24は、HP-1上面にちらばっていたII群B₂類土器(20,000m前後)とIV群A₂類の32(20,200m)の中間にあたるレベル(20,123m)から出土している。

IV群A₁類 (図VI-11・12-16~23)

特徴の明瞭なものは少ないが、P-31区周辺で面的な出土状況を示している。

IV群A₂類 (図VI-12-26~33)

沈線文による文様が描かれ、26は縄文地、28・29・31は無文地、30・32・33は磨消縄文である。27には浅い縄文が認められるが、縄文地と言い得るかどうかはわからない。26は28・31より10cm程低いレベルから出土しているが、近くに沈線間に擦痕のある土器があった。27・30・32は、傾斜を考えるとほぼ同一面と捉えられるレベルから出土している。29・33は風倒木痕様の落ちこみのへり部分から出土している。

IV群B類 (図VI-12-34)

P-26区壁ぎわの風倒木痕様の落ち込みから出土している。上から3~4列目の沈線は、左端のところで横U字に閉じられている。

3) I層出土の土器

II群B₂類 (図VI-13-1~4)

1は、撚りの異なる原体を2本1組にして押圧した縄線文が2列ある。地文は縦走縄文である。2は口縁突起部の破片で、縦の縄線文が認められる。縄線の間には、刺突も並んでいる。3の縄線文は×字を基調とし、その中に小波形のものも加えられている。胴部の綾絡文は、結節回転によるものである。4は平織状撚糸文の施された底部破片である。

III群A類 (図VI-13-5~8)

5・6には2本1組で押圧された縄線文があり、同一個体と思われる。5には口唇上に、6には隆帯上に、半截竹管によると思われる刺突がある。5では縦の縄線も認められる。7は図VI-11-11と同一個体と思われる。8は、結束第1種羽状縄文の地の上に貼付が施されている。口縁右上のへりがそのまま張り出し、左傾した∩形を呈する突起が認められる。突起の内側は肉厚になっており、断面が三角形状になっている。

III群B₂類 (図VI-13-9~13)

9は地の縄文に加え、沈線文、刺突文、貼付文が施されている。刺突は、棒状工具を斜位から押しつけたものと思われる。10には無文地に3条の縄線がある。11は棒状工具による円形刺突、12は貼付帯上に竹管による円形刺突の認められるものである。13は低い隆帯、縄文、刻線の順に施文されている。

III群B₃類 (図VI-13-14~19)

14・16は貼付帯のあるもので、地と同じ縄文がついている。16には、口唇部に沈線がある。15は、条の間が開いており、付加条に類するものと思われる。17は縄線文、18・19は羽状縄文の施されたものである。



図VI-13 I層出土の土器(1)

IV群 A₁ 類 (図VI-13-20~32)

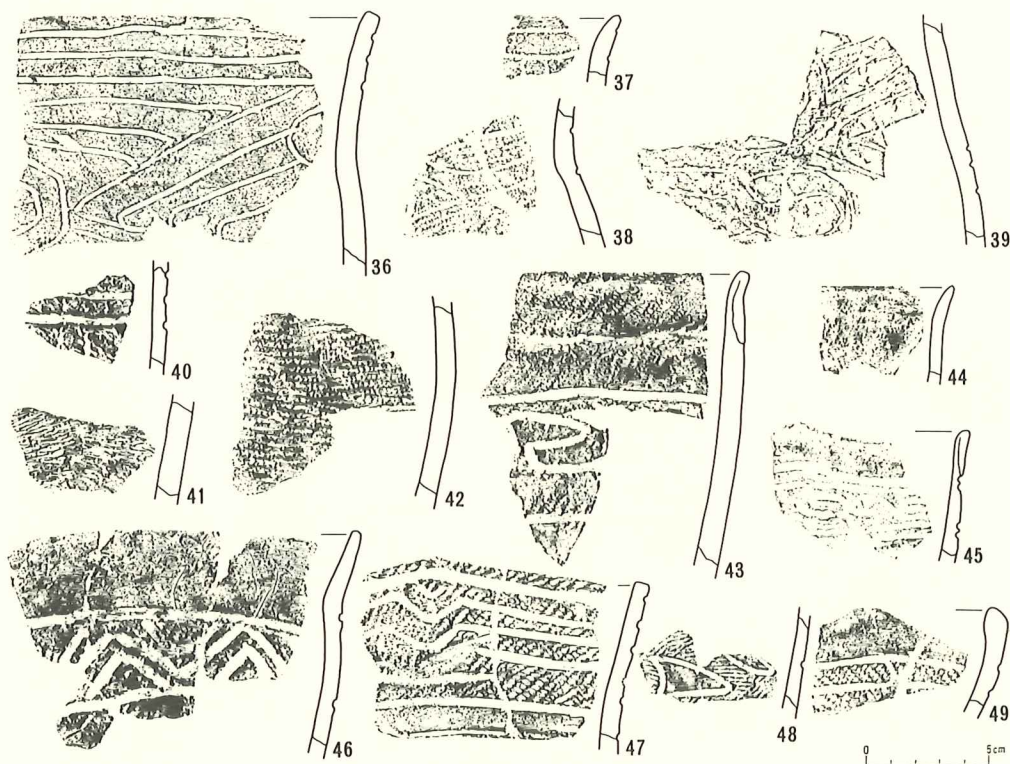
F地区でIII群 B₃ 類-iiiとしたものに類似するものである。同地区のIII群 B₃ 類-iiとしたグループに見られる刺突や大木的な要素をもつ土器は、本地区では少ない。F地区には比較的きめの細かい胎土の土器があるのに対して、本地区のものは砂の混入の少ないためか、荒く硬質な感じを受けるものが多い。こうした事から、F地区のものよりは、やや新しい段階と判断して、IV群に位置づけた。20~29は口縁部破片で、斜行縄文のもの(20~25)、羽状縄文のもの(26・27)、沈線文の加えられたもの(26)、無文のもの(29)がある。30・31は縄文地に沈線文のあるもの、32は底部である。

IV群 A₂ 類 (図VI-13・14-33~48)

33は突起部に貼付、34~37・39は無文地に沈線文の施されたものである。38は、A₁ 類の30・31に比べると細く曲線的な沈線文が縄文地に描かれている。40は網目状捺糸文、41は無節の縄文である。42はすき間の目立つ縄文である。43は、IV群 A₁ 類と本類後半に位置づけられる大津式との接点的な資料と思われる。44は無文、45は無文地に太い沈線文の描かれるものである。46・47は、外反する口縁部の幅が広い。48は磨消縄文のものである。

IV群 B 類 (図VI-14-49)

やや肥厚する口縁の突起部分である。



図VI-14 I層出土の土器(2)

4) III層出土の石器

図VI-15 下図に出土地点を示した。点線で囲んであるものは、発掘区のIII層で取りあげたもので、出土位置は記録していない。このうち、32ライン東側のものは、3-1)で述べたa~dの小グリッドで取りあげている。P-35区の2・4は、同レベル段階のものである。

1は有茎石鏃、2はつまみ付ナイフで、どちらも欠損している。2は打点と逆方向につまみ部が作り出されている。3・4はスクレイパーである。3には、2箇所ノッチがある。5~9は、剥片の一部に微細な剥離痕の認められる石器である。7~9は、同一母岩の可能性がある。5・7・8は縦長剥片、6は横長剥片を利用したものである。9には、破損後の微細剥離痕が認められる。10・11は石斧素材と思われるものである。10は両面から擦切を入れて母岩から切断されたもので、切断面と対のところには敲打痕がある。その近くにも、途中までで終わっている擦切跡がある。11には、図左の面のみ擦切跡が残っている。同面の右辺側は、10に似た形状の石材が打ち割られている状態で、縁の部分は敲打により潰れている。12・13はすり石である。12は半円状扁平打製石器と称させられているもので、擦部はきわめて狭い。体部には3箇所のくぼみと長軸両端の打欠きがある。13は欠損品で、擦部は図右面からの打欠きにより失われた状態である。14~16はたたき石である。14には頭部を除く側縁に、15には下端部に、16には側縁と図左の面に使用痕が残されている。17はくぼみ石で、細かなすり跡が至る所に認められる。18は接合資料である。小剥片が剥離されており、F地区から得られた資料の中に類似したものがある。図化の方法はF地区と同様であるが、剥片の位置を示した模式図を加えている。模式図の縮尺は3/5である。図左面の右端を打面として剥離を行っているが、石の質、あるいは技術的なものによって、形状の定まらない剥片が得られている。剥片1は、他と加撃方向が異なり、礫皮が剥がれ落ちた状態のものであろう。剥片5の剥離面は節理で、リングが不明瞭である。割ったと言うよりも節理面から割れてしまったものと思われる。剥片の中に使用痕の認められるものはない。

出土レベルから時期の推定されるものでは、5・10~12・16がII群B₂類期、15はIV群A類期のものと思われる。32ラインより東側のものは不明確であるが、出土する土器の量的なものからはII群B₂類、IV群A₁類のどちらかに帰属する確率が高い。18は、P-32区-bのIII層上~中位から出土したものの接合資料で、IV群A₁類期に位置づけられると思われる。

5) I層出土石器 (図VI-18~23)

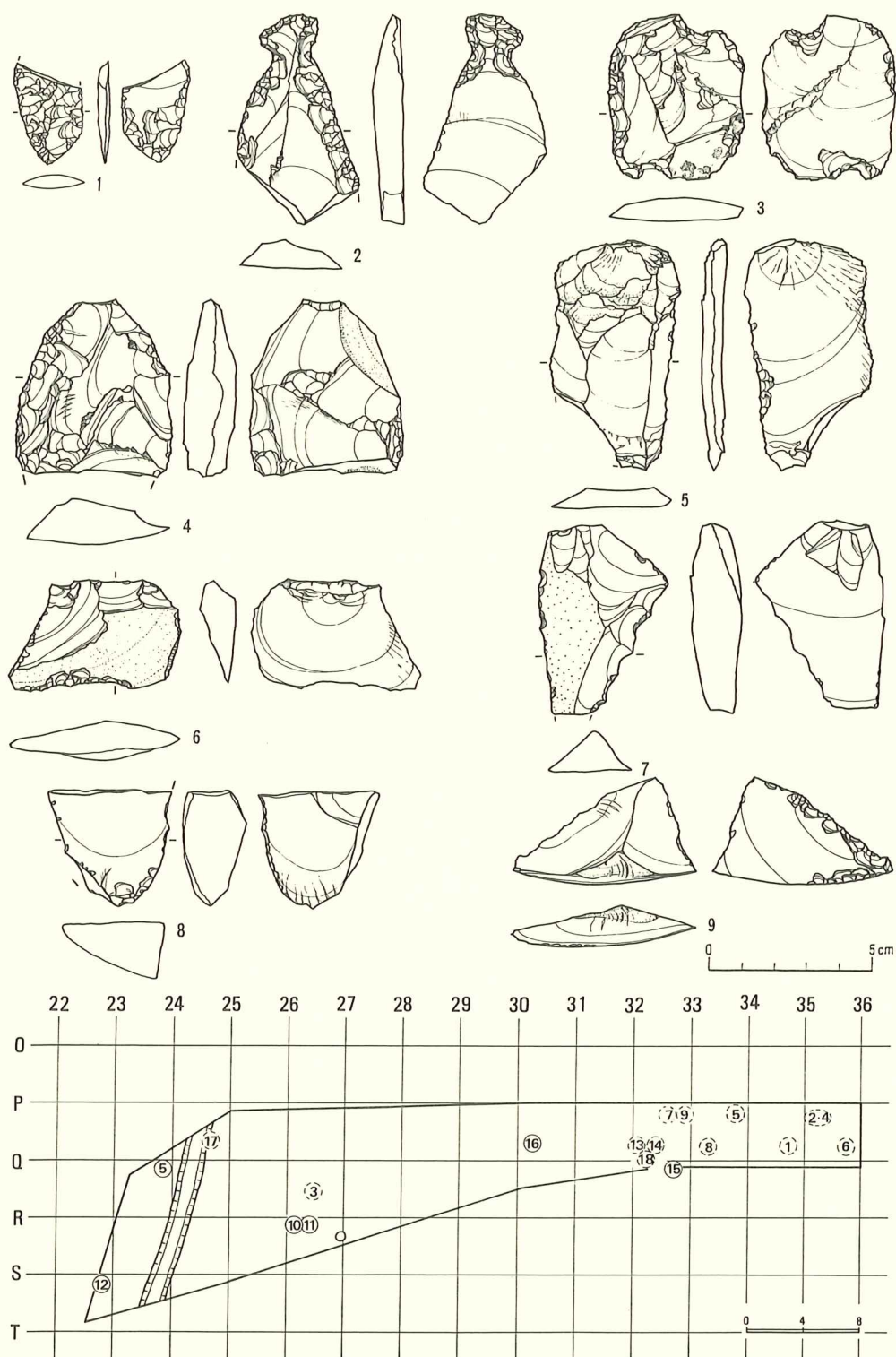
石鏃 (1~12)

1は無茎凹基、2は有茎凹基のものである。3~5は有茎平基、6~9は有茎凸基、10~12は木葉形、もしくは卵形を呈する尖基、および円基である。2・3は黒曜石製で、鏃身部縁辺が内湾している。9の基部には原石面が残っている。

ドリル (13・14)

13は棒状のもの、14は縦長剥片の先端に機能部を作り出したものである。

つまみ付ナイフ (15~17)



図Ⅳ-15 Ⅲ層出土の石器 (1)

15・16 はつまみ部のみが得られた欠損品で、15 は熱を受け、はじけたものと思われる。15・16 とも打瘤付近につまみ部を作り出しているが、17 は打点と反対方向につまみ部がある。

スクレイパー (18~32)

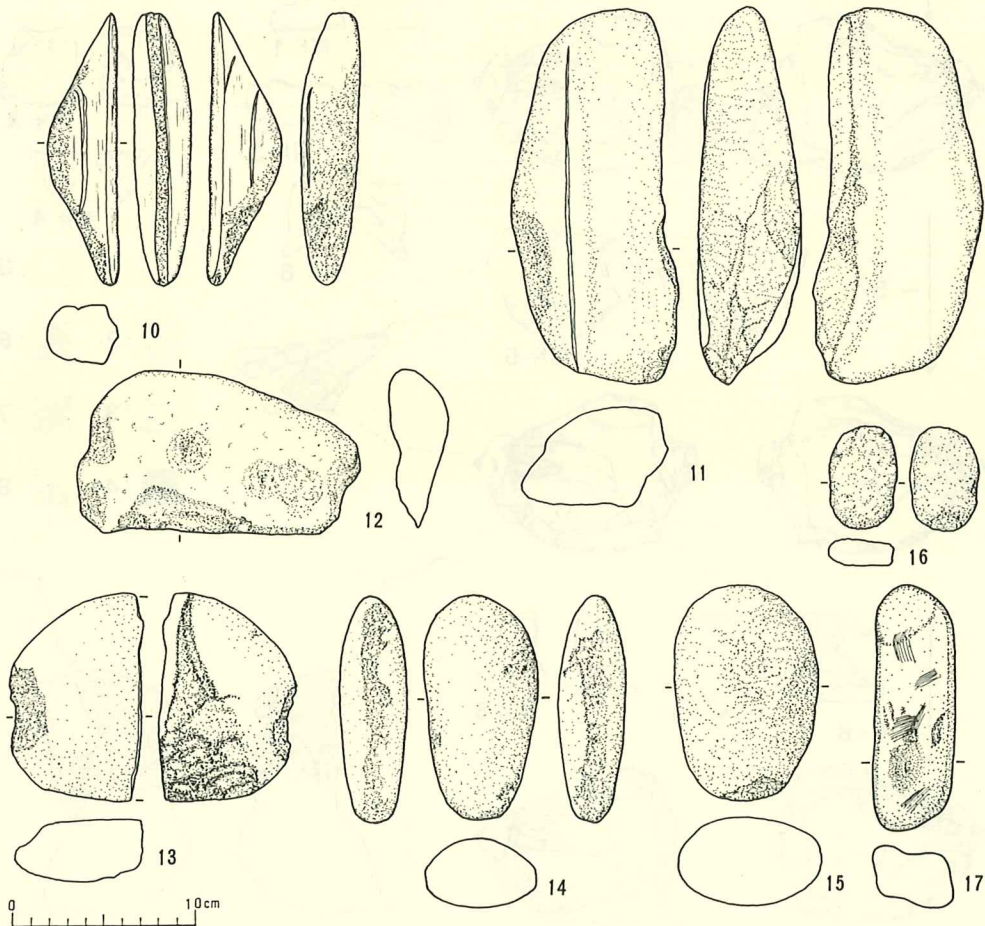
18~22 は両面加工のものであるが、加工の全面に及ぶものはなく、ほぼ周縁部に限られている。20 は鋸歯状の刃部をもつもの、あるいは未製品と思われる。23~32 は片面加工のもので、縦長剥片を利用したもの (23~30) と横長剥片、あるいは円板状の剥片を利用したもの (31・32) とがある。23 と 26 の側面観は大きく湾曲している。28 は、上下両端の欠損部にも剥離が加えられている。30 は、F 地区で多く得られた 1 側縁に礫皮面を残す石器と同種のものであろう。

楔形石器 (33・34)

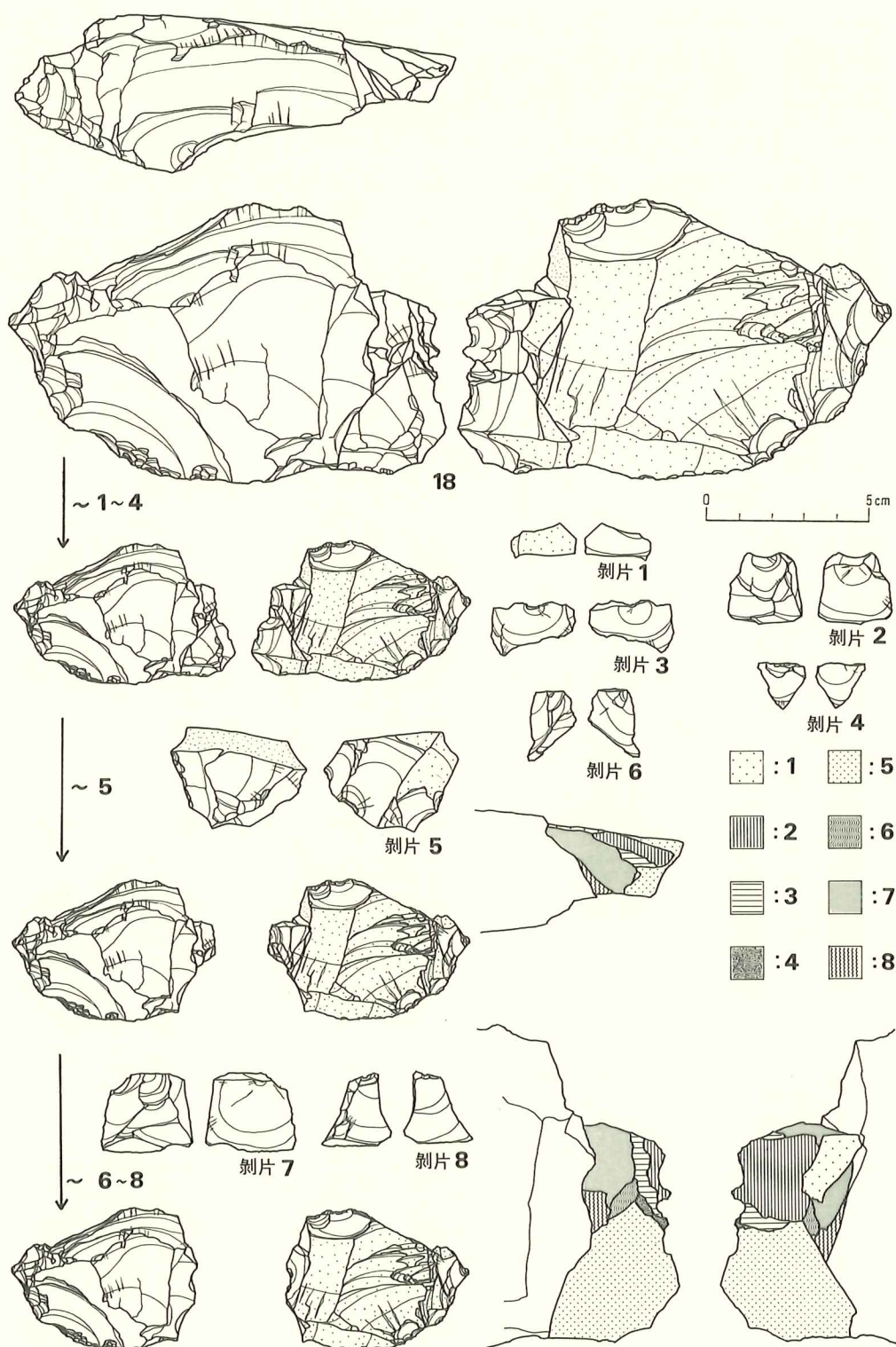
四辺形を呈し、相対する縁辺に細かい剥離痕がある。24 は上下両端が肉厚な状態であり、異質なもののかもしれない。

不定形石器 (35~62)

U フレイク、R フレイクと称せられているものである。本地区の石器の中では多数を占め、



図VI-16 III層出土の石器 (2)



図IV-17 Ⅲ層出土の石器(3) 接合資料